

協同の発見

第310号 2018.9

特集 「ワーカーズコープ論」寄附講座運動② —学生と社会をつなぐ戦略を焦点に—

目次

巻頭言

- 大学寄附講座「ワーカーズコープ論」の広がり「学生ワーカーズ」の可能性 …… 2
藤田 徹(日本労協連副理事長/日本社会連帯機構専務理事)

特集 「ワーカーズコープ論」寄附講座運動②—学生と社会をつなぐ戦略を焦点に—

- 「ワーカーズコープ」の寄附講座の目的と戦略 …… 6
相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)
資料① ◎ワーカーズコープが関わる寄附講座一覧(15回で2コマの単位認定)
◎講義内でのワーカーズコープ論 実績
資料② ◎福島大学 一般公開授業 ワーカーズコープ論チラシ
資料③ ◎各大学でのカリキュラム(案)
▽沖縄キリスト教学院大学 ▽福島大学 ▽和歌山大学 ▽桃山学院大学
- 久留米大学「協同組合概論」2年目の深化 …… 16
高橋 弘幸(センター事業団 九州沖縄事業本部 事務局長/会員)
- 協同労働を学び実践する場を創る—千葉大学労協講座の初年度と目指すもの— …… 39
伊丹 謙太郎(千葉大学 人文公共学府 特任助教)
- 沖縄大学「ワーカーズ・コープ論」寄附講座
4年目の試み—「模擬・団会議」を体験して— …… 53
島袋 隆志(沖縄大学法経学部 准教授)
- 沖縄国際大学キャリア教育科目群の開設と今後の展開
—夏期集中型寄附講座講座「ワーカーズコープ論」実施機関との連帯を踏まえて— …… 61
村上 了太(沖縄国際大学 教授/総研理事)
- お金のためだけの「働くこと」観から、多様な「働くこと」観への変容
—3年目の2018年沖縄国際大学「ワーカーズコープ論」寄附講座から— …… 70
相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)

会員だより

- なりたいものになる。やりたい仕事に就く。—本学学生が福井県内第1号の訪問看護師になった事例から— …… 104
北出 順子(福井大学医学部講師/会員)

ワーカーズコープで働く若手リーダー紹介(Vol.20)

- 私が歩んだ労働者協同組合 …… 108
百瀬 まゆみ(センター事業団 東京三多摩山梨事業本部 西多摩エリアマネージャー兼FUSSA地域福祉事業所 所長)

- 労協連だより 高成田 健 …… 113
研究所だより 利根川 徳 …… 114



巻頭言

大学寄附講座「ワーカーズコープ論」の広がり与学生ワーカーズの可能性

藤田 徹（日本労協連副理事長/日本社会連帯機構専務理事）

ー寄附講座の始まりと現在ー

ワーカーズコープの大学寄附講座の始まりは、2013年に開催された第34回労働者協同組合連合会総会に向けた「学校・会館建設検討委員会」の答申に遡る。（答申作成の座長を藤田が務めていた。）

答申の中では①フリースクールなど若者の学び直しの学校 ②働きつつ学べるワーカーズコープカレッジの設立

③協同労働の理念を柱とした保育士や介護福祉士の養成校の設立などの構想に合わせ ④大学との提携に向けた「寄附講座」の開催が提案された。

この提案の背景には、当時の答申メンバーであり現労協連副理事長の山本幸司氏から、労働組合のナショナルセンターである連合が法政大学と組んで、「寄附講座」を実施し、連合大学院を開設するという話を聴いたところからスタートする。「寄附講座って何!?!」「それはワーカーズコープでも実施できるのか」といった議論に発展し、すぐにも始められる取り組みの1つとして方針に入ったという経緯がある。

答申後すぐに当時の協同総研専務理事であった上平泰博氏と相談し、ワー

カーズコープ運動のもっとも良き理解者の一人であり、地域とともに育つ大学づくりの先頭に立っておられた加藤彰彦沖縄大学学長(当時)に打診してみるようになった。先生に相談するとすぐに趣旨を理解してくださり、全国初の寄附講座が一挙に前に進み始めた。運良く沖縄大学には25年前以上前から労働者協同組合運動に関心を寄せ、管野正純元労協連理事長(故人)とも親交があった小林甫先生がおられ、講座の担当教員を快く引き受けてくださった。まさに人のつながりが寄附講座の開催を後押ししてくれたわけである。

その後、担当教員は島袋隆志先生(沖縄大学法経学部准教授)に引き継がれ、今年度(2018年度)で4回目の寄附講座が開催されるまでになった。ちなみに島袋先生は日本社会連帯機構や沖縄県高齢者生活協同組合の理事でもあり、日本社会連帯機構沖縄県本部の共同代表も務めていただいている。

沖縄大学から始まった寄附講座は、その後沖縄国際大学、久留米大学、沖縄キリスト教学院大学、千葉大学、福島大学、和歌山大学、桃山学院大学、琉球大学の9大学に広がり、来年度か

ら埼玉大学や新潟大学でも検討が始まり、その可能性が日々広がりつつある。

ワーカーズコープの寄附講座が広がる背景は何かー

3年目を迎える沖縄国際大学の夏期集中講座に今年も参加させていただいた。担当の村上了太先生は前日までドイツを訪問されていたそうで相変わらずのタフさに驚いた。村上先生や島袋先生の寄附講座やワーカーズコープに対する熱い想いや丁寧なフォローがあってこそ寄附講座は成り立っている。

沖縄国際大学の講座は、村上先生の講座の目的や受講の構え、そして先生の専門の1つである「沖縄共同売店」の話などを交えてスタートした。詳しい内容は相良孝雄協同総研事務局長の論稿に譲るが改めて「ワーカーズコープ論」という講座の意味と可能性を実感した5日間になった。

◆「単位を取るための目的でしたが、沖縄の様々な課題(高齢者・子供・若者他)のために利潤目的とは違った動機で働く人々をみて、もっと早くワーカーズコープについて学べば就職活動も少し変わっていたと思った。」(経済学部4年)

◆「第1回から15回の講義を通して、働く意味の考え方が変わった。前まではお金のため・生計のために働くと考え

ていた。しかしそれだけではなく、自分の成長のために働くという考えが出た。あと地域についてもっと関心を持つと思った。今回ワーカーズコープ論をとって、こんな学び考えるとは思わなかった。後期から就職活動が始まるので学んだことを活かしていこうと思う。」(法学部3年)

◆「自分の地元の魅力、問題を調べて真剣に考える機会は今回初めてだった。魅力を知って更に好きになれたり、浦添市の問題を少しでも解決したい。自分でも働きたいという気持ちがあった。発表した後のコメントや質問で、さらに深く考えさせられた。」(総合文化学部2年)

◆「今までは働くとは大きな会社があり、その下で雇われて働くものだという固定観念があることに気づきました。問いを立てることの大切さを学ばせてもらいました。」(総合文化学部2年)

◆「当事者意識の大切さを感じました。皆が見て見ぬふり、誰かがやってくると人任せにしていると社会は変わらないんだなと思いました」(経済学部3年)

◆「各自治体の問題が全くかぶらなかったことに驚きました。また課題の解決に関しても様々な取り組み方があってとても興味深く感じました。」(法学部1年)

これはワーカーズコープ論を受講し

た一部の学生の感想だが、多くの学生が受講前と受講後の「労働観」「就職観」の変化や、「地域」への関心や見方の変化を語っている。またある学生は「「働き方」「就職観」などという固い話は学生同士ですることとはほとんどしない。しかし本当は悩んだり、迷ったりしているテーマでもあり、他学部の学生や講師の意見を聞けるこういう場はありがたかった」とつぶやいていた。

大学の就職予備校化や日本経済の発展に寄与することを目的とした大学改革の是非が論じられているが、今講座を通じて見えてきたことは、もっとも肝心な主人公である当の学生自身は「働くことや生きることの意味」についてもっと考えたり、他の人の意見を聞きたがっている姿であった。また「働くこと」と「地域で暮らすこと」が分断されている学生の姿も鮮明になった。「働くこと＝稼ぐこと」稼いだお金で自分の好きな趣味や物を購入するという発想の学生の多さを改めて実感した。(今の社会状況からするとしごく当たり前なのかもしれないが…)

講座の中の講師の実践や生き方、また学生同士のディスカッションを通じてそれらの考えが揺らいでくるのだが、「働くこと」と「地域」や「暮らし」の分断は沖縄でもかなり深刻化しているのではないだろうか。

長々と述べてしまったが、最も伝えたいことは、このワーカーズコープ論

は、何よりもこれからの社会や地域に巣立っていく学生の力になりうるし、協同労働の法制化時代に、ますます求められるカリキュラムになるのではないかという確信めいたものだった。

これからの新しい「キャリア教育」や「地域の活性化と大学」という最新のテーマにも一石を投じるのではないだろうか。ぜひ、協同総研の会員の方々にも改めて御一考願いたい。

－「学生ワーカーズ」設立の可能性を考える－

当初は妄想的に考えていた「学生ワーカーズコープ」という構想だったが、法制化の状況も追い風にし、より具体的につまりモデルをつくる段階に入ったことを感じている。

沖縄国際大学の寄附講義の人気No.1は「がちゆん」という琉球大学の学生がつくった修学旅行生の受け入れをコーディネートしている会社の事例だった。(がちゆんはその後、順調に業績を伸ばし、修学旅行生だけではなく、LGBTや様々な社会問題について、中高生はじめ若者と考えあうカリキュラムを開発しているという)ちなみに「がちゆん」は「がちでゆんたく」という意味の略称であり、沖縄国際大学の学生も複数参加しているという。

同じ学生が協同で仕事をおこし、学生の問題意識がきっかけとなり、会社組織に発展し、しかもそれで生計を立

てているという身近な事例は、受講していた学生にとっても毎年大きな刺激になっている。

東京の一橋大学の学生サークルが、衰退しつつあった地域の商店街とコラボレーションして次々と仕事をおこし、商店街とまちを蘇らせている事例など多くはないが、学生が主体となり、収入を得ながら地域課題を解決している取り組みが出始めている。その事例を目を輝かせながら聞いている学生の姿を見るにつけ、「学生ワーカーズ」構想は決して非現実的ではないという想いを強くしている。全国のワーカーズコープではすでに若者の就労支援を核とする「若者サポートステーション」の運営(全国22カ所)や、生活保護、困窮世帯の子どもを対象とした学習支援(40カ所)、子ども食堂の取り組み(62カ所)、学童保育(186カ所)・児童館(70カ所)などのアルバイトなどを含め、すでに数千人の学生が関わっている。そうした若者に向け学生ワーカーズをつくろうと呼びかける

ことはすぐにでもできることなのではないだろうか。また寄附講座を受講し、現地のワーカーズコープでのアルバイト、ボランティアや就職を希望する若者がいるように、講座の受講生に呼びかけ、先生や大学のご理解をいただきながら、「学生ワーカーズコープ設立準備会」や「ワーカーズコープ研究会」などを大学につくっていくことはできないものだろうかと考えている。

いくつかのモデルができていくと、法制化の動きと重なり一挙に全国の大学に広まる可能性があるのではないかとそれこそ妄想を膨らませている。

ぜひその夢が、正夢になるよう全国の仲間の知恵と力を結集していただきたい。最後になるが、そういったことを広げる意味でも、今回完成した映画「Workers 被災地に起つ」(10月20日から東京のポレポレ東中野でロードショー)の全国上映、大学上映を広げていていただけることを改めてお願いし、巻頭言としたい。

「ワーカーズコープ」の寄附講座の目的と戦略

① 特集テーマの設定理由と掲載内容

本号の特集テーマを『「ワーカーズコープ論」寄附講座運動②—学生と社会をつなぐ戦略を焦点に』とした。「寄附講座運動①」としては、本誌299号(2017年10月)で特集を組んでいる。299号では、2017年に開催した3大学(沖縄大学、沖縄国際大学、久留米大学)での講座を特集したが、2018年には一気に新規開設6大学を合わせ、9大学で講座を開設することとなった。そこで、この新たな動きと開講してきて見えてきた視点を深める必要があると感じ、「寄附講座運動②」とした。もう一つ、本テーマを特集した背景には、299号は在庫がなくなったこともある。今後2019年以降にワーカーズコープ論の寄附講座を新規で開講を検討している大学(新潟大学、埼玉大学等)もあり、寄附講座開講を全国に広げるときの資料として活用する意味でも、特集として組みたいと感じた。

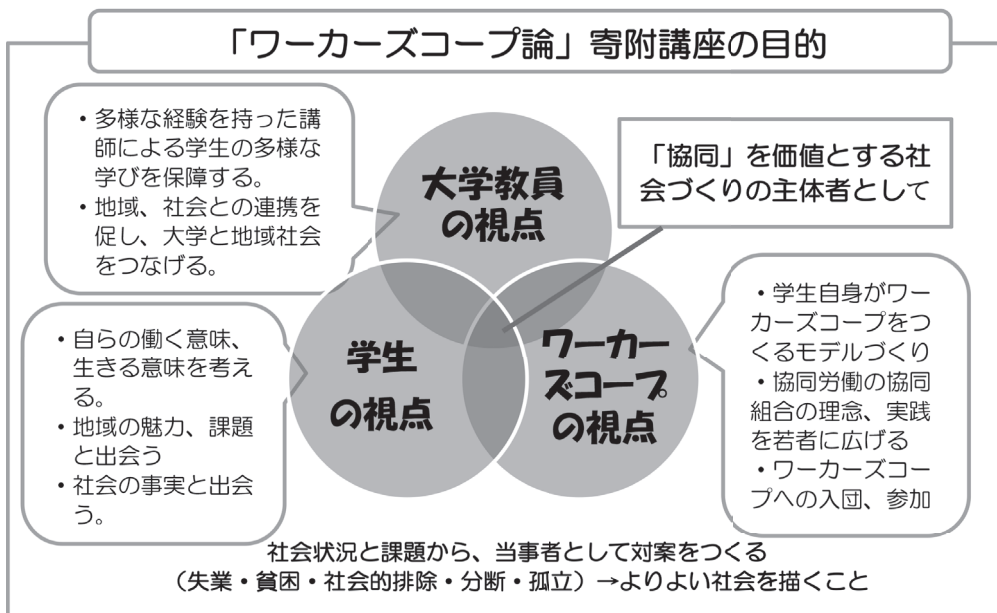
開講するきっかけとして、今までのワーカーズコープや協同総研のネットワークでつながっている先生方に講座開設の働きかけをしてきたこと、そして大学の先生方からも本講座が「地域づくり」「労働観」「当事者として社会に向き合うこと」等、学生の学びにとって、大きな機会になると感じていただいたことが大きい。その意味でも、寄附講座を開催することは、各地域での協同集会、映画「Workers 被災地に起つ」の上映運動とともに、特にワーカーズコープ運動と大学が連帯する上で1つの大きな取り組みであると考えている。

今回の特集テーマのサブタイトルに「学生と社会をつなぐ戦略を焦点に」と付記したのは、学生が社会とリわけ「地域や人と関わること」「社会をつくる当事者として物事を考えること」について難しい環境にあると感じたからである。千葉大学の伊丹先生の掲載原稿にも「地域から孤立した大学と大学生」の記載があり、学生が地域・社会でおきている現実を知ることや考える機会があまりないように感じた。そこで地域社会の現実から出発しながら、学生が社会をつくる当事者として、どのように考え、行動するのかをカリキュラムの中心においている。そして寄附講座を契機として、大学を拠点とした「学び」×「地域づくり」の総合戦略を関係者とともに描く契機にしていきたいと考えている。

本号では、講座を担当された大学の教員の視点から、沖縄大学の島袋隆志さん、沖縄国際大学の村上了太さん、千葉大学の伊丹謙太郎さんにご執筆いただいた。また講座の事務局として関わった視点から、ワーカーズコープの高橋弘幸さんと私が書いている。ここには事務局の視点だけではなく、学びの当事者である学生をふんだんに掲載し、学生の視点も盛り込むことにした。「教員の視点」「事務局(ワーカーズコープ)の視点」「学生の視点」の3つの視点から、寄附講座の学びや成果を浮かび上がらすことを意図して、掲載することにした。

2 寄附講座の目的

「格差」「貧困」「排除」など、社会の分断と孤立は広がる中で、人と人が協同して働き、地域を感じる機会が失われている。ワーカーズコープは「協同労働」と「協同組合」を結ぶことで、「はたらく意味とは何か」「持続可能な地域で住み続けるためにはどうすればいいか」を問い、「地域で共に生き、共に働く」取り組みを全国で進めている。ワーカーズコープ論の寄附講座は、学生自らが学びの当事者として、社会課題と自分の人生観・労働観に向き合うことで、グループをつくりながら、自らが市民や働くものが主人公となる社会づくりへの貢献を大切にしている。講座終了後には学生自らが地域課題や社会的課題を解決するために、協同労働の協同組合による仕事おこしをすることを目的としている。



3 寄附講座を開設するとき、大切にしていること

各大学で寄附講座を開講するときやカリキュラムをつくる際には、大学や教員の皆さんに「協同労働の協同組合」に興味を持つ機会になれるように、担当の先生と徹底的に打ち合わせすることを大切にしている。先生と話すなかで、学生の状況や類似した科目状況を勘案して、各大学のカリキュラムをオーダーメイドでつくっている。例でいえば、沖縄国際大学では、学生の進路状況から「キャリア形成」に重きを置き、千葉大学では実地をすることが学生の学びに効果的であることを検討しながら、ワーカーズコープちばのフードバンクが大学の近くで行なっていることもあったので、「地域の現実から出発すること」を重きにおいた。これから開催する和歌山大学等では、「和歌山県労働局」「和歌山県労働者福祉協議会」がすでに寄附講座を開催しており、内容の差別化が必要なこともあり、「働くことそのものの意味と実践を重視した仕事おこし・地域づくり」を焦点としている。寄附講座を開講するにあたって、担当いただく先生との信頼関係をつくるのが必須であると考えている。そして講義では、学生が問いを意識しながら、インプットだけではなく、講義の半分の時間を使用し、アウトプットを行なう仕掛けをつくっている。【グループディスカッション、グループワーク（「アイスブレイク：講義導入部分で緊張をほぐすこと」。1つのテーマで発表準備をする）、パネルディスカッション、マトリックスワーク（教室に座標軸を置き、議論する）】教員と学生、学生同士でインタラクティブ（双方向的）な講義のあり方が大切であると考えている。

4 ワーカーズコープが持っている社会的資源を通じて、大学・学生との連帯を強める意味でも、寄附講座開設の運動を広げる

全国の大学でワーカーズコープが主催する寄附講座を開講する際に、ハードルになることとして講師の交通費や謝金としての資金面がある。しかしこの間、開催をするなかで、沖縄の大学では、協同集会等の社会連帯運動で出会った在沖のネットワーク等の方々が講師を務めるなど、あまり経費をかけずして開催できるようになってきている。また沖縄大学の島袋隆志さんは、日本社会連帯機構沖縄県本部の共同代表になっていること、村上了太先生は協同総研の理事になるなどの動きが出てきている。福島大学では寄附講座の開催が決まった後、映画「Workers 被災地に起つ」の上映運動に関して、講座を担当する林薫平さんが音頭をとり、6人の方を集めて、「応援する会」を立ち上げ、福島上映に向けて一緒に取り組む存在となっている。来年、ワーカーズコープが運営する福島市に開園予定の小規模保育園の立ち上げにもこの流れを活かせるようにセンター事業団東北事業本部事務局長の小澤真さんとも連携していきたい。

「労働者協同組合法」(仮称)が国会で検討される時代において、若者が寄附講座で協同労働・協同組合に触れ、地域づくりや生きること・働くことを深める機会を、会員の皆さんのご尽力によって、多様に展開できるきっかけに本号がなればと考えている。

(協同総合研究所 事務局長 相良 孝雄)

■資料① 大学とワーカーズコープ(協同労働の協同組合)の連携、実績一覧

1、ワーカーズコープが関わる寄附講座一覧(2コマの単位認定)

年度	大学名	大学担当教員	時期	備考(講座名他)
2015～2018年 (4回)	沖縄大学	島袋隆志	夏期集中	「ワーカーズコープ論」
2016～2018年 (3回)	沖縄国際大学	村上了太	夏期集中	「ワーカーズコープ論」
2017年度～2018 年度(2回)	久留米大学	伊佐淳	前期	「協同組合概論」
2018年度 (初回)	琉球大学	高畑明尚	春季集中	2019年2月開講
2018年度 (初回)	沖縄キリスト教 学院大学	玉城直美	前期	「ワーカーズコープ論」-働くこと と地域づくりを考える-
2018年度 (初回)	福島大学	小山良太 林薫平	後期	後期講座 一般公開授業「ワーカーズコープ論」 協同で起こす仕事と地域づくり
2018年度 (初回)	千葉大学	伊丹謙太郎	夏期集中	3ターム(8月上旬)開講「地域で 仕事をおこす」
2018年度 (初回)	和歌山大学	足立基浩 岡田真理子 金川めぐみ	後期	「協同労働と働くことの意味」
2018年度 (初回)	桃山学院大学	津田直則	後期	経済学特講：社会的連帯経済とワー カーズコープ

2019年以降 検討

2019年度	埼玉大学	安藤聡彦	この間ワーカーズコープ全国事務局員候補者が入団している縁で開催予定。
2019年度	新潟大学	渡邊登	「にいがた協同ネットワーク」の方々が開演者の予定で進めている。

2、講義内でのワーカーズコープ論 実績

日程	大学名(講座名)
2016年1月(3日間)	東京未来大学子ども心理学部「講座+1日施設・企業体験」(講義+実習)
2016年1月(3日間)	千住介護福祉専門学校「地域の現状と住民主体の課題解決・多様な実践事例」(講義+実習)
2016年6月21日	立教大学コミュニティ福祉学部藤井敦史ゼミ報告
2016年6月28日	立教大学「NPO論」(藤井敦史教授)
2016年7月12日	関西大学「協同組合論」(青木美紗助教)
2016年12月9日	立教大学「市民活動の組織とマネジメント」(原田晃樹教授)
2017年1月17日	山梨県立大学「就労支援論」(下村幸仁教授)
2017年2月6日	福山市立大学「市民自治論」「都市社会学」(前山総一郎教授)
2017年5月22日	立教大学「市民参加論」(藤井敦史教授)
2017年6月22日	明治大学「協同組合論」(大高研道教授)
2017年7月14日	京都大学「協同組合論」(辻村英之教授、北川太一教授)
2017年8月7日	山形大学夏季集中「森林文化論」(菊間満名誉教授)
2017年10月	山梨県立大学「就労支援論」(下村幸仁教授) 3日、10、17、24、31日の5日間
2017年11月8日	法政大学「協同組合論」(阿高あや JCA 副主任研究員)
2017年11月24日	駒澤大学「NPO論」(松本典子准教授)
2017年12月18日	三重大学「協同組合論」(青木雅生准教授)
2018年2月16日	琉球大学「実践経済学」(高畑明尚教授)
2018年4月14日	法政大学大学院連帯社会インスティテュート「連帯社会とサードセクター」(栗本明教授)
2018年5月17日	名古屋市立大学「現代社会における『人と地域のつながり』」(向井清史特任教授)
2018年6月6日	法政大学「協同組合論」(阿高あや JCA 副主任研究員)
2018年7月5日	立命館大学 産業社会学部リム・ボンゼミ報告(リム・ボン教授)
2018年7月19日	東京農業大学「グローバル経済論」(野口敬夫准教授)

■資料②

福島大学 一般公開授業 ワーカーズコープ論「協同で起こす仕事と地域づくり」チラシ

福島大学共通領域 地域論 1

一般公開授業

(無料)

ワーカーズコープ論

協同で起こす仕事と地域づくり

日時

2018年10月3日 ~ 1月23日
(毎週水曜日 10:20 ~ 11:50)

場所

L 講義棟 L-4 教室

対象

学生、一般の方
(どなたでも参加できます)

料金

無料 (事前申込不要)

—お知らせ—

福島大学駐車場は有料となりますが、本公開授業で来学される方については無料です。無料処理手続きについては当日ご説明いたします。

10/10



田中 羊子 ワーカーズコープ 理事長

『ワーカーズコープ概論』

10/17



岡元 ルミ子 ワーカーズコープ 九州沖縄 副本部長

鹿児島県霧島市国分地域で、高齢者の介護や子どもたちの居場所、働きづらさを抱える若者の働く場づくりなど全世代の様々な困難と向き合い居場所と出番をつくる実践。

10/31



古澤光/東梅麻奈美 ワーカーズコープ 東北事務局次長/大槌所長
映画「Workers 被災地に起つ」の前半を視聴、東日本大震災で甚大な被害の出た大槌町で、被災当事者が地域住民に寄り添い、地域に必要な居場所をつくる実践。

11/14



池田道明/坂本典孝 ワーカーズコープ 亘理所長/登米所長

映画「Workers 被災地に起つ」の中盤を視聴、亘理町で被災当事者が協同労働と出会い、直売所から食堂を立ち上げ、障がい者とともに働く場をつくる実践。登米市の困窮者相談の当事者が働く実践、暮らし仕事応援隊SKETCHAの実践

11/21



田中 夏子 都留文科大学 非常勤講師 日本協同組合学会 会長

『世界のワーカーズコープ運動、協同組合の価値』

11/28



竹森 幸太 ワーカーズコープ 登米副所長

映画「Workers 被災地に起つ」の後半を視聴、若者の林業への挑戦から、限界集落でもある鱒淵地区の住民と共に行う仕事おこしと地域づくりの実践。

12/5



佐々木禎史/木下史郎 ワーカーズコープ 太白だんだん/渋谷RINGS

仙台や東京で精神障がい等の様々な困難を抱える仲間たちが仕事や文化を通じて活躍する実践。困難を力に、当事者による仕事おこしの拡がり。

12/12



田嶋 康利 ワーカーズコープ 連合会 専務

『転換期にある日本と世界、SDGs、労働者協同組合(仮)法制化』

12/19



国仲 瞬 株式会社がちゆん 代表取締役社長兼CEO

『若者が地域で仕事をおこす』

【お問い合わせ】

ワーカーズコープ東北事業本部 小澤真 〒980-0811 仙台市青葉区一番町4-7-17-608 022-398-4975 ozawa-makoto@roukyou.gr.jp
福島大学 経済経営学類 林 薫平 〒960-1296 福島市金谷川1 024-548-8353 e129@ipc.fukushima-u.ac.jp

■ 資料③

各大学でのカリキュラム(案)

(9月18日現在でカリキュラムが確定している大学を掲載)

(1) 沖縄キリスト教学院大学

授業科目名	2単位 (前期)	担当教員
ワーカーズコープ論 (Theory of Workers Co-operative) -働くことと地域づくりを考える-		
<p>授業の計画</p> <p>第1回 ワーカーズコープとは、協同労働の働き方とは①</p> <p>第2回 ワーカーズコープとは、協同労働の働き方とは②</p> <p>第3回 九州、沖縄でのワーカーズコープ</p> <p>第4回 沖縄のワーカーズコープの現場から (名護の現場の紹介、保育・若者就労)</p> <p>第5回 沖縄のワーカーズコープの現場から (那覇での障がい児の居場所、清掃現場)</p> <p>第6回 沖縄のワーカーズコープの現場から (高齢者生協の配食サービスの取り組み)</p> <p>第7回 法制化時代の協同労働の社会づくりの可能性</p> <p>第8回 生活困窮者と協同労働の協同組合運動</p> <p>第9回 沖縄の文化・財産から、若者が仕事をおこすこと (がちゆんの取り組み)</p> <p>第10回 沖縄医療生協の実践から、地域をつくる主体を考える。</p> <p>第11回 沖縄物産企業連合の取り組みからみる、沖縄の財産から仕事をつくる。</p> <p>第12回 若者の視点からみる協同労働の価値</p> <p>第13回 地域の課題から地域づくり、仕事おこしを創造する。 (ディスカッション、グループ討議①)</p> <p>第14回 仕事おこし・地域づくりのアクションプラン発表 (それぞれのグループ発表)</p> <p>第15回 まとめ (働くこととは、地域づくりとは)</p>		

(2) 福島大学

	日程	内容	担当(仮)	備考
1	10/ 3	ガイダンス	小山先生・事務局	ワーカーズコープの紹介 (DVD) を含む。
2	10/10	ワーカーズコープ概論	日本労働者協同組合 (ワーカーズコープ) 連合会センター事業団 理事長 田中羊子さん	協同労働の 30 有余年の歴史が培った理念・実践について、特に震災後に設置した東北復興本部の 7 年間の取り組みから。
3	10/17	協同労働①	センター事業団 九州沖縄事業本部 副本部長 岡元ルミ子さん	鹿児島県霧島市国分地域で、高齢者の介護や子どもたちの居場所、働きづらさを抱える若者の働く場づくりなど全世代の様々な困難と向き合い居場所と出番をつくる実践。
4	10/31	協同労働②	センター事業団 東北事業本部 事務局次長 古澤光さん 大槌事業所長 東梅麻奈美さん	映画「Workers 被災地に起つ」の前半を視聴、東日本大震災で甚大な被害の出た大槌町で、被災当事者が地域住民に寄り添い、地域に必要な居場所をつくる実践。
5	11/14	協同労働③	センター事業団 東北事業本部 亘理事業所長 池田道明さん 登米地域福祉事業所 所長 坂本典孝さん	映画「Workers 被災地に起つ」の中盤を視聴、亘理町で被災当事者が協同労働と出会い、直売所から食堂を立ち上げ、障がい者とともに働く場をつくる実践。 登米市の困窮者相談窓口に来た当事者が働く実践、暮らし仕事応援隊 SKETCHA の実践
6	11/21	世界のワーカーズコープ運動、協同組合の価値	日本協同組合学会 会長 田中夏子さん	世界の協同組合、ワーカーズコープの動向と、日本の協同組合の存在意義
7	11/28	協同労働④	センター事業団 東北事業本部 登米地域福祉事業所 副所長 竹森幸太さん 鱒淵地区の住民の方 (調整中)	映画「Workers 被災地に起つ」の後半を視聴、若者の林業への挑戦から、限界集落でもある鱒淵地区の住民と共に働く仕事おこしと地域づくりの実践。
8	12/ 5	協同労働⑤	センター事業団 東北事業本部 みんなのおうち太白だんだん 所長 佐々木禎史さん センター事業団 東京中央事業本部 WORKER' S NET RINGS 所長 木下史郎さん	仙台や東京で精神障がい等の様々な困難を抱える仲間たちが仕事や文化を通じて活躍する実践。困難を力に、当事者による仕事おこしの拡がり。
9	12/12	転換期にある日本と世界、SDGs、協同労働法制化	日本労働者協同組合連合会 専務理事 田嶋康利さん	金融資本主義、格差社会、国連 SDGs が提起する意味と協同労働法制化
10	12/19	若者が地域で仕事をおこす	株式会社がちゅん代表取締役社長 国仲瞬さん	沖縄で学生が立ち上げた修学旅行の受け入れ事業の実践から
11	1/ 9	福島での仕事おこしの課題と展望	福島大学 教授 小山良太さん	福島県内の課題と地産地消ネットワークの取り組み、(夢ワイン等)、仕事おこしへの期待等
12	1/16	地域で協同で働くこととは	協同総合研究所 事務局長 相良孝雄さん センター事業団 東北事業本部 事務局長 小澤真さん	これまでの講義を受けて学生に働くことの意味や価値を考える講義として
13	1/23	まとめ、私と福島	参加者によるレポート発表 小山先生、事務局	事前に私と福島についてのレポート作成

(3) 和歌山大学

1	【オリエンテーション】 ワーカーズコープを大学で学ぶ意味	足立 基浩、岡本 章寛、田代 明 (和歌山大学) (センター事業団関西)
2	【ワーカーズコープとは①】 ワーカーズコープの歴史・理念	藤田 徹 (センター本部 人材戦略部長)
3	【ワーカーズコープとは②】 ワーカーズコープの全国的な実践・事例① (地域の課題を通じて仕事をおこす)	藤田 徹 (センター本部 人材戦略部長)
4	【ワーカーズコープとは③】 ワーカーズコープの全国的な実践・事例② (被災地で被災者自身が仕事をおこす)	田中 羊子 (センター事業団 理事長)
5	【世界の経済のあり方から考える協同労働】 社会的経済・連帯経済の世界的潮流とワーカーズコープ	津田 直則 (協同総合研究所 顧問)
6	【関西のワーカーズコープ①】 地域における協同総合福祉拠点づくりの実践	奈良西事業所(西内 武志)、草津みんなの家(田中 紀代子) (労協センター事業団関西)
7	【関西のワーカーズコープ②】 若者たちによるワーカーズコープ	馬場 義竜 (はんしんワーカーズコープ)
8	【関西のワーカーズコープ③】 中山間地域での仕事おこしと地域づくり	但馬地域福祉事業所(上村 俊雄) (センター事業団関西)
9	【地域課題から仕事おこしへ①】 中山間地域での実践	伊藤 剛 (センター事業団 事業推進本部)
10	【地域課題から仕事おこしへ②】 若者による地域課題解決と仕事おこし	杉田 健一 (NPO 法人「縁活」おもや施設長)
11	【地域課題から仕事おこしへ③】 障がい者とともに、包摂する社会づくりを目指して	山本 耕平 (社会福祉法人一麦会 副理事長)
12	【グループワーク①】 地域の課題・自分の困難から地域づくり・仕事おこしを考える (準備)	岡本 章寛、田代 明、相良 孝雄 (センター事業団関西) (協同総研)
13	【グループワーク②】 地域の課題・自分の困難から地域づくり・仕事おこしを考えよう (発表)	岡本 章寛、田代 明、相良 孝雄 (センター事業団関西) (協同総研)
14	【地域づくりと働くことの意味と目的】	相良 孝雄 (協同総合研究所)
15	【まとめ】	岡本 章寛、田代 明、足立 基浩 (センター事業団関西、和歌山大学)

(4) 桃山学院大学

回	担当者	テーマ
1	津田 直則	社会的連帯経済と非営利組織
2	津田 直則	資本主義パラダイムと新しい社会のパラダイム
3	藤田 徹	ワーカーズコープの歴史と理念
4	岡本 章寛	映画『Workers 被災地に起つ』上映（試写会）
5	田中 羊子	東北復興と住民主体のまちづくり、ワーカーズコープづくり
6	伊藤 剛	中山間地域の地域おこし・仕事おこし（林業・再生可能エネルギー）
7	酒井 厚行× 西内 武志× 田中 紀代子	関西地域でのワーカーズコープの実践① （奈良西事業所（障がい者とともに）、草津みんなの家（地域福祉総合拠点））
8	馬場 義竜× 酒井 厚行	関西のワーカーズコープの実践② （はんしんワーカーズコープ）
9	藤井 絢子	地域で循環するコミュニティ経済を目指して
10	武村 幸奈	地域の財産から、若者自身が仕事をおこすこと
11	大阪高齢協	寝たきりにしない、させない。「仕事」「福祉」「生きがい」を自らの手で
12	田代 明 岡本 章寛	地域の課題、自分の困難から地域づくり、仕事おこしを考えよう①（ワークショップ）
13	田代 明 岡本 章寛	地域の課題、自分の困難から地域づくり、仕事おこしを考えよう②（ワークショップ）
14	相良 孝雄	協同で働くこととは（全国のワーカーズコープ論寄附講座から）
15	津田 直則	まとめ

久留米大学 「協同組合概論」 2年目の深化



高橋 弘幸

(センター事業団 九州沖縄事業本部 事務局長/会員)

1 はじめに

(1) 「協同組合概論」開講の経緯

ワーカーズコープ・センター事業団の寄附講座で行われている久留米大学経済学部「協同組合概論」は、2017年度から始まりました。ワーカーズコープ・センター事業団藤田徹理事長(当時)などが寄附講座開講の相談を、2014年「いま、『協同』が創る2014全国集会in九州沖縄」や2016年「九州・沖縄協同集会」の実行委員になっていただいた久留米大学経済学部教授・伊佐淳先生にしたことに始まります。

その中で、①かつて経済学部で「協同組合論」が開講されていたが、当時開講されていない状況、②全国的に「協同組合論」を開講する大学が少なくなってきたこと、③協同組合が学生たちの就職先の選択肢となっていることから、協同組合・協同労働の知識を身につけていたほうが望ましいという理由で「協同組合概論」として開講されることになりました。

開講にあたって、2016年4月より、ワーカーズコープ・センター事業団九州沖縄事業本部の松垣芳伸副本部長(当時、現本部総務部副部長)と久留米事業所(当時)の田中秀雄所長が中心となって開講に向けて準備を進めました。2016年8月からは、松垣副本部長に代わり九州沖縄事業本部に赴任した高橋弘幸事務局次長(当時)が引き継ぎ、田中所長とともに準備を進めてきました。

各協同組合のご協力もあり、本講座の講師陣には九州大学・横川洋名誉教授をはじめ、

2012年IYC(国際協同組合年)や上記2つの協同集会で繋がった各種協同組合の職員(幹部・教育研修担当・広報担当・組合員活動担当など)が担っていただきました。

(2) 2017年度「協同組合概論」の概要

(詳細は、高橋弘幸.2017.「久留米大学『協同組合概論』の取り組み」協同総合研究所『協同の発見』299号:59-71.をご参照ください。)

1年目となる2017年度は、前期日程の毎週金曜日3限目(13:10~14:40)に実施しました。当初20~30名程度だと思われていた履修者が81名となり、多くの学生が新しく始まる講座に興味を示してくれました。履修者の内訳は、2年生36名(44.4%)・3年生22名(27.2%)・4年生23名(28.4%)という構成となりました。実際に講義を受けた学生は全15回累計で886名となり、平均すると1回当たり59名(全体の72.8%)でした。

講座は、はじめに、これから始まる講座の目的や全体の流れを説明。第2回目に九州大学・横川洋先生より協同組合全般の説明をしていただきました。3回目~10回目までは、生活協同組合(エフコープ・グリーンコープ)や農業協同組合(JA福岡中央会・JAくるめ)・森林組合・漁業協同組合・信用金庫が講義を受け持ち、それぞれの組織の成り立ち・理念・事業活動などを学生に伝えていただきまし

た。11回目~14回目は、協同労働の協同組合をテーマに、センター事業団九州沖縄事業本部・筑後佐賀エリア・日本社会連帯機構・福岡県高齢者福祉生活協同組合が協同労働を伝え、15回目の講義でテストを実施しました。

1年目の特徴としては、株式会社やNPO法人とは異なる協同組合という組織を知ってもらい、各種協同組合や協同労働の協同組合の活動を知ってもらうことを主眼に置いた内容で、学生の中で協同組合への認識が一定程度得ることできたのではないかと感じるものでした。一方、協同組合への理解を深める余地は十分にあり、そこを改善していく必要性があったと考えています。将来的に、福岡県内で協同組合インターンシップを構築していくことや、学生による協同組合・協同労働組織づくりを目指す上で、理解を深める工夫が2年目の大きな課題として残りました。

2 2018年度「協同組合概論」における変更点

上述の通り、福岡県内での協同組合インターンシップ実施や学生による協同組合・協同労働づくりを目指していく上で、「協同組合概論」の中で協同組合・協同労働への理解をより一層深めていくことが課題として浮き彫りとなりました。この課題に対して、担当教員の伊佐淳先生やワーカーズコープ・センター事業団ちくご広域まちづくり事業所の田中秀雄所

長、久留米市市民活動サポートセンター「みんくる」の池田一生センター長と検討する中、次のような変更を図りました。

(1) 理解促進のために講義日程を組み替え

2018年の「協同組合概論」を履修・受講する学生は、昨年度同様、協同組合のことを知らない人が多いと想定されるため、協同組合セクターの中で、テレビコマーシャル・インターネット広告などで

社会への露出の多い生活協同組合(エフコープ生活協同組合・グリーンコープ生協ふくおか)を講義序盤に担当していただき、協同組合への一定の理解を得た上で、農林水産系の協同組合→信用金庫→協同労働の協同組合へと繋がるよう工夫をしました。また、本講義は前期をかけて行われるため、第14回目は、これまでの講義内容をまとめ、協同組合・協同労働を総復習する機会としました。

表1. 久留米大学経済学部2018年前期「協同組合概論」の日程

日付	内容	担当	担当者
4月13日	ガイダンス	伊佐 淳 久留米大学教授・ワーカーズコープ・センター事業団	
4月20日	協同組合とは	横川 洋 九州大学名誉教授	
4月27日	生活協同組合①	エフコープ生活協同組合	組合員活動部 ネットワーク推進課 沖 一郎
5月11日	生活協同組合②	グリーンコープ生協ふくおか	理事長 三原 幸子 福岡・南地域部長 竹島 雅俊
5月18日	森林組合	八女森林組合	参事 北原 徳己
5月25日	農業協同組合①	福岡県農業協同組合中央会	JA 福岡中央会 教育センター センター長 脇山 健
6月1日	農業協同組合②	久留米市農業協同組合	企画広報課長 竹下 和利
6月8日	漁業協同組合	福岡有明海漁業協同組合連合会	参事 太田 豪
6月15日	協同組織金融機関	九州北部信用金庫協会	専務理事 篠原 幸治
6月22日	協同労働①	ワーカーズコープ・センター事業団	九州沖縄事業本部 事務局長 高橋 弘幸
6月29日	協同労働②	ワーカーズコープ・センター事業団	筑後佐賀エリア エリアマネージャー 武元 春美
7月6日	協同労働③	ワーカーズコープ・センター事業団	国分地域福祉事業所ほのほの 所長 岡元 ルミ子
7月13日	協同労働④	福岡県高齢者福祉生活協同組合	専務理事 稲月 秀雄
7月20日	講義まとめ	ワーカーズコープ・センター事業団	九州沖縄事業本部 事務局長 高橋 弘幸
7月27日	まとめレポート (テスト)	伊佐淳 久留米大学教授・ワーカーズコープ・センター事業団	

(2) 協同組合の定義・価値・原則を強調

協同組合への理解を深めていくために、2018年度は講義冒頭に「協同組合の定義・価値・原則」に触れていただき、その上で各協同組合の成り立ち・理念・事業活動をお話していただくよう各講師に要請しました。週1回ペースで行われる本講座は、各回の間に時間があるため、「協同組合の定義・価値・原則」を繰り返し強調することで、協同組合の理解定着を図りました。さらに、その後の各協同組合の話に移ったあとも、なぜ協同組合が様々な活動をするかの理解促進にもつながりました。

(3) 最終レポート(テスト)の内容変更

昨年度においては、第15回目「まとめレポート(テスト)」で記述式3問を出題。「協同組合への理解」・「協同労働への理解」を聞くとともに、3問目に「もしあなたが協同組合で働くなら、どこの協同組合で働き、どのような事業をつくりたいか?(もしくは、どのような事業で働きたいか)」を出題しました。学生からは豊かなアイデアのある回答が出てきて、非常に興味深い内容でした。この出題をより深めていくために、2018年度では、「協同組合への理解」・「協同労働への理解」は昨年と同じ出題内容としましたが、3問目は「もしあなたが協同組合をつくるならば、どこで、どのようなことを行うか述べよ。さらに、それを行うことで、組合員・地域にどのよう

な貢献ができるか、SDGsにおけるどの分野に貢献できるかも述べよ。」という内容に変更しました。この出題の狙いとしては、①社会と協同組合を関連させて考えてほしい、②国連が定めるSDGs(持続可能な開発目標)はその実現に向けて世界的に活動が取り組まれているので理解を深めてほしい、③協同組合だけでなく企業・NPO等で働くにしてもSDGsは仕事・活動に関わることなので関連付けて社会を考えてほしい、④協同組合で「働く」ではなく「つくる」にすることでどのような発想が出てくるか知りたい、という4点の目的を持って出題しました。なお、この出題内容は、第14回目の「講義まとめ」で事前告知し、第15回「まとめレポート(テスト)」当日に考えてきたものを答えてもらうようにしたことで、1週間かけて様々な回答を得ることができました。

3 2年目の状況

(1) 履修者の状況

昨年度の講義レポートの感想などを通じて、履修者が増加することが予測されましたが、2018年度は履修者98名(昨年度比+17名・+21ポイント)となり、教室も広い会場に移動して実施することになりました。履修者の構成としては、2年生40名(40.8%)・3年生48名(49.0%)・4年生10名(10.2%)の構成になりました。履修者構成に関しては、昨年度と異

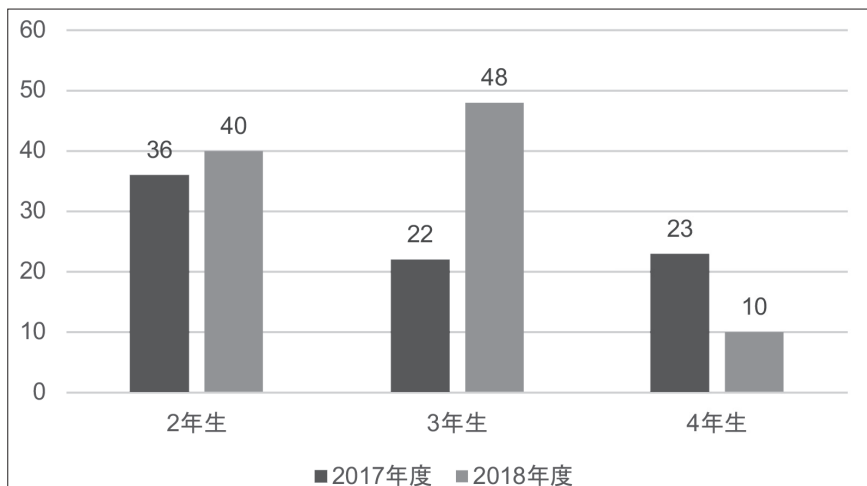


図1 履修者構成の比較

なり、3年生が最も多くなり増加率も1.8倍になりました。その要因として推測されるのが、①他の講座と異なりオムニバス形式の内容で珍しい、②昨年度受講した学生が口コミで本講座の周知が広がった、ことが挙げられるのではないかと考えています。一方、4年生の履修が大きく減少しておりますが、その要因として、出席・毎回の講義レポートを単位認定で重視していることから、就職活動中の4年生に敬遠されたのではないかと推測されます。

(2) 受講者の状況

履修者の状況に対して、実際に講義を受講した学生の数をみていくと、履修者が増えた分、受講者数も大きく増加しました。2018年度は、ガイダンスでの出席はとらなかったため、全14回での累計で1010名の学生が受講したことが分かりました。昨年度のガイダンスを除い

た受講者数は817名であるため、昨年度より193名多い受講者数となります。また、各回の受講者数も72.1名で、昨年度より13.7名増加しました。

一方、履修者に対しての平均受講者数で割り出される出席率は73.6%となり、昨年度全15回の出席率72.8%から大きく変わらない状況となりました。

今年度の傾向として、第4回・第11回・第12回講義の受講者数が落ち込む傾向にありました。その要因として、第4回はゴールデンウィーク明け最初の講義であったこと、第11回・第12回は台風7号の接近と西日本豪雨をもたらした天候不順によるものだと考えられます。一方、それ以外の講義では、安定して70名半ばから80名の受講者数で推移してきたことが分かります。

(3) 2018年度の講座の流れ

第1回「ガイダンス」では、冒頭、伊

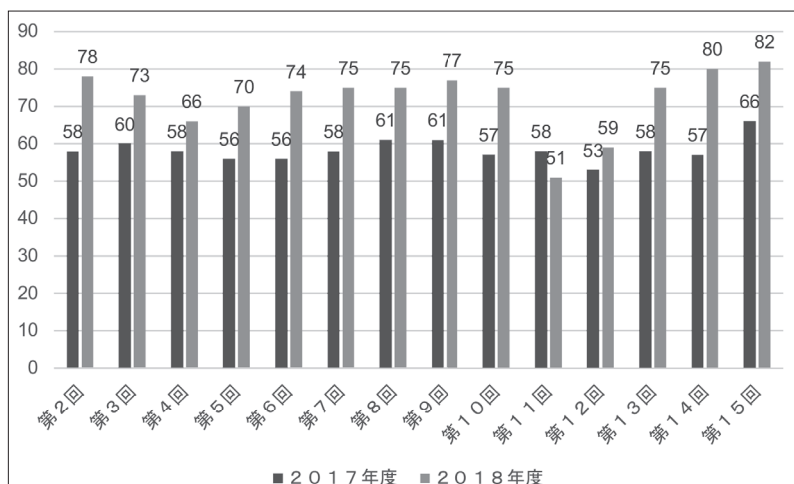


図2 受講者数の推移と比較

佐淳教授より講座の趣旨に関する説明が行われました。その上で、ワーカーズコープ・センター事業団より講座事務局を担う田中秀雄所長・池田一生センター長から自己紹介を行い、講座全体の流れについて高橋弘幸事務局長から説明を行いました。

第2回「協同組合とは」では、九州大学名誉教授の横川洋先生より講義。世界・日本における協同組合の歴史・動きなどの説明のほかに、福岡県豊前市の漁業協



協同組合概論の講義の様子(第14回目)

同組合の取り組みを紹介されました。第3回「生活協同組合①」は、エフコープ生活協同組合・組合員活動部の沖一郎さんより講義していただきました。エフコープ生協設立経緯を社会問題と関連付けながら説明されました。加えて、組合員・地域の多岐にわたるニーズに対応し、高齢者福祉・子育て支援の展開・買い物困難地域での移動販売などの取り組みも紹介していただきました。第4回「生活協同組合②」では、グリーンコープ生協ふくおかの三原幸子理事長と福岡・南地域部の竹島雅俊部長より講義。三原理事長からグリーンコープの成り立ちや、主婦を中心とする組合員の想いとそれを実践する商品・運営へのこだわりなどについて説明していただきました。竹島部長からは昨年発生した九州北部豪雨の被災地での復興支援活動を紹介。学生の中で多くの共感が広がりました。

第5回「森林組合」では、福岡八女森

林組合の北原徳己参事から講義をしていただきました。森林が担う社会的役割や日々の仕事と意識していることなどをお話していただき、少子高齢化による後継者不足の問題と「緑の雇用」制度の概要など、国土を守る林業の担い手不足が大きな問題となりつつあることを強調されていました。第6回「農業協同組合①」は、JA福岡中央会教育センターの脇山健センター長より講義。農業協同組合の成り立ちからJAグループの概要、組合員活動の動きについて説明していただきました。第7回「農業協同組合②」では、JAくるめ企画広報課の竹下和利課長より、久留米におけるJAの活動について説明していただきました。また、映像を活用して説明や、農業だけでなくガソリンスタンドなど多岐にわたる事業展開を行う意味についてもお話していただきました。

第8回「漁業協同組合」では、福岡県



第6回「農業協同組合①」で
JAについて説明する脇山健さん
(福岡県農業協同組合中央会教育センター・
センター長)

有明海漁業協同組合連合会の太田豪参事より講義をしていただきました。なぜ漁業と協同組合に親和性があるのか、境界線のない海だからこそ起こる出来事、有明海の特産物の特徴などを通じて漁業協同組合の活動についてお話していただきました。第9回「協同組織金融機関」は九州北部信用金庫協会の篠原幸治専務理事からの講義。産業組合に原点を持つ信用金庫の成り立ちから、中小企業や地域を支える金融機関としての役割、「銀行に成り下がらない」とする信用金庫の信念についてお話していただきました。

第10回「協同労働①」はワーカーズコープ・センター事業団九州沖縄事業本部の高橋弘幸事務局長より講義。協同労働という働き方を通じて他の協同組合との違いを解説するとともに、法制化が目前に迫っている状況と協同労働がもたらすソーシャル・インパクトを説明。第11回「協同労働②」では同じくセンター事業団筑後佐賀エリアの武元春美エリアマネージャーから「主婦の仕事おこし」と題してお話していただきました。協同労働との出会いや、仕事おこしの実践を伝えてもらい、学生とも積極的にコミュニケーションを図りながら講義を進めてもらいました。第12回「協同労働③」は同じくセンター事業団国分地域福祉事業所ほのぼのの岡元ルミ子所長から講義がありました。協同労働を通じて地域社会を持続可能で循環し、誰もが育ち働くことができるようフードバンクや子ども

食堂の実践を織り交ぜながらお話いただきました。第13回「協同労働④」は福岡県高齢者福祉生活協同組合の稲月秀雄専務理事からの講義でした。福岡高齢協の成り立ち・理念・活動の説明をしていただくのはもちろん、現代社会を取り巻く状況、とりわけ福祉に関する今後の動きを分かりやすくお話していただき、学生にとって社会を学び考える機会となりました。第14回「講義まとめ」は、センター事業団の高橋事務局長から全体の講義を振り返り、特に①協同組合の特徴・②協同労働の特徴・③SDGsに関して説明しました。第15回目は上述の通り、記述回答方式で①協同組合への理解、②協同労働への理解、③協同組合とSDGsに関する提案、の3問を出題し、解答してもらいました。

4 協同組合・協同労働への理解

本講座では、第2回～9回までを各種協同組合について学び、第11回～13回を協同労働の協同組合に焦点を当て講義を行いました。その中で、学生がこの講座をどのように感じ、協同組合・協同労働を理解したか、講義レポートを通じて知っていきたいと思います。

全体的な印象として、協同組合・協同労働に対してポジティブな印象を持つ学生が圧倒的に多かったです。その上で、利益一辺倒ではなく、非営利・協同・地域への貢献という面への共感が多く見受

けられました。さらに、実際に協同組合・協同労働で働く・活動する講師を通じて、協同組合に参加する人に関心を寄せる感想も多かったです。

(1) 協同組合に対する理解～協同組合の大きさとあたたかさ～

本講座の中で、毎回講義終了後に学生から講義レポートを記入してもらっています。毎回の講義レポートで特徴的なレポートが書かれています。協同組合全体への理解を図る上で、第14回「講義まとめ」の中で、協同組合全体に対して感じたこと、考えたことを記入してもらいました。

その中で、多くの学生が、相互扶助・非営利性・民主的運営・組合員や地域への貢献などを学び、社会における協同組合の必要性や社会をより良くしていく存在であるとの認識が広がっていることが明らかになりました。さらに、講義を通じて、協同組合に関わる人たちのパーソナリティに触れ、協同組合の理念・理論と実践がしっかり結びついていることを感じる学生も多く見受けられました。

本稿では、特徴的なレポートを抜粋し掲載をさせていただきます。

【第14回講義レポート「講義全体の感想(協同組合への理解)」】

- 自分のためになるようにと思って協同組合で活動しているわけじゃなく、こういう活動をしたらもっと地域が、環

境が人・モノが良くなるんじゃないか
と言う「give」の部分で働いて居らっ
しゃることで周りを見て行動すること
が大切だということを学んだ。(3年
生・男性)

- どの協同組合も違う活動をしているけど、組合員の意見を尊重しているところや組合員や地域のことを一番に考えていることは一緒だと思いました。協同組合と行政を上手く連携できれば、福祉などの分野でサービスを受けられず困っている人にサービスを受けさせることができたり、仕事で子どもの面倒が見れない人や障がいを持った子どもの親など子育てサービスも幅広く提供できると思いました。(3年生・男性)
- 学んでいく中で、「お金を出しても1人1票ならそんなにお金が集まらないのではないか?」、「赤字運営でも働く人はいるのか?」等の疑問は出てきましたが、講師の皆さんの話を聞くと「困っている人のために何かしたい」という気持ちが大きいから成り立っているのだと思いました。協同組合に対する私のイメージは、「お金に余裕のある人たちが出資し合って色々なことをする組織」から、「困っている本人、困っている人を助けたい人が自分のできることをして相互に助け合う組織」へと変わりました。(2年生・女性)
- どの協同組合も「協同で1つのことに向かって協力して取り組む」という事だけあって、組合員の方は心が広く思

いやりのある方が多いんだろうなと思った。人々がどうすれば豊かになれるのか、困っている方を助けるにはどういったことをすればいいのかなど、常に周りの人のことを考えて事業を行っているのだと感じた。(3年生・男性)

- 協同組合は利潤を追求せず、組合員の生産と生活を向上させることを目的としていて、利潤の追求をすることは会社を続けていく上で大切だと思いますが、そればかりに目を行き過ぎると会社は成り立たなくなっていくのではないかと考えましたし、色々な問題を抱えている今、助け合い・支え合いの精神はきれいごとと言われるかもしれないけど大切なことなのではないかなと考えました。(3年生・女性)
- 一番大きかった学びは、大学を卒業したら企業に行くだけでなく、協同組合と言う選択肢を知れたという事と、講師の方たちの自分のしていることに自信をもっている姿勢がかっこ良かったことです。(2年生・男性)
- 自分は、協同組合とは人々が自分らしくいられる組織だと思う。自発的だからより良いものになっていくと思う。人々の生活を支え寄り添う大事な組織だ。(2年生・男性)
- これまでの講義を通して学んだことは、まず協同組合というものは共通して何かに寄り添い、共に歩むグループだと思った。そこに長く続く理由とか

があり、結果は後でついてくるものだと感じた。最初はお金目当ての組織でしかなくて人との触れ合いなんて…、と思っていたけど知れば知るほど協同組合の大きさと暖かさが伝わりました。(3年生・男性)

- 今まで、他の授業を通して地域づくりについて学んできたが、どのように雇用を生み出すか、利益を生み出すことで人を集めるといった考え方に偏っていた。それ自体は間違っていないし、地域づくりとして当たり前のことではあると思う。ただ、それだけではない、地域づくりは物や金だけでは成り立たないと気づかされた。協同組合の理念である相互扶助は、これからの地域づくりに欠かせないものになってくると思う。行政に頼るのではなく、住民自らが協力し合い、支え合うという土台があることで、よい地域づくりになるのではと思う。(3年生・男性)
- 自分はこの講義をなんとなく履修した。少しは協同組合について知りたかったというのもあるが、何となくが一番の理由であった。最初の頃はよく寝てしまったが、だんだん協同組合のすごさ、おもしろさが分かってきた。この講義の一番のポイントは、実際にその現場で働いている方からお話が聞ける点である。21年間生きているが、知らないことの多さに驚かされ、もっともっと知りたいと思った。協同組合を考えた方はとても頭が良いなあと

思った。(3年生・男性)

- これからは営利を求めるだけではなく、地域とともに歩いていく社会も必要であると感じた。大企業を中心にCSR活動が広がっており、地域に利益を還元する企業が増えているが、それは今の企業の責任であると考えている。これからは協同組合式の働き方が当たり前になると考える。協同組合は全員が平等で、話し合いも全員で決めるといった普通の企業と違う点もある。この方法は欠点もあり、決めるのに時間がかかるが、最近では上の立場にいる人の権力が強すぎて逆らえずに部下が偽装や犯罪を犯してしまうという事件が立て続けに発生し、また予定の変更の権限がなく、子どもを熱中症で亡くしてしまう教師が問題になっている。上の者に逆らえない社会は、柔軟に物事を対処できない。今は特に協同組合の働き方が注目されるべきである。(3年生・男性)
- 今まで私は協同組合と聞いてボランティアの延長線でお金がもらえるというような認識だった。しかし、学んでみると働いている人たちはそれぞれ明確な達成しようとする目的があり、利益ではなく人の生活を豊かにするために働いていて素晴らしいなと思った。(2年生・男性)

※筆者が一部誤字脱字を修正し掲載。

(2) 協同労働に対する理解～仕事の起承 転結を深く体感できる協同組合～

第10～13回で行われた協同労働の協同組合に対する理解に関して、「地域に必要な仕事をおこす」・「話し合いで働くひとたちで労働条件を決められる働き方」・「倒産した会社を協同労働の協同組合化するワーカーズ・バイ・アウト」への関心の高さが伺えました。また、ワーカーズコープ・センター事業団の武元春美エリアマネージャー（筑後佐賀エリア）や国分地域福祉事業所の岡元ルミ子所長の地域で行っている活動と目指す理念を講義していただいたことで、協同労働が目指す社会に対する理解も肌感覚で実感されていました。

一方、一人ひとりが話し合いながら事業・活動をしていくことへの共感が多い中で、営利企業と対比しても非効率性や、マネジメントの難しさを感じる学生も見受けられました。それに対し、各講師は「生き方」・「キャリア」をどのように考えるかという切り口で協同労働の良さと難しさを分かりやすく説明していました。

以下の講義レポートは感想の一部ですが、協同労働を「仕事の起承転結を深く体感できる協同組合」と定義する学生が出てくるなど、生き方・働き方と結び付けながら推考するものが多かったです。

【第10～13回講義レポート】

- ・労働条件を自分たちで決められるという
ことで、自分に合った仕事ができる

と思った。自分に合った働き方を選び、自分も運営に参加していくワーカーズコープがもっと広がっていけば、もっと一人ひとりに合った職を選べるのではないかと思った。そしてもっと働きやすいような世の中になると思った。
(3年生・男性)

- ・なかなか(社会に)適応できない人たちや業務委託の縮小などで仕事のなくなってしまう人が出てきてしまうため労働者を主体として協同労働は人々が助け合うまちをつくるためにもこれから更に必要となってくると思います。法整備がされることで、経営困難な企業を労働者が買収しワーカーズコープにすることで働く場所を守るワーカーズバイアウトはこれからの自分たちの生活を守るためにも知っておくべきだと思います。(3年生・男性)
- ・これまでの協同組合概論の講義の中で、「協同組合は一般企業より人間味・温か味がある」というイメージがつかまりました。しかし、「なぜ企業よりも温か味が深いのか」についてはあまり考えてはいませんでした。今日の講義を通じて、利益的な需要のあるネタを探して事業を始めるのではなく、その地域には何が必要でどんな資源があるのか、ということをも人の役に立つ事業として展開していくからこそ、一般企業より温か味があるのだろうと個人的に考えました。ただ、これだけ非営利の事業を行い、常に困っている人、地

- 域のために働いているので、働いている側の人が満足に生活できるだけの給与をもらえているのかが気になりました。「労働者自身が労働条件を自分たちで決める」というところが、一生懸命やれば非常にやりがいを感じられる制度だと思いました。(3年生・男性)
- 最初にビデオを見たときになるほど思ったのが「仕事がないなら仕事をつくればいい」という言葉です。すごく単純な考え方だと思いますが、その通りだと思いますし、それを実行するという事は簡単なことではないので本当に尊敬します。ワーカーズコープは「事業者が主体の協同組合・利用者が主体の協同組合ではなく、働くひと自身が主体となる協同組合」「働くひと＝組合員」という事なのですが最初聞いたときはよく違いが分からず何が違うんだろうと思っていましたが、図を見て説明をもう一度聞いたときに「あーなるほど」と分かりました。そこから考えると出資・経営・労働を自分たちで行うのは改めてすごいと思いました。(2年生・男性)
 - 労働条件や経営方針を組合員が決めることができ、その経営方針に沿って自分たちが働くということで頼まれたことだけをやるのではないのでとても頭を使いながら1つ1つの仕事を行わなければならないのかなと感じた。そして、ワーカーズコープの組合員は他の協同組合より働く人自身が主体となる

ことから団結力が強いのではないかと感じた。(2年生・女性)

- 自分や一緒に働く仲間が主人公となる働き方がワーカーズコープの特徴であることを聞き、労働者が納得できる労働ができると思いました。労働条件が悪くブラック企業などが問題とされている世の中で、ワーカーズコープの働き方はとても魅力的だと感じました。学童の活動での、鶏を飼育し自分たちでさばいて食べることで命の大切さを学ぶことに一番衝撃を受けました。自分たちが普段、食べている者がどのように食べられるようになるかを小さい時から知ること、命を大切に扱えるようになると思いました。(2年生・女性)
- 組合員が出資し、自分たちのやりたい仕事をやるという働き方の形に驚いた。しかしその分大きな事業をするときの負担金が多くかかり、組合員に責任が大きいのしかかるのではないかも感じた。また、協同出資なのでリーダーが設定しにくく、組合員の協調性が取りにくいのではとも感じた。自由に事業が行えるという民主的な側面が強い分、効率性との両立が難しいのではないか。(3年生・男性)
- ワーカーズコープの仲間内でも、独り立ちできないものに対する苛立ちがあるのに、その意見にめげずに自分のやりたいこと、人との繋がりを大切にしたい気持ちは素晴らしいことだと思

ました。一人の人間を見捨てていたら誰も救うことができないんだと改めて考えさせられます。ワーカーズコープは企業と違い横のつながりが強い。企業や部活等のような勝ち負けが関係してくる縦の社会では、経済的・社会的に強い集団にはなるが、どこかで綻びが出るとそれが一気にその集団の崩壊につながるようになる可能性がある。(4年生・男性)

- 「ワーカーズコープと普通の会社との違いは？」という質問でワーカーズコープでは人の繋がりを大事にしている、一人の意見でもすぐに切ることなく公平性を大切にしているという返答を聞いて、人に優しいところではないかと感じた。ワーカーズコープは色々な世代の方が活躍できて一人ではできないような夢を叶えることができる場所であると思った。(2年生・女性)
- こういう現状だからこそ、協同労働の重要性があると思った。お金を儲けることが目的ではなく、地域の人びとの困りごとを解決したり、生活をサポートすることで、気持ちが豊かになり、健康になる暮らしができるというのは素晴らしいと思った。(2年生・男性)
- ほのほので働いている人の中に、引きこもっていた方や障がいがある方もいらっやあって地域の困りごとを利用して働く場が生まれ、自分たちの力で地域を豊かにしていくという循環型社会だと思った。(3年生・男性)

- 一般企業だとしても様々な役割があると思うが、事業や活動の中心として、仕事の起承転結を深く体感できる協同組合だと感じた。(2年生・男性)

※筆者が一部誤字脱字を修正し掲載。

(3) 働いてみたい協同組合

また、第14回目の講義レポートでは、すべての講義を終えた上で、どの協同組合で働いてみたいかを理由も含めて聞きました。理由については、本稿では掲載できませんが、比較的知名度の高い農業協同組合(JA)や生活協同組合(エフコープ・グリーンコープ含む)で働いてみたいと考える学生が多かったです。農業協同組合で働きたいとする理由としては、①食に関連する仕事・活動をしたい、②地元・住んでいる地域は農業が盛んなこと、③家族・親族が農家ということで親近感を持ち、その農業を支えていきたい、などとする内容が多かったです。生活協同組合に関しては、①生活を通じて住民と一緒に地域づくりができること、②子どもの頃に生協に加入していた印象、③食に関連する仕事がしたい、という理由が代表的でした。

それに対し、協同組合としての規模が小さいワーカーズコープ(協同労働の協同組合)で働きたいとする学生も多く見受けられました。その理由は、先の2つの協同組合と対照的で、①協同労働という働き方・マネジメントへの強い関心、②生き方・やりがい・キャリアという面

から魅力的、③ワーカーズコープが行う福祉事業への興味、などが挙げられます。さらに、信用金庫で働きたいとする学生も多く、金融機関で就職したいと思う学生が講義を通じて、信用金庫の理念・事業に惹かれて選択していました。

さらに、協同組合の中ではフードバンク活動に取り組むところもあり、講義の中で触れられる機会もありましたが、それを通じてフードバンクに関心をもち、仕事として取り組みたいとする学生もいました。学校教育における環境保護・保全・リサイクルへの知識・理解・関心があることと、飲食店のアルバイトで食品ロスの現場を目の当たりにして活用できないかと思う学生がフードバンクで働きたいと答えていました。

表2. 働いてみたい協同組合

	協同組合名	人数
1	農業協同組合 (JA)	15
2	ワーカーズコープ	13
3	信用金庫	11
4	生活協同組合	9
5	グリーンコープ	6
6	漁業協同組合	5
6	フードバンク(に取り組む協同組合)	5
8	エフコープ生協	3
8	高齢者福祉生協	3
10	森林組合	2
10	福祉・子育て(に取り組む協同組合)	2
10	子ども食堂 (に取り組む協同組合)	2

(4) 協同組合とSDGs～地元志向・住み続けられるまちづくりを～

第15回の講義では、協同組合・協同労働の理解がどこまで進んでいるかを問うテスト(記述式3問出題)を行いました。その中で、3問目は、①社会と協同組合を関連させて考えてほしい、②国連が定めるSDGs(持続可能な開発目標)はその実現に向けて世界的に活動が取り組まれているので理解を深めてほしい、③協同組合だけでなく企業・NPO等で働くにしてもSDGsは仕事・活動に関わることなので関連付けて社会を考えてほしい、④協同組合で「働く」ではなく「つくる」にすることでどのような発想が出てくるか知りたい、という4点の目的を持って「もしあなたが協同組合をつくるならば、どこで、どのようなことを行うか述べよ。さらに、それを行うことで、組合員・地域にどのような貢献ができるか、SDGsにおけるどの分野に貢献できるかも述べよ。」という内容に出題しました。

それに対し、「どこで、どのようなことを行うか」という面に焦点を当て、筆者がキーワードで分類して整理し、さらに関連性の高いキーワードを5つの大分類(①場所・②対人支援・③支援活動・④地域活動・⑤協同組合)と分けています。その中で、①場所という視点から見ると、東京や都会でというより、地元・過疎地域などで協同組合をつくりたいと答える学生が多かったです。社会課題と

なっている少子高齢化・人口減少・過疎について、地元がそのような状況になっているという学生も多く、それを解決する手段としての協同組合という認識が表出されていると考えられます。さらに、人に対する支援、すなわち②対人支援の活動を行いたいと答える学生が多く、特に高齢者分野・子ども子育て分野に関連することを行いたいと思う学生が多く見受けられました。

次に、③支援活動は、②対人支援のキーワードと比べて、より具体的な支援内容・取り組みが記入されていますが、ここでも高齢者・子ども子育て分野への関心の高さが伺えます。子どもも高齢者も障がい者とともに過ごせる「福祉全般・多世代共生(交流)」の活動をしたいとするものや、「移動支援・宅配」、「学習支援・教育」、「子ども食堂・居場所」の活動を協同組合で取り組みたいとする回答が多

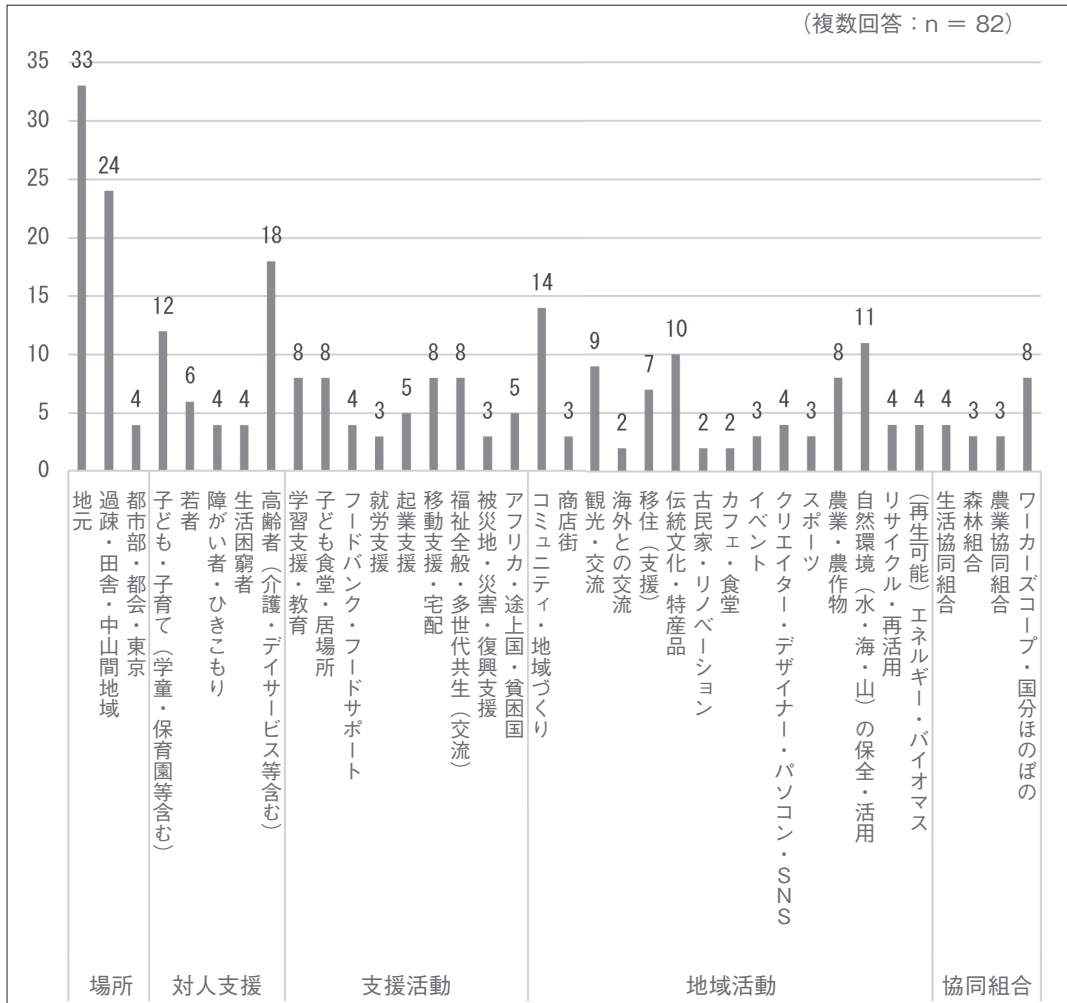


図3 キーワード分類：協同組合をつくる取り組み

かったです。

より地域に焦点を当てた、④地域活動では、抽象的な回答ではありますが、「地域づくり・コミュニティ」への関心の高さも伺えます。取り組みたい内容として「自然環境(水・海・山)の保全・活用」、「農業・農作物」、「伝統文化・特産品」、「観光・交流」、「移住(支援)」が多く応えられています。これは、地域の資源を守り、活用していこうとする学生の考えが表出されていると思います。さらに、これらの支援・活動を「ワーカーズコープ(国分ほのほの含む)」、「生活協同組合」、「農業協同組合」、「森林組合」という具体的な協同組合のかたちで実現しようとする回答も見受けられました。

以下は、この問いに対して、特徴的な回答の抜粋です。

【第15回「まとめレポート(テスト)」問3. 「もしあなたが協同組合をつくるならば、どこで、どのようなことを行うか述べてよ。さらに、それを行うことで、組合員・地域にどのような貢献ができるか、SDGsにおけるどの分野に貢献できるかも述べてよ。】

- 自然が豊かで栄養が豊富な場所で時代が変わるなかでなくなってしまった野菜を復活させるための取り組みを行いたいと思う。
- 中山間地域などの過疎化の進んでいるまちで、ワーカーズコープのような地域活性化に役立つような取り組みを行いたいと考える。具体的には、地域に若者を呼び寄せるための取り組みとして、伝統芸能や伝統工芸品を継承してくれるような人材を教育する場所をつくったり、その地域外からも来てくれるような、老若男女問わずに楽しめるイベントを設定したりすることをしたいと考えている。それを農業協同組合と一緒に、その土地の特産品を販売し、お金をその土地に落としていてもらいたい。
- 地元で、家庭の事情などで塾に行くことができない子どもたちを対象に、勉強を教えたり、一緒に宿題をしたりできる場所をつくりたいと思います。大学生ボランティアや時間に余裕のある大人に手伝ってもらい、子どもたちに勉強を教えたいと思います。この活動を行うことで、組合員だけではなく、子どもたちも様々な人とコミュニケーションをとることができ、みんなと一緒に勉強することで、学ぶ楽しさを味わうことができ、さらに子どもたちの学力向上に貢献できます。また、地元には有明海があり、海岸の清掃や町のゴミ拾いを定期的に行うことで、地域の環境保全につながると 생각합니다。
- 伝統協同組合をつくりたいと考える。私が住んでいる街の中心部には大きなアーケードがあった。昔はそのアーケードもたくさんの人達でにぎわっており、経済も活発だったことを両親に

聞いた。今となつては、そのにぎわったアーケードは、シャッター街となつてしまい悲しく思う。だから伝統協同組合をつくり組合員から資金を収集し、もう一度アーケードににぎわいをもたらしたい。

- 生活に必要な不可欠な電力に関する協同組合をつくりたい。電力の中でも自然エネルギーの中のバイオマス発電を主とした協同組合である。発電の燃料は森林にある間伐材や放置されている木材、家畜の糞尿を使用する。そのため、地域の衰退が問題視されている林業、農業の活性化にもつながると思う。さらに、施設の設置、加工工場の設置などが必要となってくるため、雇用の創出、地域の活性化になるのではないかと思う。また、エネルギーを地域全体に供給できるようになれば、電気代が高くて困っていた人々にとても役に立つと思う。
- 地元に戻ってワーカーズコープのようなものがやりたいと考えている。ワーカーズコープをやることで、みんなが出資して経営して労働ができるので、自分たちが決めた労働条件で働くことができ、組合員が自身や地域などに利益がかなうように事業を行っていけば、地元の活性化につながって、経済の発展になるんじゃないかと思った。
- 高齢者に向けた組織づくりをしていきたい。孤立している集落や地域にすんできる人に向けた支援やフードバンク

を利用して定期的に食事を提供できるようにしたり、孤立感を出さないように同じような集落・土地同士での交流をするといったことをやっていきたい。

- 環境が大きく変化し、気温も湿度も高い日が続き、熱中症などで危ない目に遭っている人も多いと思います。特にお金に余裕がない人たちは、空調設備などにあまりお金をかけられず、かえって危険な目に遭いやすくなっているのではと思います。そういった日常的健康を守っていくために、健康と家の環境を地域で考えていける協同組合をつくれればと思いました。
- 地元で、空き家を使ってリノベーションをし、新しいコミュニティの場、ルームシェアなどによる高齢者の孤独死防止になるような取り組みをしたい。
- 2011年3月11日の東日本大震災で福島第一原発がダウンしてしまったために、エネルギーの供給がストップしたように、電力などの供給が原発に頼ってしまっている部分があるので、リスクが高い原発では、維持費などのコストもかかってしまうので、その原発を立てるほどの敷地があるとなれば、そこにソーラーパネルなどの再生可能エネルギーで発電する協同組合をつくる。
- 私は教育協同組合をつくろうと考える。これは、地域の学校の放課後に協同組合で学習塾を開いて、お金のない

家庭でも格安で学習を受けられたり、部活動の支援を行い、教師の負担軽減と、質の高いスポーツの提供する活動を行う。

※筆者が一部誤字脱字を修正し掲載。

さらに、「SDGsにおけるどの分野に貢献できるか」という面では、「住み続けられるまちづくり」・「すべての人に健康と福祉を」・「働きがいも経済成長も」・「貧困をなくそう」という4つのゴールに取り組みたいとする回答が高かったです。

このSDGsに対する回答を上述の協同組合で行う活動と関連させて、学生はどのようなことを考えているのか、筆者なりにまとめてみました。その結果、図5のようなモデル(仮説)ができるのではな

いかと考えています。

現在の日本社会・地域社会が抱えている課題として、少子高齢化・人口減少・過疎などが大きく取り上げられております。この課題は、学生が生活する地域でも同様のことが生じており、解決しなければならない社会課題として認識されているのではないのでしょうか。それに対して、協同組合で解決しようと考えた結果、「地元志向」・「過疎・中山間地域」・「高齢者・子育て支援」・「地域活性化・地域資源の活用」というキーワードが多く挙げられたのだと推測できます。そして、この社会課題を解決していく取り組みの先に、目指す社会として、上述のSDGsの4つのゴールがあるということが、学生の回答を通じて考えることができるの

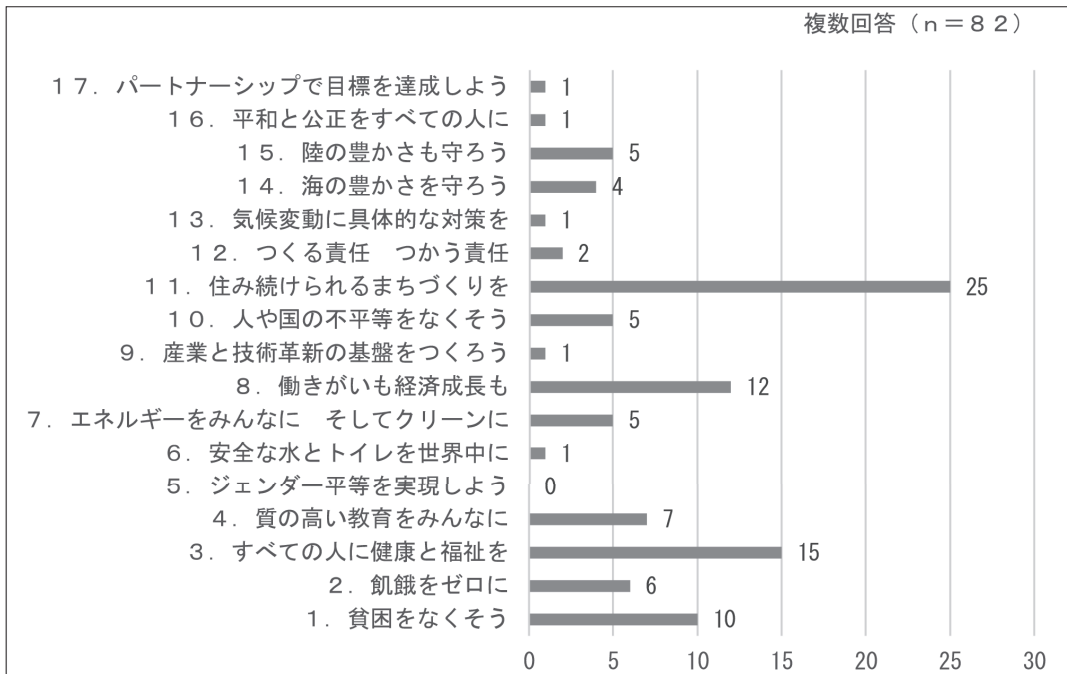


図4 「貢献したいSDGsの項目」

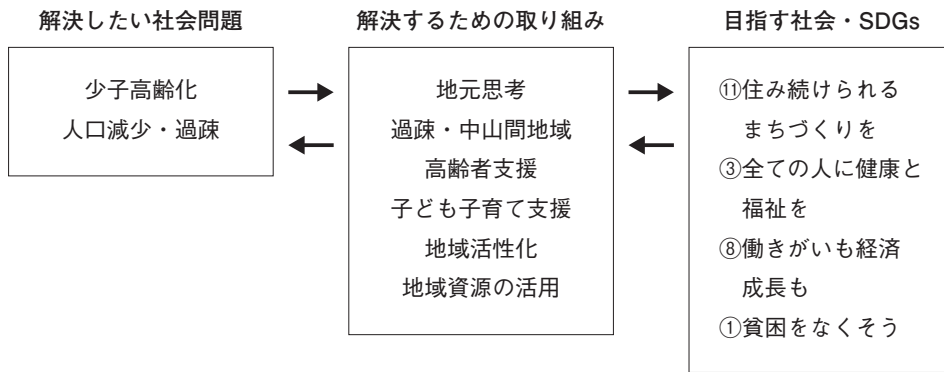


図5 学生が考える社会課題解決モデル(仮説)

ではないかと思います。一方、「社会課題の解決」→「解決するための取り組み」→「目指す社会・SDGs」という流れで仮説を考えましたが、逆の流れとして、目指す社会像・SDGsを実現するための活動に取り組みが社会課題を解決するという考えを持つ学生もいるかもしれません。その意味で、本稿(本講座)では深く考察できませんでしたが、来年度以降の講座実施に際してのひとつの視座として持ち合わせて、具体的な考察を行えればと思います。

5 2年目の「協同組合概論」の成果と課題

久留米大学経済学部「協同組合概論」は、昨年からはじまり今年で2年目という事もあり、昨年同様、①協同組合という組織の理念・活動などを学生に知ってもらえた、②協同労働という働き方を学生に知ってもらえた、という2点が最大の成果であり、本講座の意義であると考えています。その一方、昨年の実施状況

を振り返り、よりよい講座にしていくための工夫も行われました。その工夫を通じて、見えてきた成果と課題について考えていきたいと思っています。

(1) 成果：繰り返し協同組合の理念等を伝えることで理解が促進

今年度では、講義と講義の間が1週間間隔で行われることから、第2回「協同組合とは」での説明とは別に、各講師に協力していただき、毎回講義冒頭に協同組合の定義・理念・原則などを話していただき、その上で、それぞれの協同組合の成り立ち・理念・活動へとつなげていきました。

その結果、昨年度のレポート等と比較して、学生の協同組合に対する認識が回を重ねるごとに、協同組合を自分たちの言葉で理解する内容が増えていきました(詳細は上述4.(1)をご参照ください)。また、ただ単に、講義で学んだことをそのまま受け取るのではなく、自らの実体験や受講している他の講義などと比較し

て、協同組合・協同労働(で働く人)に感じること、良さ、興味を述べる学生が一定数いました。

この結果を受け、来年度も同じように、各回の講義冒頭に協同組合の理念等を伝えた上で各回の講義内容(本題)につながるようにしていければと思います。

(2) 成果：協同組合・協同労働への興味・関心がより鮮明に

本講座では、各回講義の最後に学んだことを記入する講義レポートを記入・提出してもらいますが、第14回目では、講義のまとめということで、「協同組合への理解」と「働いてみたい協同組合」について学生に尋ねました。

「協同組合への理解」については、多くの学生が、相互扶助・非営利性・民主的運営・組合員や地域への貢献などを理解し、社会における協同組合の必要性や社会をより良くしていく存在であるとの認識が広がっていることが明らかになりました。さらに、講義を通じて、協同組合に関わる人たちのパーソナリティに触れ、協同組合の理念・理論と実践がしっかり結びついていることを感じる学生も多く見受けられました。

また、「働いてみたい協同組合」というテーマでは、働いてみたいと思う協同組合とその理由に特徴が現われました。詳しくは4.(3)にゆずりますが、農業協同組合・生活協同組合を選ぶ学生の理由として、①親近感、②食関連への興味、

の2つが大きく挙げられますが、ワーカーズコープを選ぶ学生の理由は、「働き方・生き方・やりがい・キャリア」というキーワードを挙げる特徴がありました。学生のもつ問題意識によって働いてみたい協同組合が変わることが明らかになりました。

このように、本講座を受講する学生の協同組合・協同労働に対する興味・関心が分かりやすく表出されたことは非常に大きな成果・意義だと感じております。そして、今回明らかになったことをより深めていく必要があると感じ、来年度も本講座を通じて学生の協同組合・協同労働への興味・関心がどのような状態にあるか考察していきたいと思っております。

(3) 成果：社会情勢と合わせて説明することの重要性

「なぜ協同組合が生まれたのか?」という問いに対して、社会情勢は切り離されない関係ではありますが、各協同組合の説明となると、社会情勢との関連性が乏しい活動内容に終始した説明になってしまう場合もあります。その点、今回協力していただきました各協同組合の講師の皆さんは、組織の成り立ち・理念を社会情勢と合わせてお話していただき、「協同組合は社会をより良くしていく存在」だという共通認識が学生の中で醸成されたのではないかと考えております。

さらに、この共通認識の醸成が、第15回「まとめレポート(テスト)」で協同組

合を通じてどのように社会課題解決・SDGsを成し得るかを問う出題に、学生は違和感なく、積極的な回答がなされたのだと考えています。

協同組合の成り立ち・理念・活動内容などと社会を関連させて説明することは、協同組合への理解促進はもちろん、共感を広げていくことにもなるため、引き続きその重要性を踏まえた講座運営をしていきたいと思えます。

(4) 課題：本講座を通じて学生の社会課題解決の意識を明らかにしたい

本講座の第15回「まとめレポート(テスト)」では、協同組合を通じて、社会課題解決・SDGsを成し得るかを問う出題をした。学生の回答を通じて、①少子高齢化・人口減少・過疎を「社会課題」と認識し、②協同組合で地元や中山間・過疎地域において高齢者・子育て支援や地域活性化・地域資源の活用などの「解決するための取り組み」をし、③住み続けたいまちづくりなどの「目指す社会・SDGs」を考えているのではないかというモデルが仮説として生まれてきました(図5)。

それに対して、本稿では深く考察することはできませんが、来年度以降の「協同組合概論」を通じて、学生が協同組合を通じて社会課題の解決を図ろうとした場合、どのような意識で考えるのかを明らかにしていきたいと思えます。

(5) 課題：発展的・実践的な取り組みを～ワークショップ・インターンシップ～

これまでの「協同組合概論」は、講義内容・レポート・テストの中で様々な工夫をして学生の協同組合・協同労働に対する理解促進に取り組みました。それを通じて学生の協同組合・協同労働への理解が昨年以上に深まり、学生が抱える問題意識も考察するようになりました。学生の協同組合・協同労働への理解をより一層深めていくために、講義形式から発展させてワークショップ形式の内容も来年度から取り入れていきたいと考えております。そのことで、新たな視点からの協同組合・協同労働への理解が生まれてくるのではないかと期待しております。また、近い将来、担当教官である伊佐淳先生や協力していただいている協同組合の皆さんとより一層連携を深めて、実践的な取り組み(例えば福岡県内における協同組合へのインターンシップ実施)を実現可能な形で進めていければとも考えています。

6 担当教員・担当事業所からのコメント

(1) 伊佐淳教授からのコメント

「協同組合概論」を平成29(2017)年度前期に開講してから2年目となりますが、興味深い数字があります。手元に残っているデータで、飛び飛びとなりますが、平成24年度…7名 平成25年度…6名

平成28年度…7名 平成29年度…13名
 となっています。実は、上記のデータは、
 本学経済学部卒業生のうち「農協等の協
 同組合」に就職した人数です。生活協同
 組合や各種協同組合も含めていますの
 で、協同組合セクターへの就職者数とい
 うことになります。本報告の冒頭で紹介
 されているように、かつて経済学部の専
 門科目として「協同組合論」が開講され
 ていましたが、担当教授が定年退職され
 てから後任者が補充されず、閉講となっ
 てしまいました。私が前任校から本学へ
 移籍したのが平成10年度ですので、他
 学部も含めて20年以上、協同組合論は
 開講されていなかったわけです。藤田徹
 氏より寄附講座のお話をいただいた頃か
 と思います。就職活動中の4年生から、
 某生協が第1志望だったのに内定が得ら
 れなかった、その理由は面接で「協同組
 合とは何か」という質問に一言も答えき
 れなかったからだと思う、と言うのです。
 そこで、寄附講座を開講するにあたって、
 「協同労働の協同組合」の比重を多くし
 たうえで、各種協同組合について浅く広
 く勉強することができるような科目にし
 よう、ということになったと記憶してい
 ます。開講以前には協同組合セクターへ
 の就職者が一桁だったのが、開講した平
 成29年度末に二桁になったわけですが、
 実は、本学の経済学部を含む文系学部約
 1200名の卒業生に対して、求人票を出
 した企業、団体等は約6000でした。そ
 のような状況下での増加ですので、何ら

かの良い影響があったのかもしれないと
 考えています。今後の推移に注目してい
 ます。

この講義は、毎回講師が入れ替わるオ
 ムニバス形式であり、しかも現場からの
 視点が豊富に盛り込まれており、それが
 学生達にとっては新鮮なのだろうと思
 います。今後の課題ですが、本報告でま
 さに高橋氏が指摘されているように、ワー
 クショップやインターンシップなどの協
 同組合や協同労働の現場の実感がわくよ
 うな工夫があれば、受講生の理解が一層
 深まると思います。さらに言えば、彼ら
 が卒業し、社会へ出た後に、「協同労働
 の協同組合」の設立や支援に向かって動
 き出すようになるかもしれません。

(2) ちくご広域まちづくり事業所・田 中秀雄所長からのコメント

2017年度に続き2018年度も久留米大
 学寄附講座(協同組合概論)開催に関わら
 せていただいた。この講座の今年度到達
 目標は、「協同組合の基本とともに、地
 域の多様な協同組合のありようを理解す
 ること、協同労働という働き方の選択、
 働くことの意味について理解を深めるこ
 と」であった。

これに関して若干振り返ってみたい。
 目標の前段部分については、毎回のレ
 ポートや最終回のテスト結果からも見て
 取れるようになり理解が進んでいると
 思われる。これは高橋事務局長の報告書
 にも供述されているが、講師の方に協同

組合の定義・価値・原則を繰り返し伝えていただいたことも要因の一つであろう。

また後段部分については、協同労働という難解な働き方がある程度理解し得たからこそその回答も見受けられる。設問の「働いてみたい協同組合」のところでは、ワーカーズコープが上位にランクされており、働き方、生き方、やりがい等の文言を使った感想が多く見られた。これは講師を担当したワーカーズコープの組合員の話から、協同労働の本質を感じ取り、自分の人生に置換するシミュレーションをしたのではないか。来年度は、この部分をより一層明確に確認できる仕組みづくりを検討していきたい。

最近、非営利組織の中で社会的インパクトということが問われ始めている。つまり活動の先にある成果は何か？ということである。

非営利組織の活動に成果という考えは馴染まないという向きもあり、また判断基準が多く評価が難しいという面も持ち合わせている。だからこそビジョンを実現する上で組織なりの成果の定義が必要になってくる。これは各協同組合についても言えることであり、来年は講師の方に、活動の成果についてもより具体的に述べていただければと思う。

今後益々、非営利組織は重要な存在になっていく。社会に良い変化を生みだし、まちづくりの主体となれる存在であることを市民に訴え証明していかなければならない。

この寄附講座を通して学生が協同組合を始めとする非営利組織に関心を持ち、仕事を強制的な労働にしない、その活動や仕事をやること自体が純粋な喜びとなるような新しい組織を創っていただきたい。

協同労働を学び実践する場を創る
ー千葉大労協講座の初年度と目指すものー



伊丹 謙太郎
(千葉大学 人文公共学府
特任助教)

1 はじめに

千葉大学では、2018年度より労協講座「地域で仕事をおこす」を開講することになりました。本年度は、全学部1年次を対象に、8月初旬の1週間集中講義の形式で実施しております。すでに、2014年度より多分野の協同組織が参加しているIYC記念全国協議会の寄附講座として「非営利市民事業と協同組合」を開講し、また昨年2017年度より、インターカレッジで開講されている「インターシップ in 協同組合」(事務局：一般社団法人くらしサポート・ウィズ)にも乗り入れています。このため、本労協講座は、千葉大学全学での協同組合論の開講として3つ目となりますが、特定分野での協同組合論としては最初のものとなります。

千葉大学は医薬系3学部、理工系2学部、人文社会系2学部、園芸、教育さらに国際教養の10学部をもつ総合大学であり、学部学生の規模は総体で1万人超です。この科目は、主に1・2年次で受講する普遍教育(一般教養)科目として、すべての学部生が履修できるシステムになっています。夏休み期間の集中講義ということで開講に不安もありましたが、本年度の労協講座には、教育学部、園芸学部および法政経学部の学生と人文公共学府の大学院生が参加してくれました(約半数が法政経学部の学生)。

2 講座の目的

本講座は、現代的な地域課題を解決する上

で、“協同”という方法がどのような意味・機能をもち、また、もつことができるのか、現場で労協運動を実践されている複数の組合員をゲスト講師としてお招きし、事例の紹介や学生自身あるいは学生と実践家とのディスカッションを通じて学びを深めてもらいます。こうした学習を経て、学生に協同組合や協同労働がこれからの社会を牽引していく強いポテンシャルを持っていることを知ってもらいたいというのが大きな目的のひとつです。

さて、もうひとつ大きな目的があります。ほとんどの大学生に共通して気がかりなのは就職問題です。雇用不安などが強い要因となり、最近では1年次から就活準備をはじめ学生も珍しくなくなってきています。しかし、これらの多くは、「TOEICのスコアが高いと就職に有利である」とか「簿記の資格をとっておくといい」などといったように、とにかく就活で大手企業から内定を得るためのカードをいかに効率的に集めるかに執心してしまっており、“将来自分が何をしたいのかという具体的なビジョンを描くような”姿勢を欠いているように感じられます。海外に行くのも、本心で「自分の世界を広げるため」ではなく、「世界が広がりました」と就職面接で回答する“ためのもの”になってしまっています。『大学の思い出は就活です』という本が出されるような時代です。仲間うちからは、学生時代に就活以上に真剣に打ち込むも

のを見つけてしまった学生は“災難”だと言われてしまいます。残念ながら“間違っ(て?)”真剣に打ち込めるものを見つけてしまった学生は大半が就活でにがい思いをさせていただきます。

大学生には自らの将来をしっかりと見極めつつ前に進んでいけるようなキャリア教育が必要ですが、それは、内定を獲得するテクニックなどとは大きく違うものだと思います。学生自身が自分の頭で「働くことの意味」を真剣に考える授業ができないか、できれば集中講義でお互いに学生同士で疑問をぶつけ合い、刺激を与えあえるような場所を提供することはできないか?という思いを協同総合研究所の相良孝雄氏等と話し合う中でこの授業が生まれることになりました。すでに沖縄を中心に複数の大学で労協講座が開設されていますが、千葉大学では、センター事業団関東東事業本部と地域労協であるワーカーズコープちばという2つの労協とタイアップし、両者からゲスト講師を派遣していただいています。

3 地域から孤立した大学と大学生

近年、協同労働における仕事づくりは、働きづらさや生きづらさといった広く個々人の抱える苦しさや悩みにどう向き合うのかという視点からも多くの学びを与えてくれます。引きこもりがちであった若者たちに新たに社会とのつながりを提供する地域若者サポートステーション

の事業から、多様な困難を抱える仲間たちが協同で働き、池袋西口清掃から事業を地域へと広げてきている WORKERS NET RINGSの活動まで、労協の取組にはこれからの社会を明るく照らす示唆的な事例が多くあります。社会に出てから(大学を卒業してから)当事者として直面することになるこのような課題に対して、学生時代に事前に学んでいたらなにより心強いでしょうし、何がこのような社会の歪みを生み出す原因になっているのか、学生なりに真剣に考える機会を提供することは、大学の使命でもあると思います。

この実現を難しくしているのは、大学生が地域や社会から極めて遠い存在となっている、さらにこれと関係しますが、大学そのものもまた、地域から遠い存在であるという2点ではないでしょうか。学生のなかには、地方から出てきて単身で生活する者も多くいますが、あくまでテンポラリーな形で居住している大学生は、長くても4年後にはこの場所を離れることが分かっています。自宅通学の学生も、大学の場合は近隣からの進学者は稀にしかいません。大学のキャンパスが地域でありコミュニティであるという考え方もあるでしょうが、大学が暮らしていく上で必要な衣食住あらゆるサービスを提供しているはずありません。大学というコミュニティに帰属しているからこそ、逆にその大学を周りで支えている本来の地域や社会というものに対して学

生をより無自覚にさせているという皮肉もあります。一方の大学もまた、キャンパス内で完結した教育の提供を前提としてきました。教科書で語られている社会問題と学生の生活とが連続していない。当事者性をもって“社会”や“地域”について考えられないのは、ただただ学生だけの問題ではなく、大学そのものが地域社会へと開かれていないからではないか。大学と地域との連携は、大学の研究者が地域課題の解決に専門知を提供するといった旧弊のものではなく、学生自身が当事者性をもって“地域”や“社会”の課題を考えられるような場作りを進めるものへと変化すべきです。「学生時代に勉強そっちのけで働いたアルバイトが社会経験になった」などと学生に言われて笑ってはいけません。むしろ、キャンパスの中に地域や社会を引き込んで、未来に向けての多様な社会実験やチャレンジが行われることこそ、とりわけ社会(科学)系の大学教育の使命ではないでしょうか。

4 協同組合・協同労働と新しい大学教育の課題

国際協同組合年の時期にILOの協同組合局長を務めたマリア・エレーネ・チャベス氏は、協同組合の持続的発展にもっとも大切なものは、若者が協同組合を知ること、協同組合が現実的な選択肢となり得る事実を若者が認識し、学び、理解できるようにしなければならないと述べ

ています。そのためには、社会に出る前のあらゆる段階の学校教育で協同組合を学べる機会が提供されるべきだし、それは単なる協同組合論の科目新設ではなく、若者たちが自分自身で協同組合を立ち上げられるような支援がなければならぬと彼女は続けます(キム・ヒョンデほか『地域に根差してみんなの力で起業するー協同組合で実現する社会連帯経済』彩流社、2018年)。「あらゆる段階での学校教育」という以上、小学校や中学校でも協同組合や協同労働について学べる機会が必要となりますが、教科(書)教育が中心であるために座学を超えた教育は難しい面もあります。チャベス氏が言う具体的な起業経験までのカリキュラムを構築する取組は、とりわけ日本では大学教育でこそ可能であり、上述の地域との連携の使命という点でも大学教育においてこそ実現されなければならないものだと思います。本年度の労協講座はパイロット版の集中講義という意味もあり座学が中心となりましたが、今後はチャベス氏の言うような方向への拡張を検討していきたいと考えています。

8/6は、初日ということもあり何をこれから学ぶのかガイダンスを行い、学生ひとりひとりに授業に期待するものを含めて自己紹介の時間を作りました。その後で、映画『ワーカーズ』を視聴し、墨田区での取組についてそれぞれの感想を共有した後で、千葉地域と墨田区との違いや、それぞれの学生が暮らしている地域の特徴について議論しました。都心から通っている学生もいれば、地方の農村出身の学生もおり、「地域との距離を感じはじめたタイミングは？」という問いなどでは様々な答えを共有することができました。この日のディスカッションは自覚的に「これまで篇」と「これから篇」という2部に分けてみました。上述のものが「これまで篇」です。さらに、これから大学を卒業し、どのような仕事に就きたいのか、長期的にはどのような人生設計を考えているのか？という問いを一人ひとりの学生に順番に語ってもらいました。「働くこと」に対するイメージも千差万別で、社会から求められる仕事をし

5 本年度の講座実施報告

2018年度の労協講座「地域で仕事をおこす」は、8月6日～9日の4日間の集中講義として開講されました。各日の内容は以下の通りです。



ディスカッションの様子

たいという者もいれば、仕事はあくまで生活を維持するためのものだと割り切った答えもありました。前者には、その「社会」とはどの範囲のことをイメージしているのか？という問いが改めて議論を深めるきっかけとなりましたし、後者については、そのために人生の半分を費やすことに耐えられるのか？働くこと自体の中に何か自身の成長や意味を見出すようなことが必要ではないのか？という問いへと深まりました。その上で、「これまで」と「これから」を繋ぐ結節点となっている現在の学生生活について、意見交換を行いました。最後に、相良氏よりワーカーズ・コープの35年の歴史と理念について

てお話いただくとともに、事業分野の変遷などを含め近年の注目すべき取組事例についてお話いただき、質疑応答を経て初日を終えることになりました。

2日目となる8/7は、3部構成でワーカーズコープちばより、菊地謙専務理事と及川恵さんにお話をいただきました。第1部は、ワーカーズコープちばの沿革と事業展開についての座学、第2部は千葉大学西千葉キャンパス近隣に開設されているワーカーズコープちばのサテライトオフィス「オアシス」に訪問し、フードバンクの箱詰め作業などを体験しながら、事業所見学を行いました。第3部は、



フードバンク説明(菊地さん)



フードバンク作業

フードバンク食品配送リスト(個人用)

NO	品名	単位	NO	品名	単位
1	米 2kg	袋付	18	チキンカレー	1
2	バナナ	1	19	アップル	1
3	かぼちゃ(約1kg)	2	20	ふかひれ	袋付
4	冷凍バナナ	1	21	せんべい	袋付
5	冷凍ポテト	1	22	片かぼちゃ	1
6	りんご(約1kg)	1	23	ホムパイル	1
7	トートバッグ	1	24	えびせん	1
8	みそ	1	25	カレーライス	1
9	けい	1	26	チキン	1
10	かぼちゃ	1	27	バナナ	1
11	冷凍バナナ	1	28	せんべい	1
12	冷凍ポテト	1	29	片かぼちゃ	1
13	りんご	1	30		
14	バナナ	1			
15	かぼちゃ	1			
16	冷凍バナナ	1			
17	冷凍ポテト	1			
18	りんご	1			
19	バナナ	1			
20	かぼちゃ	1			
21	冷凍バナナ	1			
22	冷凍ポテト	1			
23	りんご	1			
24	バナナ	1			
25	かぼちゃ	1			
26	冷凍バナナ	1			
27	冷凍ポテト	1			
28	りんご	1			
29	バナナ	1			
30	かぼちゃ	1			

フードバンク食品配送リスト



及川さんが制服バンクの取り組みを行う



及川さんより子ども食堂や制服バンクといった新しい取組について説明をいただきました。特に第3部では、菊地専務も参加される形で、生活困窮者支援等に関わる事業については、地域社会からの理解を得ることの困難さと重要性について学生と意見交換し、どのような方法があり得るだろうかという思考実験を学生自身のアイデアを中心に行いました。

3日目にあたる8/8は、センター事業団東関東事業本部から取組事例のご紹介をいただきました。午前中は、大場寛本部長と安村佳晃事務局長より、事業本部全体の取組について、事業分野毎の割合のほか中志津におけるワーカーズを通じた自治会活動の活性化など特筆すべき事例を含めてお話いただきました。また2日目もそうですが、今回ご登壇いただく労協の皆さんには、「私と労協」という視点からお話いただくようお願いしていましたので、どのような経緯でワーカーズコープと出会い、協同労働という働き方に何を感じているのかをお話いただきました。午後は、第1部として浦安地域福祉事業所の取組として、今井道雄さんと小松龍之介さんにお話をいただきました。小松さんは、この3月に大学を卒業されたばかりで、昨年度まで浦安にある了徳寺大学の4年生でした。ボランティア活動として学童クラブの事業に関わるなかで、ヴェルティ・プロジェクトという大学生によるボランティア組織を



大場さんと安村さん



今井さんと小松さん



宇本さん、小林さん、宮澤さんの
リレートークと質疑

結成し、浦安地域福祉事業所と連携した活動を行ってきました。本講座を履修している学生と年齢も近く、学生でもこういうことができる、地域につながっている学生のロールモデルを学べたことは極めて有益だったと思います。今井道雄さ

んからは、浦安地域福祉事業所の運営について地域との連携や居場所づくりの大切さなどを学びました。社会連帯のような組合員自身が積み立てて無償で行っている地域貢献活動と指定管理者による委託事業や自主事業がどのようなバランスの上で成立しているのかといった事業計画の話題や、福祉事業の今後のビジョンについてお話いただきました。午後の第2部では、松戸にある「あじさい」の小林文恵さん、東葛の宇本永宏さん、つくばみらいの宮澤宏樹さんの3人からそれぞれの事業内容についてお話をいただきました。あじさいでは、多機能型訓練事業所の利用者のお一人にスポットを当て、働くことや人から必要とされることの価値について深く考えられるお話をいただきました。宇本さんは、留学生として本学法経学部で学び卒業された履修者の先輩でもあります。宇本さんのお話は他の文化圏で働くこと、理解されることの難しさなどにも説き及び、特に出席していた3名の留学生はなんともうなずいており、発言する場面もありました。宮澤さんのお話は、児童館というものがコミュニティにおいてどういう位置づけにあるのかという話からスタートして、逆にコミュニティや地域社会が生き生きするためには何が求められているのかという話題へと進みました。学校教員にはできないことを求めて辞職後にセンター事業団に入団されたという経験から、学校や行政といった個別組織の限界、それ

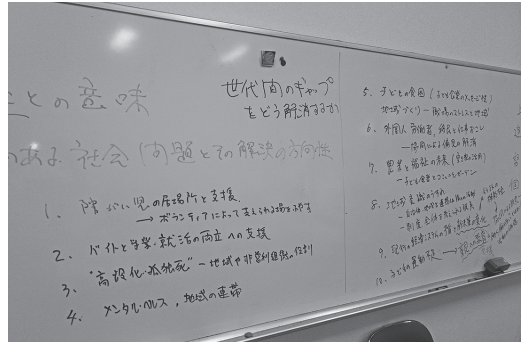
を打開するための“横のつながりの大切さ”を主張される話へと展開し、多様な地域の組織や団体が連携して課題を解決していこうとする新しい潮流について考えさせられました。このような話題豊富な実例を一つひとつ確認しながら、最後に登壇者と学生全員とのフリーディスカッションでこの日の授業を終えました。

最終日となる8/9の午前は、3日間の集中講義で学んだことの振り返りの時間となりました。課題として、1)それぞれが最も関心のある社会課題をとりあげ、その解決にはどのような方法が有効であるのか、2)働くことの意味をどのように考えるべきか、という2点について学生各人に持ち時間を設けて、発表してもらいました。内容については多岐にわたり、質疑ではお互いにより発展的な内容へと進む充実した時間となりました。

午後の最後の時間は、日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会理事長の古村伸宏氏に本講座の講評とともに、短いレクチャーをいただいた上で、学生との間でクロストークを行いました。学生からは最後なので投げかけたい疑問が古村理事長に勢いよく投げられ、また回答も労協運動や日本社会を長期的視座から考える、想像力に満ちたものとなりました。



古村さんと講義の様子



学生が考える社会問題とその解決の方向性

6 最後に

朝から夕方までの4日間の学びをギュッと圧縮したものですので、臨場感までは再現できませんでしたが、4日間で学生の顔も逞しくなり、自身の将来の姿について考える幅が大きく広がったの

ではないかと思っています。ご登壇いただきました皆様、そして全体のマネジメントをいただきました相良さんに改めて感謝申し上げますとともに、来年度以降も引き続き、本学での講座へのご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。



資料 千葉大学「働くことの意味」と「感想文」から

◆千葉大学「地域で仕事をおこす」講座
より◆2018年8月6日－9日

記録 協同総合研究所：相良 孝雄

①働くことの意味

1、「人の役に立つこと」「自分の存在価値を見出すこと」という考えは初めから持っていました。この講義を通じて「人とつながって働く」といいなと思いました。障がいのある方が一般の働き方ができないから給料は安いまたはボランティアだけど働きたいという話を聞きました。人の役に立って自分が生きる意味を見つけられたという話でしたが、周りの人とつながったからできたことです。ワーカーズコープの方が理解して、できる仕事をやってもらうことで、無表情だった障がいのある方が周りの人とつながりをもち笑顔になっていった例が印象に残りました。またワーカーズコープの仕事おこしは市や地域の人、学校、企業など様々な人とつながることで成り立っています。意見がぶつかって大変なことも多いですが、協力するからできることがたくさんあります。経営者、出資者、労働者、利用者がすべて一体になったようなスタイルだからこそ、みんなで作って、仲間の成長を喜びあえる。現代では何か強みを持って自分を売り込まなければならぬ、個を磨いて周りとの差をつけなければという焦りも感じます

が、個が突出していなくても、人とつながってやれることは大きいのではないかと思います。

2、私にとって働くことの第1の目的は生活をするためであるという考えは変わりません。賃金の低い仕事でもやりがいがあれば良いとは思わない。しかし、働く上で何かやりがいを見つけられることは幸せなことだと思う。もちろん世の中の誰もが、自分たちで主体的に仕事をするを理想とはしていると思うが、あくまでそれは理想論であると感じる。組織が大きくなればなるほど、その体制の維持が難しくなるからだ。しかし、誰もが皆、ワーカーズコープの方々のような考えは少なからず共有しているのであって、それがどうにも実現できない現状に問題があるというだけなのではないかと感じる。

3、最初の授業でもいったように、自分のなかではまだ働くことの意味はそれなりの収入のためという考えは変わっていないが、その収入を得るための仕事というのただただ企業に就職するというのではなく、皆それぞれ権限を持ち、自分たちでいろんなことを決めていく協同労働という働き方があるということを知り、自分が大学生活を送っていくなかで、何かそういった、自分でこういうことをしたいということを見つけることができ、収入を目的としないような働き方が

できればと思う。ただ今回の集中講義を通じて、新たな働くことの意味に気付くことができたと思う。障がいがある人や、お年寄りの方がワーカーズコープで働いている事例を聞き、働くことは、収入だけではなく、表社会に出て、人のためになることをすることで、自らの存在価値を得ることができるという点に気付くことができた。やはり、障がいがある人やお年寄りの方はなかなか正規の仕事をするのが難しく、それによって社会とは一線を画してしまうことがあるが、ワーカーズコープで働くことで、人の温もりに触れ、塞ぎがちだった心が徐々に開いていくことは、とても良いことだと思った。自分は人とあまり関わらないような職種に就こうと考えていたが、このような考えを変えようと思う。

4、就職活動のなかで、自分はどんな仕事に向いているのか、どんな仕事をしたいのか、そういう答えを出せずに、ひたすら大手企業に応募しました。この授業を通じて、はじめてワーカーズコープ、協同労働を知りました。自分のなかで「働くことの意味」を改めて考えました。

単なる労働者として働くのではなく、経営者、労働者として働くことは、自分の主体性を発揮できるし、いろんな困難を抱える方も助けてあげることもできるし、仲間と一緒に協力していろんなことを実現できます。この方が、やりがいを感じるじゃないかなと思っています。

昨日(8/8)、話をしていただいた先生たちから、利益を第一としない仕事をしてても、生活していけるということも教えてもらいました。働くこと、自己の生活を重ねて、周りの人とも関わりながら、自分の成長もできれば最高だと思えます。

5、仕事は自分が生活していくために行うことであるが、働くなかで、自分にとっての働く意味をみつけていくべきであると思う。

自分が思う働く意味は、仕事を行う上で、こうなってほしいという環境や世界を自分のなかで見つけ出し、それを形成していくためには、どのような仕事をするのが可能なのかを考えることだと思う。様々な仕事に就いたとしても、その仕事をする上で、変えていくことのできる何かは存在すると思う。だからそのために自分が就いた仕事に、一生懸命取り組んでいくことが大切だと思う。

6、たぶん人生の大部分を仕事のなかで過ごすと思う。働くことは、まず自分がやっている仕事を通して、社会との関連をつくり、社会における存在感が感じられる。次に働くことは、1人の人生を変えることだけではなく、周りの人、自分が生きている地域にも何らかの変化をもたらすことができる。1人の力は弱いですが、チームワークの形で、皆の力をあわせて、共に働くことで他人の生活、社会

全体が変えられる。

働くことは、自己の能力、創造性を発揮した上で、自己満足を得る。同時に他人と働くことで、社会貢献、人類全体の進歩に役割を果たすことが出来る。

7、私にとって働くことの意味は、自分がやりたいことを達成する手段の1つである。例えば、私はもっと学校で学びたいが、自分で生活費を稼がなければ学校で学び続けられない。働いて自分で稼いだお金を使って学生生活を支えれば、両親から批判されない。

また将来、私は社会に貢献したいという人生の目標を達成するには、社会で働くことになると思う。働くことは、人生の目標を達成するためではなく、人生の目標を達成させるための手段として働くことを選ぶ。

8、相良先生も言ったように、人生で働く時間はとても長く、睡眠に次いで2番目であり、その時間をただお金のために漠然と過ごすのはあまりにも空しいしもったいない。お金を稼ぐのも大事だが、それと+αでやはり、生きがいや意義を見出す必要があると思う。自分の場合は資料にある「自分史」の面からいうと、小さいころからこれといって好きなものはなく、将来について考えていた。そんななかで(困っている)人を助けるのは当然ではあるが、気持ちのいいものであり、それを仕事にできたらと思い、警察官を

志望したので、自分にとって働くことの意義は、地域のひびと、ひいては地域への貢献である。

9、私にとっての働くことの意味は、授業前と特に考えは変わっていませんが、やはり社会のなかで、経済的に豊かになることだと考えます。4日間の授業を受けて、ワーカーズコープの協同労働という理念や、そのよさも理解できて、そのような考え方を大事にしている方々も世の中にはいることを知れたのは良い経験になった。だけど自分は、家の事情で大学に入るのも、入ってから生活していくのもかなり金銭的に苦労していて、お金がないと何もできないことをよくわかっているのも、やはり経済面が一番大切だと考えます。

②全体を通じての感想

1、ワーカーズコープの仕事おこしや協同の理念に感銘を受けた。ワーカーズコープの取組みが今ある社会問題の解決に大いに役立つと思った。最後に聞いた当事者意識の話は、もう一度自分の認識や考えを見つめ直す必要があると思った。

2、4日間の集中講義を通じて「働く」ことについて、その意味も内容もすごく考えさせられた。今まではただ普通に大学を卒業して、就職して、家庭を持つてというふうに、人生設計の1つとして「働

くこと」を捉えていたが、この授業で「働く」ことについて当事者意識をもって、その目的や意味を改めて考え直すことができた。「ワーカーズコープ」というものが、何をしているか、どういう団体なのかも授業を受ける前は何も知らなかったが、実際にフードバンクに足を運んだり、いろんな方の話を聞いたりして、理解を深めることができた。特にフードバンクでの体験作業では、実際に送る人の立場、家族構成、状況などを考えて、箱に何を入れるのかを考えるのは難しく、ワーカーズコープで働く、またはボランティアの人びとの大変さを身を持って知ることができた。いつも自分が考えている「ふつう」や「一般論」は実は画一化されているものの一部なのではないかという問いはとても刺さるものがあった。

3、今回の集中講義を通して、現代社会のなかに存在する高齢化、貧困、子育てなど複数の社会問題の深刻さを改めて実感させられました。自分の理解では、今回ご紹介いただいたワーカーズコープの理念は、社会問題を解決するために、仕事をおこすことによって、地域に住んでいる住民たちが自ら提案し、解決しようとする、1つの良い対策を提供していたと思われます。しかし、地域によって具体的な対策は違ってきます。どのような職場をつくるのか、どのような仕事を提供するか、参加している住民たちの利益や福祉のために一番大事なことでもあ

り難しいと思います。

最後少し残念に思ったことは、若者そして留学生を含む外国人に対する支援の活動が足りないことです。今後の具体的な対策を期待しています。

4、今回の授業を通じて、ワーカーズコープという組織の存在について初めて知りました。ワーカーズコープは日本社会のさまざまな社会問題を解決しようとして各地で活動しています。例えば子どもの貧困対策として、子ども食堂を創り上げました。子ども食堂は根本から子どもの貧困問題を解決できませんが、少なくとも子どもたちに希望を与えていると思います。自分の家庭は貧しいけど、この社会は温かいところもあり、あなたたちは1人でないというメッセージがきっと、子どもの心に届くと思います。ワーカーズコープの今後の活躍を期待しています。

5、本講義では、ワーカーズコープについてに限らず、様々な社会問題についても考えることができ、とても有意義な時間を過ごすことができたと思う。特に専攻している障がいや教育の分野においては、今まで知ることのできなかつた現状や新しい取り組みなどについて知ることができ、とてもためになった。

教育学部で学んではいるが、教職のみを自分の進路として捉えているわけではないので、仮にこれから教育や障がいに

ついでに事業や活動を自ら始めていく場合に、どうすればいいのかなどを考えるよい機会を得ることができたと感じている。この4日間で、新しい視点や考えを多く知ることができたので、参加して良かったと思う。

4日間、ありがとうございました。

6、今回の集中講義では、色々なことを学ぶことができた。「働くとはどういうことか」から、協同労働という働き方、社会問題まで議論を通じて考えを深めることができた。自分は、働くことは第1の目的として収入を得るということ考え方は変わっていないが、障がい者の方や、引きこもり、ニートの方が正規の雇用では働くことができず、ワーカーズコープで働き、人の役に立ったり、人の温もりを感じることで生きる力を得ることができたという事例を多く聞き、働くのは収入のためだけではなく、自らの存在価値を得るといった目的もあるのだなということを知ることができた。

7、今も中国企業を対象して就職活動をしている最中です。「働くことの意味」を考えながら就職活動をしています。この授業を通して、はじめてワーカーズコープ、協同労働を知りました。その新しい働き方にすごく興味があります。これからは就職の選択肢になると考えています。

また地域に注目して、力を入れる重要

性も実感しました。若者がみんな都市で就職して、地方の高齢化と労働力不足が続いています。若者にも地域愛の意識を高めることが重要だと考えています。

8、「働く」ことについて深く考えることができました。人とつながると大きなことができるとわかりました。最後の理事長のお話で、講義中それほど変わらなかったなと思っていた考えが一気に変わりました。インパクトがありました。対価をもらうのは明治維新以降であり、仕事は私のため、私たちのため、みんなのための3種ある。変化するスピードが速いのは受け入れるしかありませんが、工業化された考え方を直すべきだなと感じました。当事者意識があるかと聞かれたとき、当事者でない人が関わらなかったらいつまで経っても少数派の問題が解決されない以上、直接の当事者ではない第三者もまた当事者意識を持たなきゃいけないではないかと思いました。「みんなが当事者」と言ってくださってほっとしました。社会問題とは何かも目が開いたように感じました。人のなかで生きる人として働きたいです。ありがとうございました。

9、今回の集中講義では、様々な方の実体験を伺い、社会で働くことは何なのかということ色々と考えさせられました。フードバンクを訪れるという2日目の日程には参加できなかったことが非常

に残念でしたが、社会や地域のために貢献するのは、自らがやろうと思えば無限にあるのではないかと授業のなかで思ったので、できることから実践していきたいと思います。

10、元来、働くことは、生活していく上で、不可欠なものであり、働けなくなったとき、支えてくれる周りの人（血縁、地縁関係）たちの存在はお互いにとって必要であったため、自然と存在しているものであった。それは日本だけではなく、産業革命以前の西洋でも見られる形であった。しかし、この体制では生産効率が悪く、生活は大変だった。その

ため人々は生活をよくしようと工業化を進めると同時に資本主義体制へ変化していった。しかし、その結果として多くの社会問題が発生することをあまり予期していなかった。そのため、現代に至るまで、様々な問題の発生に対して逐一制度を作ったり、体制を少しずつ変えなければ対応できなかった。

社会のあり方が変化すると良いことと悪いことを同時に生むのだということをもっと理解していかないといけないと強く感じたし、現代、貧困に悩む人が、昔、このような問題に直面するとは思ってなかったと思う。柔軟に対応することが必要だと思う。

4年目の試み——「模擬・団会議」を体験して——

沖縄大学
「ワーカーズ・コープ論」寄附講座



島袋 隆志
(沖縄大学法経学部 准教授)

1 はじめに

2018年度「ワーカーズ・コープ論」寄附講座を夏期集中講義として開講し4年目となりました。まず、この間継続して開講できたことに、九州・沖縄事業本部、那覇事業所、名護事業所のご協力に心から感謝申し上げます。

今回の受講希望登録者は2～4年生まで18名の登録がありました。本講義では、事業所訪問・体験を取り入れた形式を2年目より定例化しています。通常、講義前後に別の講義がある学生にとって現場体験等の実習を伴う講義を取り入れるには時間的制約が大きく、事業所を訪問することさえも困難さを伴います。他方、集中講義では、1日9時～16時半までも昼食時間を含めた実質的な拘束時間は7.5時間、講義コマ換算の5コマ分に相当する時間を現場体験や事業所メンバーとのディスカッションにあてることができ、事前学習で得た知識を、現場で体験する中で確認することも可能になります。そのような座学と現場体験とを往復することが、生きた学びにつながるものと思ひ、この3年間は夏期休暇の集中講義の形式を採って開講しています。

2 2018年度ワーカーズ・コープ論 ー講義概要ー

今年度は8月13日(月)から16日(木)までの、夏期休暇中の4日間連続日で事前学習1日、現場体験2日間、全体振り返り1日間の計15コマを開講設定しました。因みに、この期間は沖縄県外ではお盆の期間ですが、沖縄

では陰曆による旧盆（今年は8月23日～25日）が一般的で、新曆におけるお盆の官庁・学校・企業等の一斉休暇はありません。

講義の第一日目の事前学習では、まず、座学とグループ・ワークを織り交ぜながら、協同労働とは何か、それを実践しているワーカーズ・コープとは何か、そこでの組織経営・事業運営、そして働き方とはどういったものかを学び、一般的な、有限会社や株式会社とのコンセプト・仕組みの違いを理解しました。また、映画「ワーカーズ2」の紹介動画を視聴し、東日本大震災の後、被災地で仕事を起こし働く場所を作る活動の中から、被災によって激変した「地域」を住民にとって新たな居場所に変えていく労苦を感じながら、生き甲斐・働き甲斐とは何かをあらためて考えました。

第二、三日目は現場体験を設定しました。8月14日(火)は、那覇事業所・愛(かなさ)の「児童デイサービス・学童クラブ」の子どもたちを本学地域研究所の入るアネックス共創館に招き、そこで子どもたちの受入れ実践をしました。8月15日(水)は、当初、名護若者サポートステーション(以下：サポステ)のメンバーとともに田んぼでの草刈り作業などを予定していましたが、台風接近のため、協力先での現場作業体験と防災施設の見学をしました。

第四日目は、振り返り解説を行った後、各々事前学習・現場体験の振り返りレポート作成と、その発表を行いました。

3 実習一日目午前：シーサー教室 — 担当して見える子どもの多様性 —

朝9時、キーパーの飲み物や菓子等の準備等の受け入れ準備と、午前中の手作りシーサーの幸地先生(沖縄高齢協理事)との挨拶・顔合わせ、使用する粘土等の扱いの注意点の説明を受けます。10時、数台に分かれた那覇事業所の先生方とともに子どもたちが続々と集まりだし、本学アネックス共創館の中に、子どもたちの声が響きわたります。

今回、会場とした地域研究所・アネックス共創館では、毎週水・金曜日の放課後に「放課後こども教室」として、こども文庫、工作やサッカー教室を学生ボランティアとともに開催しています。この教室の開催曜日の合間での来学となりました。

子どもたちと学生との挨拶も早々に、さっそく手作りシーサー教室が始まりました。学生と子どもたちの2、3人がチームになり、まず粘土をこねることから始めます。「丁寧にこねることが良い出来栄えにつながる」との幸地先生のアドバイスに、子どもたちと学生とで交互に何度も何度も土をこねてはひっくり返すのを繰り返します。次に台紙の上に新聞を丸めてシーサーの顔の土台になる丸みを型作り、その上に粘土をかぶせて実際のシーサーの顔を作っていきます。目玉や耳の大小、牙の生えたものや、傍にチビ・シーサーのいるものなど様々なシーサーが姿を現し始めます。



幸地先生(左)と、粘土をこねる学生・子どもたち



様々な表情のシーサー

そもそもシーサーは、赤瓦屋根を葺く際に余った漆喰を、大工が獅子の形にして屋敷の守り神として屋根瓦の上に据え付けたものを縁としており、昔の家並みには、漆喰の量、作った大工によって様々な大きさ・形・表情をしたシーサーがあり、各々の屋敷を守っていました。

子どもたちが作るシーサーの顔もまた、大きさ・形・表情は様々で、時に学生らと談笑しながら、一つひとつのシーサーに魂が入っていく様子を感じました。

作り終えたシーサーは、3、4日乾燥させた後に、幸地先生によって窯入れされ、焼きあがったものが子どもたちに届けられます。

午前中に、シーサーづくりを終え、昼

食時には、子どもたちと学生らで一緒にお弁当の時間です。普段は講義と講義の合間に、自分の時間として昼食・休憩時間として確保されますが、子どもたちの見守り事業では、昼食を摂りながらも、子どもたちの様子から目を離すことはできず、しかも、食事を終えた途端、「お兄ちゃん遊ぼう、遊ぼう」と引っ張られていて、子育てには休む間もないことを実感しているようでした。

4 模擬・団会議への参加

そうした合間を縫い、昼食後に1時間強の時間を「模擬・団会議」として設定して頂きました。これは、通常は子どもたちの帰宅後に行われている団会議を、学生にも体験してもらいたいと希望したものです。昨年度までの講義では、職場体験として事業内容の理解まではできたものの、講義時間の制約が大きく団会議への参加ができなかったことから、本年度はこれを反省し講義時間中に時間をとり、模擬的な団会議を行うことで、皆で働き、皆で意見出しして、皆で経営・運営するという協同労働の意義を体験し考えてもらう機会としました。

模擬・団会議は、かなさスタッフの、津波古彩乃先生、山川先生から、子どもたちと午前中過ごした中で感じたことを中心に学生へ問いかけ、時間の関係上、財政面以外にポイントを絞り、①放課後

児童サービス事業とは、②運営上で、気づいた点、③工夫できると思った点、の3点を中心に学生が何を体験し何を感じたかを意見出しすることから始めました。

学生は自分とチーム組みした子の印象から始め、午後への工夫などとして次のような意見を述べていました。

- 中島さん(4年次):担当した子たちは、講師の説明とは違うこともしていたが、自分なりにやりたいアイデアを持ってやっている子だった。

津波古・山川先生からの意見

- (i)学校教育の中では一定の枠組みがあるので、独自性は、時に、この子たちをルール外とする場合もある。
- (ii)自分なりの発想を持っているが、完全に「自由」にはできない場合もある。学校の担任の先生は当事者なので、皆バラバラでも良いとはならないので、こちらから呼びかけて「担当者会議」を開いている。参加をお願いするのは学校の担任の先生、相談者(専門家)、地域で関わっている人等を交え話し合う。結果を子どもに返して反応を見る。

中島さん:午後への工夫として、子どもたちがやりたいことだけではなく、やらないといけないことにも誘導したい。

- 古堅さん(4年次):1人を見守るのが

やっつとで、30人も見ることはできないと思った。

津波古・山川先生からの意見

- (i)多動性障がいのある生徒たちがクラスに何人かいる場合もあり、それがどこに何人いるのかさえ把握するのは難しい。

古堅さん:午後への工夫として、注意すべきことがあれば、ちゃんと本気で言えば伝わると思うので、分かってもらえるように実践してみたい。

- 津波古さん(3年次):3人見ていたが、シーサーではなくドラえもんやアンパンマンを作っている子もいたが、それを見守っていた方がよいのか、シーサー作りに誘導した方がよいのか迷った。

津波古・山川先生からの意見

- (i)個々の関心があるもの、例えばトラックやユニボに関心がある子は、それを見た途端向かって走っていく場合も多いので、事前に一人ひとりの興味関心を聞いて、事故等を避けるようにしている。

津波古さん:午後への工夫として、何に興味があるのか聞いたり、注意して観察してみる。

- 比嘉さん(3年次):見ていた子が先生からの説明に集中せず辺りを見回しているとき、どのように対応すればよいか迷った。

津波古・山川先生からの意見

- (i)集中しない子を一旦外に出したりして、クールダウンする時間・場所を確保してあげるのも大事。
- (ii)「さん付け」励行している事業所もあるが、「先生」と呼ばせることで、自分の立ち位置の確認をしてあげることもときに必要。

比嘉さん：午後への工夫として、目線を落としてどのようにしたら伝わるか実践してみる。

- 田地行さん(3年次)：積極的な子が多かった。下に7人弟妹がいるので子どもと接するのは慣れていたが、午後への工夫として、弟妹に接するようではなく、先生の立場で接してみたい。
- 平良さん(3年次)：最初はこちらの話を聞かずにやり出していることもあったが、シーサー作りには積極的に取り組んでいた。
- 屋良さん(4年次)：シーサーの作り方を教えていたが長く感じたので、一緒に取り組みながら説明を加える方が効果的かなと感じた。
- 石原さん(4年次)：片付けを小学校1年生が率先してやっていて偉かった。

津波古・山川先生から「模擬・団会議」のまとめとして次のようなコメントをもらいました。

現場における団会議とは、「一人ひとりの気付き」が「全体の気付き」につながっており、午前中の学生皆さんの気付

きを、午後の活動につなげてほしい。その中で、午後に工夫できる点として、①学生の皆さんからの積極的な声掛けができていたのでよかった。初めて会う人への子どもの緊張感が高いので、声掛けは子どもには助けになる。②保護者から子どもを預かり子どもの安全確保は大切だが、自分の安全確保も重要。子どもたちは他者のケガや出血を見ると、より大きくショックを受けるので、自分の安全確保にも十分注意してほしい。③現代は、叱る場合にも理由を説明することを重要視する傾向があるが、時には、あれこれ言うのではなく端的に叱るのも大事なので、子どもにどのようにしたら伝わるかを必要に応じて判断してほしい。

団会議は、協同労働を支える要として、その議論の重要性がどのようなものかを体験してもらいたいと考えましたが、単に子どもと過ごす、子どもを預かるのではなく、どのように子どもたちに育ってもらいたいのか、そのためにはどのような環境づくり・環境整備が必要かを、僅かながらの時間からも各学生が感じていた様子でした。兄弟姉妹がいて慣れている学生であっても、今回の議論の中で気付きを得ていたことの収穫が大きく、団会議の重要性をあらためて感じました。

5 午後のサッカー教室 一午前の反省・工夫を通じた学生の成長一

団会議後、午後は、皆で教室から外に



午後のサッカー教室



午後のサッカー教室



子どもたちからお礼のダンス



皆で

続くグラウンドでサッカー教室です。男女の別なく、またグラウンド遊びの得手不得手な子も全員で、グラウンドに出て汗だくになりながらゴールを追いかけます。午前に出た意見のように、ボールや虫など、興味をひく何かを見つけては、それを追いかけていく子たちにも目を配り、声掛けする学生の姿が午前中との違いに出ていました。

6 実習二日目、作業体験、施設見学

二日目は、台風16号の影響を受け大雨の中となりましたが、名護サポステの仲兼久周子所長から、名護事業所の事業概要の説明を受け、その足で、同サポステが協力を得ているJA羽地での羽地米

の箱詰め作業の体験をしました。「羽地米」は地域ブランド化され、扱いの注意と栽培時にも米虫を寄生させないよう極小ピンポイントの農薬のみを使用し、ブランド価値を維持するのに注意を払っている製品だということが分かりました。事業所では、羽地の地で休耕田を再耕し、私たちが訪問した前の週に刈り取り収穫、そして田植えを終えていました。次期収穫にはゼミでの訪問を計画しています。

二か所目には、新しく建設された名護市新消防本部併設の北部連携防災訓練施設の見学をしました。沖縄では、大きな地震等の自然災害はないという「迷信」のようなものが根強くありますが、施設見学の被災イメージの動画からは、決し

て沖縄も例外ではないことが解説されました。

名護事業所はそうした地域の理解というネットワークの中で、サポステ事業、保育事業を行っている様子が分かりました。

昼食は、名護事業所「子育て広場 ぴっぴ」にて、子どもたちに囲まれながら昼食を頂きました。前回は訪れたこの保育



JA羽地での「羽地米」箱詰め体験



名護市防災研修センターでのレクチャー



「ぴっぴ」で昼食後に

施設では、小さな子が学生を待っていました。実習二日目からは学生も子どもたちの見守りにも慣れた様子でしたが、その一方で、見守る側の先生方の変さも理解していることが、講義後の感想から分かりました。

7 むすびにかえて -ワーカーズ・コープ論4年目の振り返りと今後の展望-

今回、4年目して初めて、模擬的ではあるものの団会議に学生が参加することができました。これまで大学への帰着時間との関係で、実際に現場体験をすることができた一方で、子どもたちの帰宅後に開いている職員間の話し合いの場「団会議」に参加することができないでいました。一時は、連続した実習期日での合宿を含むことも考えましたが、今回、模擬方式をとることで、午前の活動で気付いた点を午後実践することができました。本年度も、各事業所のご理解とご協力を頂きながら、事業所でどのように気付きの場を作っているのかという理解を進めることができたことに、心より感謝申し上げます。

学生にとって、経済環境が良くなることは雇用先も多くなり、大変よいことだと思う反面、適当にしても人材不足だから「どこかしら就職先はある」という意識が、学生の合同企業説明会の参加者減少などに表れてきていると感じていました。しかしながら、どのような時代であっても、重要なことは地域を見つめ

ることのできる人材が、その地域における課題を事業の中に組み込むことのできるよう育て、その人材が地域に定着できる環境づくりをいかに継続できるか考えることではないでしょうか。本学は建学の理念を「地域共創・未来共創」として大学と地域が共にあることを掲げています。その中で、人と地域と事業とをつなぐことができる人材を育てる仕組みの実践講座として、今後も「ワーカーズ・コープ論」の中で、働き方の一つとして提案していきたいと考えています。

いよいよワーカーズ・コープの法人格

に向け法制化が進んでいると伺う中で、その仕組みと趣旨との両方を理解した学生・若者が、様々な業種で社会的企業のベンチャーとして仕事を起こし、先輩方を追い越さずとも負けないようなワーカーズ業界のリーダーになってもらいたいと密かに願っています。

今後ともワーカーズ・コープ各位からのご協力の下に講座開講にあたりたいと考えています。重ねて感謝申し上げます、ありがとうございました。

以上

沖縄国際大学キャリア教育科目群の 開設と今後の展開

ー夏期集中型寄附講座「ワーカーズコープ論」
実施機関との連帯を踏まえてー



村上 了太
(沖縄国際大学教授/総研理事)

1 はじめに

沖縄国際大学キャリア教育科目群(共通科目、以下本科目群)は2014年度の開設以来、本年で5年目を迎えた。この間、様々な教職員の協力を得ながら展開中の科目について、「改善」を進めているところである。本科目群の開設以来、科目群責任者として通常の専門科目(経済学科の専門科目である経営学Ⅰ、同Ⅱ、欧米経済論Ⅰ、同Ⅱ)ともども、初年次学生への積極的な対応を行っているところである。

本科目群は、当初、キャリア入門、ジョブインタビュー入門、文章表現入門、キャリア・デザインAおよびキャリア・デザインBの5科目で開始されてきたのだが、2017年度より正規科目としてワーカーズコープ論およびグローバル・キャリアを導入し(実施は、2016年度から)、さらに2018年度には文章表現入門を「自己表現入門」そして、キャリア・デザインAおよびキャリア・デザインBを「キャリア・デザイン」に統一するなど、学生の実状に合わせて科目名の変更も行われてきた。また、各科目の担当教員も本学の学生気質や就職動向まで理解していることを前提に専任教員を中心に運営がなされている一方、その目的を補完するためにキャリア教育に明るい担当者を非常勤講師として採用している。また、各科目の有機的連携や講義運営上の課題を共有し解決策を探るために、定期的に一堂に会して改善活動を展開しているところである。

本講では、本科目群の開設5年目、そしてワーカーズコープ論の実施3年目という時期

を踏まえ、当該科目を構成している本科目群全体の動向を踏まえて解説を試みることにする。予めご留意いただきたいことは、本科目群やワーカーズコープ論に対する「成果」が求められやすいところであるが、しかしその成果を図るための尺度になるものが多様であることから（たとえば、履修者の増加、就職率や進路決定率の向上、退学率・除籍率の減少などの様々な指標）、ここで特定の「成果」を掲げたとしても、それがいかほどの説得力を有するだろうか、という疑問が出てくる。そのような疑問の一方で、長期的には様々な対策（大学生活において様々な選択肢を提示すること）によって履修生を含めた本学学生にとってワーカーズコープ論が何らかのプラスになっていることに期待を寄せている。

特に本稿では、各大学で実施されてきた／実施されているワーカーズコープ論（科目名称は大学によって異なる）の広がりを受けて、大学間における連帯の必要性についても若干の見解を示すことにしたい。

2 本科目群と沖縄の雇用環境

沖縄国際大学は90%を超える学生が沖縄県内出身者（離島を含む）で占められ

ており、例年の卒業生1,200名のうち80%程度が県内事業所へ、そして残る20%程度が県外事業所へと、それぞれ就職を希望し、その一方では、大学院への進学希望や公務員希望者も10%程度存在している*¹。1,200名の進路を全て把握できているわけではないが、リーマン・ショック後には500人あまりの進路未定者がいたものの、2017年度では100名ほどまで減少していることから、景気動向に伴う雇用環境の改善も影響していると思われる*²。沖縄の置かれている環境は「1972年の復帰後、本土が景気拡大期に入り雇用環境が改善しても、米軍占領期間が長く産業が蓄積していなかった沖縄は取り残され、求人倍率は0.5倍がせいぜいだった。最近の底はリーマン・ショック直後の不況（2009年度平均は0.28倍）。その後、全国ワーストは脱していないが右肩上がりが続く。完全失業率も2000年代初めは全国平均の倍近い8%台だったが、16年は4.4%まで下がった」*³とあり、全国平均とは未だに格差が存在している物の、徐々に改善されていると捉えることができる。

ただし、沖縄は、最低賃金（2018年8月現在、737円）が全国で最も低い地域の1つであり、全国加重平均額848円よりも100円以上低い*⁴。ただし、2018年

* 1 沖縄国際大学キャリア支援課提供資料。

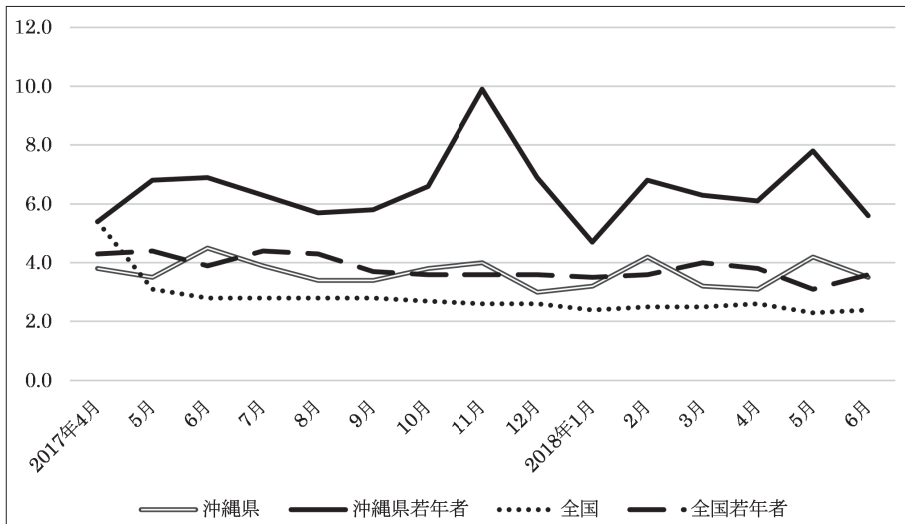
* 2 同上提供資料。

* 3 「地方経済面 沖縄」『日本経済新聞』2017年12月9日。

* 4 厚生労働省「平成29年度地域別最低賃金改定状況」

(https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/roudoukijun/minimumichiran/:2018年8月3日)。

図1 沖縄県と全国の失業率の推移



出典：総務省統計局『労働力調査』、沖縄県企画部統計課『労働力調査』。

10月から見直される最低賃金では、最も低い地域ではなくなる予定である*⁵。また2018年5月時点での現金給与総額も「決まって支給する給与」でなおかつ「5人以上の事業所」においては沖縄では213,082円であるが、全国平均では263,179円である*⁶。低賃金に加えて失業率も高いことは、図1からも明らかである。この図を見てもわかるとおり、沖縄の失業率が常に高いことがうかがえる。沖縄は、低賃金の上に失業率が高く、さらには非正規雇用が高いことがうかがえる。加えて2015年の段階ではあるが、県庁所在都市の中で那覇市の食料物価指数が全国一になっており、四重苦であるといっても過言ではない*⁷。このような

ことから「県内事業所の平均給与は全国の8割の水準で、全国一最低賃金額が低く、最も高い東京都との差が拡大している。県内では物価と賃金が乖離(かいり)し、労働者の生活を圧迫している可能性がある」*⁸のである。

沖縄国際大学に奉職して20年目にあたる今日、このような「厳しい雇用環境」を講義・演習で取り上げることは、教育業界に籍を置く1人として比較的容易なことである。しかし問題は、「受講生に厳しさだけを植え付けてよいのだろうか。厳しさの先に見える光はないものか」ということである。そのような思考回路が働き出した結果、次節以降に見るキャリア教育の導入となったのである。

* 5 『沖縄タイムス』2018年8月8日(電子版)。

* 6 沖縄県『毎月勤労統計調査』および厚生労働省『毎月勤労統計調査』。

* 7 『沖縄タイムス』2017年4月12日。

* 8 同上。

3 本科目群の目指すもの

様々な講義を踏まえて本科目群が目指すものは何か。それは、学生への講義だけではなく、学部学科を超えた教員間の相互理解を深めることにある。キャリア教育をFD (Faculty Development : 大学教員の教育能力を高めるための実践的方法) と位置づけ、本学で学ぶ意義そして本学の立ち位置などを学生に教授する前に教員サイドの理解が必要であると考えたのである。本科目群の導入部分の講義である「キャリア入門」では、大学の歴史(1972年の本土復帰前後を中心とした設立経緯)、アンケートに基づいた外部評価(本学OBやOGの活動状況)などを講義する回がある。まず教員がそうした本学の基本情報や社会から要請されているミッションなどを知ることによって、本科目群だけではなく、協力を仰いでいる教員の講義・演習にも反映させていただきたいと考えている。

本科目群を構成する教員は、筆者の所属する経済学科教員が最多である。理由としては同じ学科であるために協力が得られやすいことだけではなく、キャリアを人生設計や進路選択と解釈するならば、「就職」というステージもその1つにあるため、親和性も具備されているからである。と同時に学歴別生涯所得や企業構造分析などを学ぶことで、経済学と

もリンクしてくるため、経済学からのアプローチも必要となってくるのである。他には法律学、情報工学、心理学、歴史学など様々な専門分野を活かして各回の講義を担当して頂いている*9。各専門科目の一部をキャリア入門に活かすために、本学の歴史、ブラック企業、社会人基礎力そして海外留学など様々なトピックを網羅することになったのである。特にブラック企業とは、労働法の観点からの講義であり、学生が日常経験していると思われるアルバイトでの経験と照らし合わせながら身近に潜んでいる法律問題を考えさせる機会を提供しているのである。

上記のように、本科目群の「キャリア」とは多様な進路選択がある中で、学生生活をどのように送るべきかを考えさせることに目的がある。こうした取り組みが今後続けられるとすれば、いずれは社会環境も変化していくだろうから、キャリア教育そのものの見直しを加えながら講義展開を図らなければならないであろう。

4 ワーカーズコープ論に見る「ワーカーズ・ファースト」

上記の通り、一見したところ沖縄県の賃金水準の低さを理解するには、1)労働組合の結成率、2)賃金支払者側の労働への理解、3)最低賃金の引き上げな

* 9 基本的にはキャリア入門はオムニバス講義と位置づけていることから、本学の専任教員はいわば時間担当講師である。

どが指摘される場所である*¹⁰。確かに、本土ブランドの店舗が市中で散見されるのだが、実態はフランチャイズ・チェーンの場合も少なからず存在し、また100円ショップ、回転寿司、ファーストフード店など、消費生活を送る上では利便性に長けたカスタマー・ファーストの店舗が散見される。確かに、これらの店舗は消費生活を送る上では利便性が高く、顧客の期待に沿った商品が提供され続けるであろう。その一方、カスタマー・ファーストによってワーカーズ・ファーストが犠牲になることは必然である。すなわち、低価格の商品を提供するためには、様々なコストが削られることになることから、自ずと人件費もその対象とならざるを得ないのである。ということは、1) 非熟練労働(作業のマニュアル化)を中心とした低付加価値労働の多用、2) 大学生を中心とする若年労働者の多用などが想定されることになり、同時に労働基準法を初めとする法令に比較的疎い世代が含まれるという意味を有することになる。かつての年少労働が各国の児童福祉に関する規制によって制限されるようになって以来、比較的「安価な」労働力として大学生に企業が目が向けられるのである。

このようなカスタマー・ファーストによる労働者のしわ寄せが出ていることは

明らかであろう。学生達も低価格商品やファーストフードを購入できるという利便性が享受される一方、働く立場からすると低賃金労働を余儀なくされることになる。低賃金だけならまだしも、正規雇用すら必要とされない労働環境が徐々に幅をきかせるようになってきている。つまり、正規雇用による安定した環境下での企業への貢献が必要とされにくくなり、労働の品質がマニュアル化の中で属人性を帯びなくなったのである。こうした影響は確かに低価格製品の販売を実現させることになるのだが、その一方で学生達の就職活動への影響を及ぼすことになる。

5 本科目群とワーカーズコープ論

本稿の目的は、沖縄の実態に照らし合わせて展開してきた科目群全体のバリエーションを拡充させるという文脈に基づいて、ワーカーズコープ論を導入してきた。バリエーションの拡充とは何か。それは、国際労働機関(ILO)の提唱してきたディーセント・ワーク(Decent Work)にも通底する働き方である。ディーセント・ワークとは「権利が保護され、十分な収入を生み出し、適切な社会的保護が与えられる生産的な仕事」*¹¹を意味する。すなわち、資本・賃労働システムに規定される雇用労働では、支配・従属関係を固

* 10 たとえば、『沖縄タイムス』2017年6月7日(電子版)では、「県の算出した推定組織率は2015年に沖縄では9.9%と初めて1割を切った。16年はさらに下がり、9.8%で過去最低を更新。全国の17.3%とも大きく開いた。労組関係者は要因に、非正規労働者の多さと企業規模の小ささを挙げる」と述べられている。

* 11 佐賀一道「規制緩和という強まる“使い捨て”労働の流れ」『エコノミスト』2006年7月25日号、30ページ。

定化させてしまい、低賃金・長時間労働が常態化してしまう。たとえば非正規と呼ばれる労働とは「非正規雇用を中立的に労働契約の要素によって定義するとすれば、正規雇用にはない『短時間』『有期の定め』『間接雇用』という契約要素の一つ、または、複数の組み合わせによって成り立っている雇用」*12と定義される。しかしこれが善意として、たとえばワーク・ライフ・バランス (Work Life Balance) の関連として、いわばオランダ・モデル(ワッセナー合意)の延長として機能するような仕組みにはなっていないのである。ここでオランダ・モデルとは「①同一価値労働であれば、パートタイムも正社員も時間あたりの賃金は同じとする、②社会保険、育児・介護休暇なども同じ条件とする、③フルタイム労働とパートタイム労働の相互転換は労働者の請求によって自由とする」という内容を示すのである*13。端的にいえば、「労働市場の活性化」「福祉の見直し」に「賃上げの抑制」*14である。

これが我が国でも紹介されてはいるのだが、日本的な改編によって問題点がいくつか生じてきた。オランダ・モデルに比べると日本的雇用慣行の下では、同一価値労働・同一賃金制度が存在しない以上、待遇切り下げによる「低コスト」の

労働力を多用する契機を拡大させることになったのである。さらに労働法制の柔軟な動きは、日経連が1995年に提唱した「新時代の『日本的経営』」*15の指針とリンクするかのごとく、さらに労働者の立場の脆弱さが露呈するようになった。さらにはこれまで存在していた正規と非正規の壁がなおさら厚みを増した結果、「一度転んだらどん底まですべり落ちていってしまう『すべり台社会』の中で、『このままいったら日本はどうになってしまうのか』という不安が社会全体に充満」*16するようになっていたのである。沖縄ではそれにもまして低賃金に拍車がかかっていることから、政労使それぞれからの改善が望まれるところである。

昨今の「働き方改革」によって日本の雇用慣行が即効性を持って改善するとは考えにくい環境において、オランダ・モデルの根底にある政労使の「対等」な立場での協議とその伸長が必要であろう。それぞれが対等な立場であれば過労うつや過労死自殺などの問題が露呈することはない。やはり対等ではないからこそ、労働者にしわ寄せが来るわけである。労働組合の結成や経営者への交渉など、正規雇用に比べて交渉力に弱さがあるため、その解決策としてワーカーズコープ

* 12 中野麻美「非正規雇用(パート・有期・派遣労働)をめぐる課題と展望」『学術の動向』第18巻第5号、2013年、14ページ。

* 13 たとえば、紺野登『幸せな小国オランダの智慧』PHP研究所(PHP新書)、47ページ。

* 14 『朝日新聞』2000年1月4日。

* 15 日本経営者団体連盟『新しい時代の「日本的経営」』1995年5月
(<http://www.janis.or.jp/users/ohkisima/rekisi/199505nikeirennnsinnjidai.html>:2018年8月24日)。

* 16 湯浅誠『反貧困』岩波書店(岩波新書)、2008年、vページ。

という考え方も敷衍させていく必要がある。

さらに、今後の本科目群の展開も含めたデザインを披瀝してきた。2014年度の導入以来、仮に1年次でキャリア入門を受講した学生は、さらに留年をしないとすれば今年3月に卒業したことになる。こうした学生が2018年3月現在で進路決定率が大学平均よりも上回っていたとすれば、本科目群の教育効果が存在した可能性がある。もちろんその他の影響も考えられるにせよ、本科目群の効果が測定されることになる。

6 今後の展開

周知の通り、本学は約5,700人の学生が在籍している。本講座は履修者の上限を100名としているが、今後の展開としては、座学と実学の双方からワーカーズコープ論を展開できないかということを描きつけておきたい。すなわち、学生は他の講義・演習を含めて「座学」が慣習化されている。本学でも平和学習に関連する科目では学外での課外活動も実施されていること、そして企業視察なども実施されていることを踏まえると、ワーカーズコープ論が開講されている期間に県内事業所への視察も可能ではないかと考えられる。

今後は、本学のインターンシップ制度への組み込みも検討できるのではないかとと思われる。ただし、インターンシップ制度は本科目群とは所管部署がそもそも

異なり、科目群として関与する余地に乏しいことも指摘しておかなければならない。制度の拡充は時としていくつかの課題を掲げるその典型例が制度の壁である。教育とは長期的な効果を期待する取り組みであるため、今後の展開も併せて長期的な視点を導入せざるを得ない。

とはいえ本論を掲載していただいている『協同の発見』誌は、大学関係者だけではなく、様々な事業所で奮闘されている方々も読者対象としている。様々な事業所の方々に大学から何が指摘できるかといえば、より大学との連携を深めるといふことであろうか。これまで述べてきたインターンシップだけではなく、学生による交流を拡大する余地はあるように思われる。大学でも地域連携の必要性が唱えられ、国公立を問わず、また公私の機関を問わずして相互に有機的な連携が拡大してきている。こうした動きをさらに拡大させることにより、大学と事業所それぞれの強みを活かしつつ、他方では弱みを改善できるのである。特に弱みと思われる部分では、大学の場合は少子高齢化に伴う競争激化や社会連携の必要性がある一方、事業所の場合は1) 予算獲得のためのノウハウ、2) 自主財源の構築に向けた組織の持続可能性の探究、3) 賛同者を募っての協同労働の拡大などであろうか。こうした関係を深めていくためには、今回の寄附講座の展開を第一段階と位置づけて、その次のステップをも検討していく必要がある。ここで次のステッ

ブとは、寄附講座で知り得た知識を活かすため、「一歩前に踏み出す」*17力が蓄積されるように大学側としても支援していくことであろう。

7 まとめ

キャリア教育5年目とワーカーズコープ論3年目という時期において、ワーカーズコープ論を含めた本科目群は、その履修者数を増加させてきた。これは本学学生への認知度が高まってきただけでなく、進路に不安を感じる学生たちが「アクション」を起こしていることの証左であるとも捉えられる。こうした学生の履修者数の増加を一つの成果と位置づけるとともに本科目群を構成する他の科目や関連事業とも連携を深めて、今後ともワーカーズコープ論の拡充を図っていくことにしたい。これまで述べたとおり、大学でワーカーズコープ論を講義することは必要であると考え。しかし、大学との連携においてはこれで十分とは言えず、その次の段階として大学と事業所との連携まで視野を広げる必要がある。大学にとっても、1)多様な学びの機会提供に寄与すること、2)多様な進路選択、そして3)雇用労働を雇用労働の外部から捉えること、などが指摘できる。さらに事業所にとっても、1)事業全般について若者の

アイデアを取り入れる機会が増えること、2)必要に応じてボランティア活動やインターンシップの導入で事業所の理解が深められること、3)地域の課題や取り組みが普及できること、などが掲げられる。

冒頭で述べたとおり、大学とは長期的な教育効果を意図した組織である。即効性を有するとは限らないことから、その効果を測定するにも困難を極める。しかし、効果がないからといって今回のようなワーカーズコープ論を突破口とした社会連携や地域連携から撤退するわけにもいけない。では、どうすべきか。ワーカーズコープ論を支えていただいている関係者が連帯されていることを踏まえ、大学内部における、そして大学間における「連帯」も今後はより一層必要になってくるであろう。たとえば『ワーカーズコープ論』実施大学連絡協議会(仮称：大学によって科目名が異なるため、名称は協議が必要である)などとして議論を深めることができると考えている。各大学が抱える課題は異なるだろうから、ワーカーズコープ論に伴う「成果や期待される効果」も自ずと異なる。その異なりを共有することも大学側の連帯となるであろう。

そもそも沖縄国際大学で実施する意義は、在籍学生の90%以上が沖縄で生まれ、沖縄で育ち、沖縄で学んでいることから、沖縄を学ぶ必要性は、県内出身者の比率

*17 ここでいう「前に踏み出す力」(アクション)とは「主体性」、「働きかけ力」そして「実行力」から構成される社会人基礎力の一部である
(http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf2018年8月24日)。

が低いいくつかの他大学よりも強みを増すのである。また都市部で展開されている大学と本学の抱える課題も異なる。ワー

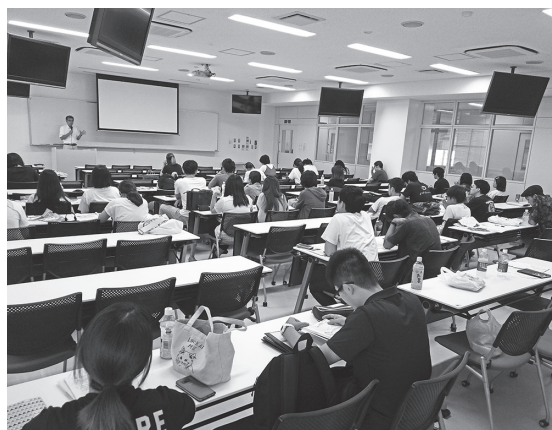
カーズコープ論を通して多様な課題を多様に解釈することにより、連帯を深めていくことが良いのではないだろうか。

お金のためだけに「働くこと」観から、
多様な「働くこと」観への変容

—3年目の2018年沖縄国際大学
「ワーカーズコープ論」寄附講座から—



相良 孝雄
(協同総合研究所 事務局長)



1 労働観が変容していった理由

ワーカーズコープ論において、学生の「働く目的」の価値観が変容した要因には

- 自らの問題や課題として学生の生活実感、体験を話し合い、自分が生きるなかで大切にしている価値観を出し合ったこと。
- 各講義で「問い」を持つこと、その問いに対して、用意された答えがないことを伝え、自由に発想できる環境をつくったこと。
- 講師者とともに、受講生1人ひとりのライフストーリーを語ること、聞くこと。リレートークや質疑応答を通じて、共通したテーマで、1人ひとり違う価値観を持ち、多様性があることをみんなで考えたこと。
- 地域、社会の現実にある課題と結びつけながら、多くの人間が関わり解決することを知るなかで、社会や他人に対して興味・関心を持ったこと。
- 教えられるアウトプットではなく、自らが学ぶ環境をつくるインプットの環境をつくり、ディスカッション、グループワーク、発表で学生同士の価値観をぶつけ合う場を

つくったこと。

労働観が変容していった要因として、学生が本講義の学びの当事者・主体者になりきれんかどうかが必要である。それが、沖縄国際大学のワーカーズコープ論でどのように展開したのかを報告としてまとめた。

2 3年目の寄附講座を迎えて

2016年度から始まった沖縄国際大学でのワーカーズコープ論を、毎年事務局の立場で関わるなかで多様な学びが生まれていると感じている。特に今年は、学生の「働くことの目的」「地域づくり」に焦点を当てながら、講義者は沖縄で活躍している方々に多く話していただき、現実に取りかかっている課題を共有することを大切にしたい。

本報告を通じて、学びの変容、特に労働観の変容がどのように行ったのか。そこで学びの当事者である学生の感想とそれぞれの講演者が何を話したのかを掲載し、ワーカーズコープ論を全国の大学で開催する際の一つのモデルとして掲載した。

3 講座目的とカリキュラム

毎年、沖縄国際大学の村上了太先生と講座の打合せをするときに、カリキュラムの内容以上に沖縄国際大学の学生の状況を話しながらつくっている。その際に

出てくるのは、沖縄国際大学の就職に関する話である。オリエンテーションでも村上先生が話されていたが、例年1480名ほどが入学しているなかで、2017年度の卒業生は1272名(200名弱はその年に卒業していない)であり、そのうち就職内定者が905名(県内内定者709名)、大学院進学者54名、進路未定者が289名、不詳者は24名であるとのことであった。進路未定者や不詳者が卒業生の約4分の1にのぼることから、就職をあきらめる、展望が持てない、業界・就労条件だけで就職先を決めるのではなく、学生にとって、働くことの目的・意味を自らの生き方と照らしあわせて考えることの必要性を感じたことも、講座を開講する大きな目的の1つにしている。また村上先生が、キャリア形成科目群の責任者として、他の科目との相違点としてワーカーズコープ論が、協同労働によって地域での就労の機会をつくっていることを学生に呼びかけていることも、カリキュラムを作成する上で重要な視点になっている。

その意味で、地域の現状を見ながら、学生自らの生き方とシンクロさせて労働観を考える講座を企画した。

今年のカリキュラムで力点を起いたのは、「ワーカーズコープへの質問・疑問」「働くことの目的」を第2講座(藤田)・第4講座(相良)に持ってきて、講義序盤に学生の問題意識を出し合うことにしたことである。

2018年度 沖縄国際大学 ワーカーズコープ論 カリキュラム

回	日	時間	担当者	テーマ
1	8/20 (月)	10:40～12:10	村上 了太	オリエンテーション
2		13:00～14:30	藤田 徹	ワーカーズコープとは①(歴史と理念)
3		14:40～16:10	藤田 徹	ワーカーズコープとは②(実践)
4	8/21 (火)	10:40～12:10	相良 孝雄	若者の労働観と仕事おこしのワークショップ (地域課題から考える仕事おこし)
5		13:00～14:30	リレートーク① (地域の居場所)	那覇市地域包括支援センター松川 中村 丘学 森の子児童センター 大城 喜江子氏
6		14:40～16:10	グループ討議	リレートークの内容を聴いて感想・交流 コーディネーター 相良 孝雄
7	8/22 (水)	10:40～12:10	子どもたち 津波古 彩乃	那覇のワーカーズコープの取り組み
8		13:00～14:30	平良 亮太	沖縄の文化・財産から、若者が仕事をおこすこと (がちゅん報告)
9		14:40～16:10	リレートーク② (地域の居場所)	そいそいはうす赤嶺 和伸、東村学習支援(安里 大、 名桜大学2年生 渡橋 拳斗) コーディネーター 相良 孝雄
10	8/23 (木)	10:40～12:10	仲兼久 周子 高山 玲子	名護のワーカーズコープの取り組み
11		13:00～14:30	城間 愛子 ×高橋 弘幸	社会連帯でつなぐ、未来の沖縄づくりのために① (報告) 沖縄医療生協×ワーカーズコープ
12		14:40～16:10	城間 愛子 ×高橋 弘幸	社会連帯でつなぐ、未来の沖縄づくりのために② (討論) (コーディネーター相良 孝雄)
13	8/24 (金)	10:40～12:10	相良 孝雄	地域づくりのアクションプラン①(準備)
14		13:00～14:30	相良 孝雄	地域づくりのアクションプラン②(発表)
15		14:40～16:10	相良 孝雄	本講義のまとめ

また講義のはじめに7つの問いを出して、講座中に考えて欲しいことをあらかじめ提示した。

そして講義内容、講演者に、3点を大切にしてお話いただくようお願いした。

- 1、ワーカーズコープだけではなく、今まで社会連帯でつながった沖縄の方々に登壇いただき、地域課題から仕事をおこす内容を話し、身近に課題があることを感じる場をつくる。

- 2、講師者のライフヒストリーを多く話していただき、どのような想いで、働いているのかを共有する。

- 3、グループディスカッション・パネルディスカッションを多く行い、インプットだけではなく、アウトプットの場面を多くすること。

以下各講義の報告内容と学生の感想を見ながら、どのような学びの仕掛けや問いを出したのかを紹介する。

- 1、本講義の受講動機とは
- 2、これからどのような人になりたいのか。
(学生時代に何をしたいのか)
- 3、今まで生きてきたなかで、何を大切にしてきたのか。
- 4、地域を意識すること(したこと)はあるか。
- 5、なぜ人と人がつながる必要があるのか
(そのような場面はあるか)
- 6、自らが考える現代社会の問題とはなにか。
- 7、働くことの意味、目的とは

→上記7点について、「協同労働の協同組合」(ワーカーズコープ)の理念や実践をヒントに自らが主体者として学びあいます。

本講義での問い

4 各講座の内容と学生の学び

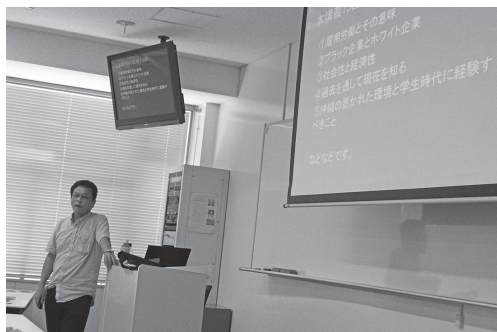
(1) オリエンテーション(村上了太)

▼議論ポイント▼

- ①ブラック企業とは
- ②アルバイトで「おや？」と感じたとき
- ③友達の話から「おや？」と感じたとき
- ④どのような対策を取ったか

報告

村上先生から、「ワーカーズファーストの国へ」をテーマに報告。沖縄国際大学の就職率等の現状を出すなかで、求職側と求人側による雇用のミスマッチが起きている。雇用労働の場合は、支配関係



が生まれるなかで、低価格で商品を提供するのに「人件費」に手をつけざるを得ない状況が生まれる。そもそも企業の目的は「儲けること」にあるが、問題は儲け方にあり、剰余をどのように使用するのかを考える必要がある。その上で参考になるのは、社会的企業であり、具体的には協同組合の父と言われるロバート＝オーウエンのニューラナークの実践と、沖縄にある共同売店の事例を報告した。

感想

- ブラック企業が存在するのは、雇われる側と雇う側の力関係が等しくないことや、雇われる側が軽視されていること、企業の経営方針など様々な要因があることを理解した。(産業情報1)
- 沖縄に共同売店があることを初めて知った。行ってみたい。(産業情報1)
- 就職活動をスタートする時期なので、本校の就職率を明確な数字で見れて良かったです。卒業生約1300人のうち、進路未定者が約300人。未定者数がとても多いと感じました。(総合文化3)
- 自分はなりたい夢を持っているが、本当にそれでいいのか不安になり、働くこと、そのものを少しでも知りたくてワーカーズコープ論を受講した。普段100円ショップが好きで、よく行っているが、買い物をする側が嬉しくても、働いている側の負担や給料面を考えたことはなかった。(総合文化2)
- 安く商品を提供しているお店の従業員

には、その分のしわ寄せがきていること、消費者から見れば安くて嬉しいが、従業員は大変な想いをしていることを改めて考えさせられました。ロバート＝オーウェンが行なった、会社のなかにあらゆる施設を取り入れ、従業員のために行動を起こしたことが、とても素晴らしく、オーウェンが目指す社会を今の時代でも取り入れていくべきだと感じました。(産業情報3)

(2) ワーカーズコープ概論(藤田徹)



▼ 議論ポイント ▼

- ワーカーズコープの話聞いて疑問に思ったこととは
- 職場で求められる力は能力か意志か

報告

藤田報告は「ワーカーズコープの理念と法制化時代の展望－沖縄における協同労働による仕事おこし、まちづくりを考える－」をテーマであった。

ワーカーズコープとは何かを、「クロー

ズアップ現代」「映画『Workers 被災地に起つ』の予告篇」を観覧。そして協同労働の本質として「労働者自らに決定権がある働き方」であることや、7つの原則を紹介。ワーカーズコープ運動の歴史として「前史：終戦からセンター事業団設立へ(1987年)」「第一期：全組合員経営の時代(1987年～1994年)」「第二期：共感の経営(1995年～2002年)」「第三期：公共を担う時代(2003年～2010年)」「第4期：社会連帯経営と法制化運動(2011年～2018年)」を報告した。

そしてなぜ今、協同労働の協同組合の法制化が求められているかを「労働の劣化」「コミュニティの弱体化」「格差の広がり」「貧困の広がり」「少子高齢化」「社会の持続可能性」の視点から深めた。最後に、沖縄ではゆいまーる(協同)の文化を大切にされるなかで、学生ワーカーズコープの可能性を展望する内容であった。そして報告に対して疑問を書いてほしいことは話し、その疑問に答えていった。

疑問

- 規模が大きくなると意見をまとめることが大変ではないか。(法4)
- 法制化のメリット、デメリット(法4)
- ワーカーズコープで働くメリット、デメリット。どんな人に向いているか(総合文化3)
- 全員が出資＝対等になると能力の違いなどで不満は出てこないのか(産業情

報4)

- 雇われる者との意識は本当に変えることができるのか。(産業情報2)
- リーダーをどのように決めるのか(総合文化4)
- ヨーロッパでは、なぜワーカーズコープの働き方が広まったのか。(総合文化4)
- 一般的な会社よりも、ワーカーズコープでの仕事の方が、働いている人たち同士の距離感が近いように思いましたが、実際どうなのか。(総合文化3)
- グローバル化に対してどう捉えているか。(経済3)
- 自信を取り戻した若者が社会に入ったとき、その先の会社などで通用するのか。自立できるほどの給料があるのか(経済4)
- ワーカーズコープで働いている人が、生活の変化で今以上に生活を豊かにしたいと感じた場合、給料を多くもらう手段はあるのか。組合員の給料をどのように決定しているのか。(総合文化2)

感想

- 自分の意見を言えることは、進んで何かに取り組む積極性や自尊心を高められる(法4)
- 日本人には、自分で考えるよりも命令されることが当たり前、楽だと思っている人が多いと思うので、教育から自分の考えを表していけるようにトレー

ニングをしていくべきだと思います。(法1)

- 私はワーカーズコープみたいな働き方を理想としている人の方がかなり多いと感じる。しかし株式会社のような労働者が弱い立場に置かれる働き方が社会の主流になっている。協同労働の働き方がもっと、一般的になってほしいと感じた。(産業情報3)
- 雇われて機械的に仕事をするよりも、困っている人に対して課題解決する仕事をする方が、確かに意欲的になれるそうです。(産業情報1)
- とても衝撃的でした。いつまでも仕事をせず学生でいたいと思ってしまう理由の1つが雇われる側にたつことがあるからです。(総合文化2)
- 私の就職活動を覆す考え方でした。(総合文化4)
- 仕事と暮らしを分けている思想は好ましくないとの意見でしたが、私はそうは思いません。少なくとも私は時間にメリハリをつけて1つに専念できる環境でもいいと思います。(経済3)
- 働くことに対して、私自身が不安に思ったり、どうしようかと考えている時期だったので、このような労働者でもあり、経営にも参加する働き方も選択肢としてありだなと思いました。(総合文化3)
- 周りの人と関わり支え合うことで、自分のやりがいや仕事に関する見方も変化していくところが協同労働の利点な

のだと思いました。(法1)

- 自分の固定概念が壊される場でした (産業情報4)
- 働き方の新しい選択肢が増えたことを嬉しく思う(総合文化2)
- 実際に学生がワーカーズコープに関わっていることを知り、興味が出ました。(法3)
- 自分ができて、他の人ができていない場合は文句が出ないかという質問について、「できる人が手伝えば早く終わる」との回答でした。しかし私は早く終わることは、自分が獲得した時間であるので、手伝うメリットがないと感じてしまいました。外国では、早く終わる人ほど、できる人という認識になり、給料があがるといいます。そのような考えも必要ではないかと感じました。(経済2)
- こういった働き方、地元への貢献の仕方、誰かの生きる理由になるなら、友だちにも教えていきたいし、自分もワーカーズとして活躍してみたい。やはり沖縄が好きだし、沖縄のために何か動きたい。自分が沖縄の何が一番好きで、仕事にしたいのか、調べ上げてじっくり考えたい。この講義を受けて本当に良かった。(総合文化2)
- 映画「ワーカーズ被災地に起つ」もぜひみたい。(法3)
- この沖縄国際大学でも仲間を集めて自分たちでワーカーズコープを実践していくことができるのかなと思った。(経

済3)

(3) 若者の労働観(相良孝雄)

▼議論ポイント▼

- 1) 受講動機は(単位の為6人、働くことを考えたい6人、地域づくり1人、他は無回答)
- 2) 働くことの意味・目的を考える(『働き方の哲学』(村山昇著)のワークショップより)自らの労働観と向き合う。(学年で分かれてグループ討議する)
- 3) お金があっても仕事をする人(10人/26人)、お金があったら仕事をしない人(16人/26人)
- 4) 地域住民は誰のことか、地域と関わる機会はあるか。

報告

相良報告では、本講義での7つの問いを意識しながら、協同労働の協同組合原則の「よい仕事」を中心に、「働くこと」の目的」について学生と討論しながら進めた。

働くことの意味を考える上で、労働観の変遷の説明とネガティブ、ポジティブ両面から労働観を出した。(苦役としての労働/罰としての労働/生活維持のための生業/人間の疎外化を引き起こす労働/求道、鍛練としての仕事/ワーキングプアから抜け出すことのない労働/自己実現としての労働)その後、現段階での学生自身の労働観についてワークショップを実施した。『働き方の哲学』

村山昇著P.176のリフレクションシートを元に)。講義序盤での学生自身がどのような労働観があるのか、そしてそれが本講義でどのように変遷するのかという問題意識で行なった。また今後の講義で地域社会とのつながりの話が増えるので、「地域と関わること」について、学生と意見交換し、今の自治体・町内会の加入率等や状況を説明した。

感想

- 仕事は大変で苦しいものだと認識しており、興味を仕事にできる人は世界でも限られた一部の人間のみだと感じていました。しかし興味から仕事をする事は可能であると知って、自分でも仕事に興味にできるように努力しようと思いました。(法1)
- 自分自身が働くことに対してどう考えるか整理することができました。(総合文化4)
- アルバイトをし始めたときには、お金を稼ぐためという気持ちが大きかったのですが、今ではアルバイト先の友達・仲間がコミュニティの1つとなっています。出会えた人たちとの関わりをつなぐことも働く意味となっています。(総合文化4)
- 今まで仕事に対して「皆、働いているから自分も働く」という曖昧な考えでしたが、いざ何のために働くのか考えてみると私はこういう考え方なのかと自分も知らなかった自分の意見に驚かされました。この考え方が、最終講義まで変わるのか、それとも変わらないのか自分でも楽しみです。(経済2)
- 私も「働き方の哲学」の本を持っているので、講義で取り上げられていて驚きました。「働き方改革」は「働かせ方改革」だとおっしゃっていたのですが、与えられた言葉をそのまま受け入れずに捉えられていて新しい発見になりました。昨日までは、ワークライフバランスについて、別々でも良いと考えていましたが、やっぱり違うかもしれないと感じました。私は働くことに対して我慢や諦めがあったのかもしれないです。仕事に楽しさややりがいを求めるのは2の次でとりあえず給与がちゃんと支払われていて、残業を強制されなくても週2で休日があったらいいなと思っていたので、労働観がネガティブだったのかなと思います。グループワークを通じて、出会い、成長、楽しさを求める人が多く、お金のためだけの仕事ではないというのがわかりました。(経済3年)
- 働くこととは何かについて考えるいい機会になった。1人で考えるのではなく、いろんな人の意見を聞きながらやるのはすごく自分のためになった。(法3)
- 自分が何を目的とし、何を持って仕事をしたいのか少しだが考えるようになった。皆さんの発表のなかで、共通していたのがお金の話だった。しかし

働くことの目的がお金だと少し寂しい気もするし、有意義な仕事にはならないと考えている(総合文化2)

- 仕事の目的自体に多くの定義があることをこのワークショップで気づかされた。(産業情報2)

(4) 地域づくりと居場所づくり(中村丘学、大城喜江子)



▼議論ポイント▼

- 地域の課題を意識すること、感じることはあるか。
 - 貧困を感じることはあるか。(10人/30人)
- 学部ごとに分かれて、2つの報告につ

いて感想交流をする。

報告

中村報告は、「地域の『つながる場』づくり」をテーマに報告。那覇市地域包括支援センター松川で働いており、地区の課題として、多世代間での「交流の場」「つながる場」がなく、孤立化・バラバラ・シラナイ状況が生まれている。高齢者においては、高齢者が増加(4人に1人)して、認知症も増加傾向にあるとのこと。そこで定期的に多世代がつながる場として、子ども食堂を運営する団体との連携を通じて、子ども食堂七夕祭りを開催した。多種多様な機関ともつながる仕組み、場づくり、ネットワークづくりを継続的に作りな大城さんの写真がないですが、地域包括ケアシステムを構築し、ソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)する、支え合う社会、地域づくりをしたいことが述べられた。

大城報告は、「人生楽しく素敵におおらかに!!」をテーマに報告

浦添市立森の子児童センターの館長で、「一般社団法人まちづくりうらそえ」代表である大城さんは、子どもの自立に向けた切れ目のない支援として、福祉と教育の融合と「投げない、捨てない、投げ出さない」を職員の共有認識にしている。児童館運営での中学生への学習支援を中心に報告し、2017年度は学習支援を受けた子が全員合格している。また高校と連携し高校での中退予防、小・中・

高でキャリア教育事業・母子生活支援施設の運営で家庭支援等も行うなど、学校や地域団体と多く連携している。見える地域課題の解決は無理でも和らげることを大切に運営しているとのことであった。

感想

- (問題は)他人事で自分の身の周りには関係のない話と思って、その問題について考えることを放棄していました。しかし中学生時代の同級生に同じ貧困の状況の人がいたり、将来、自分も1人で生活をして困る可能性もあることを感じ、いかに地域の問題に目を向けていなかったのかがわかりました(経済4)
 - 困ったときに、頼られる人や場所は、いのちを助けるのと同じくらい大切だと思う。祖父母が孫に、土地や財産を残すために生活保護を受けない方もいる話も聞いて、自分もそうだと気づかされた。祖母のために何ができるのか、家族で話し合いたい。(総合文化2)
 - 地域とのつながりを再び強くしていこうと行動していることにすごいと思います。(法1)
 - 「現状の福祉の制度では、1人ではなく、家族がいてはじめて成り立つ制度である」という言葉に衝撃を受けた。確かにそうだなと思い、それと同時に代えていく必要があると思いました。今、個人主義が主流になっていますが、
- 人間は生きるために他人が必要だと思っています。人間の根っこの部分を大切にしていくことが、現状の制度を乗り越えていく上で、キーポイントになると痛感しました。(経済4)
 - 子どもの貧困から、沖縄の貧困、賃金、外交、歴史、風土などについて話が展開した。解決には一筋縄ではいかないし、政府だけでなく身近な地域の協力が必要だと感じました。(経済3)
 - 人脈を多くもつことが大切であることに気付きました。私たち若者は社会への関心が薄いだらうと思います。私たちにできることとして、まずは社会にもっと目を向けること、人脈をもつことだと思いました。人は人と接することで様々なできごとに充実した気持ちを得ることができる生きものだと思います。(総合文化4)
 - グループディスカッションでは、自分だけではなく、大学生の社会問題への関心の薄さが伺えたと思いました。(経済4)
 - 児童センターの話で、たばこや暴言の問題が出たときに、その解決策を子どもたち自身に考えさせる機会が多いなと感じたが、そうした自己決定が社会生活のなかでも重要になるのかなと思いました。また自己決定できる社会・状況とは具体的にどのようなものか考えていきたいです。(産業情報1)

(5) 那覇のワーカーズコープの取組み
(津波古彩乃)



▼ 議論ポイント ▼

- 子どもと関わることで感じること。
- なぜ子どもが地域づくりをする上でのキーパーソンになるのか。

報告

講義開始から子どもとグループを組んでクイズを解いていった。その後、子どもは別部屋に行ったあとに、津波古さんからかなさ、かなさキッズの概要を説明。かなさのルールは1つだけであり「自分がされていやなことは人にしないこと」である。そして障がいの有無にかかわらず、1人の人間として子どもに接することの大切さを報告した。

感想

- 甥や姪も学童に入ることができず家族が困っていたので、こういった活動は

すごいと思ったし、この活動をすることで、子どもがより地域との結びつきが強くなるのではと感じた。(産業情報1)

- とても素直で喜ぶ姿を間近で見ると自分たちまで楽しくなることができ、子どもの才能って素晴らしいと感じ、自分にはないものをたくさんもっていると思いました。(経済4)
- いつも「働く」というイメージが、お金を稼ぐためという意識がありましたが、今日の講義で「働く」ことは、お金を稼ぐことだけではないと思いました。(経済2)
- 子どもたちを見ると、こんなに素直で、こんなに元気なのかと感じました。子どものエネルギーってすごいなと思いました。「子どもが地域と関わる種になる」と聞いて、その通りだなと考えさせられました。(産業情報3)
- 地域問題に学童が絡むのも驚きました。地域住民が協力して行っているのも、活性化の1つとなり、私の地域にはない取り組みだと感じました。私の地域には移住者が多く、自治会、子ども会への参加が少ないのが課題かなと



思いました。(経済3)

- 地域を守ることに育てていくことは、子どもを育てる、守ることに一番つながると思いました。(総合文化4)

(6) 沖縄の文化・財産から、若者が仕事をおこすこと(平良亮太、赤嶺和伸、安里大、渡橋拳斗)

▼議論ポイント▼

- 1: 居場所づくりで大切なこと
- 2: 無関心から関心に向かうときには何が必要か
- 3: 貧困状態から脱出することと貧困状態を生まない社会をどうしたらつくれるのか。

報告

- 平良さんが働くがちゆんは、「がちゆんたくする文化をつくること」(がち = 本気で、ゆんたく = 話し合うこと)を目標にして、国内外、県外の修学旅行生や県内の中高生への沖縄の平和学習やLGBTの学習の場等を開催している。大学生が立ち上げた団体で、今では8名の職員、学生も100人以上が関わっている。インプット中心の学びから、学んだことを発言するアウトプットの取り組みを大切にして、グループワークなどを通して、学生自身が当事者として考える学びの場を展開している。平良さんも現在琉球大学4年生で、自分もLGBTであることを述べ、生きにくい社会を少しでも変えていきたい

との話をした。またアイスブレイク(緊張を解きほぐす)のワークショップでは、初対面で知り合った人との関係づ



くりを具体的にどのように行うのかを講義内で行なった。

- 赤嶺さんは大学近くの宜野湾市において「普天間居場所づくりプロジェクト—居場所『そいそいハウス』」で活動しています。軍事基地から平和、人権の町として発信するとともに、貧困や困っている人に寄り添って共に解決するために団体が生まれた。「居場所事業(子どもの居場所〈子ども食堂、学びサポート、子どもカフェ〉)、大人の居場所(レンタルルーム、普天間居場所カフェ)」、「平和・人権事業(リベラルツーリズム)」を行なっており、誰もが楽しく、意見が言える場を大切にしている。
- 安里さんはワーカーズコープ北部地域福祉事業所ゆらりの里の職員として東村にある子どもの居場所づくり事業「フリースペースあがりキッズ」で働いている。放課後の子どもの居場所として、子どもの学習支援活動を行なっている。元々は生活困窮者、貧困世帯の家庭を対象にしているが、人口が少ない地域でもあり、地域にいるどんな

子どもも受け入れながら、子どもの育ちを応援している。また学生4名と協力しながら事業を行なっているとのことであった。学生の1人である名桜大学2年生の渡橋さんは、子どもが親に見せる顔とあがりキッズで見せる顔とは違うとともに、親の真似を子どもがすることもあり、それぞれの家庭環境を見ること、そしてそれぞれの目線に立って対応することが必要なことを報告した。

感想

- ディスカッションを通じて、苦手だった自分の意見を言うことを克服できたと思いました。(経済2)
- 自分たちのやりたいことを会社にする行動力がすごいと思いました。同じ学年なのに、大学生活でやりたいことを明確にし、取り組み、それを何年も続けていくことの凄さを感じました。(経済4)
- 学校やバイト先では、どこか自分を隠しているところがあるので、自分らしく生きることは大切なことだと改めて



感じた。私も学生のうちに一度は、がちゆんに参加したいと思った。(法3)

- 中学、高校で平和学習を受けているなかでつまらないと感じることが多くありました。体験者の話を聞きましたが、ほとんどの内容を覚えていません。しかし、がちゆんの話聞いて、得た知識を仲間と話しあったり、実際に現場にいき、自分ももし当事者だったらどうするかという問いを与えて自分たちで考える機会があることは、自分とは無関係という考えをなくしてくれると思いました。(法1)
- (がちゆんに関わる人の)半数以上が、大学生だということを知り、同じ大学生なのに、すごいことをしていると圧倒させられました。小・中・高、地元の仲間というの、落ちつくのは、その皆が1人ひとりの生い立ちを知っているからなのだなと思いました。なので、これから会う人たちと、生い立ちから話することは、とても良い案だと思います。(総合文化3)
- 誰もが自分らしく生きられる社会というキーワードは、社会のなかで生きていくなかで、周りの人に流されず、自分らしさを保つことが大切だと思ったし、どんなときでも自分らしさをつくっていくことが大切だと感じました。(法3)
- 人々がつまらないと思うことや、無関心なことをわくわくするものにしようという取り組みに、興味を持ちました。

私たちが普段の生活を送るときには直接関係のない事柄だからという理由で、機会を逃してしまっていることが多くあると思います。(法4)

- 沖縄の問題について多く出てきて、私にとって一番収穫のある講義でした。普天間基地の落下問題は、私が意識していたところだったので、詳しく本当のことを聞けて良かったです。私は普天間高校にいて、日常的に飛行機の音も聞いているので、もう気にしなくなって、当然と化していましたので、今回で「魔法が解けた」という言葉で、自分も自分に関係ないと思ったことを感じました。(経済2)
- ネガティブな問題ほど、隠そうとされている社会を認識し、どうしていくべきかを常に考えたい。(法4)
- 私自身も貧困を身近に感じているので、いつも以上に真剣に考えることができました。無関心の人に関心を持ってもらうことは、難しいけど、やり方や伝えた方次第で、人は関心を持つという話はとても興味深かった。(産業情報1)
- 小、中、高と日中にヘリの音が聞こえてくるのは当たり前だった。そのときそのときで不満には思っても、しばらくしたら、いつものこととして問題になっていなかった。それは当たり前のことではないと反基地運動をしている人の話を平和学習、講義のときに聞かされているが、それは本当の意味で理解している自信がない。自分のなかの

当たり前を変えていくことが、地域の問題に取り組む上で必要なことなのかと思った。(産業情報1)

- 学生なのに運営側にまわる名桜大学の人はすごいと思った。私と同じ2年生だけど、しっかりしていて、私も身近なところから見直してみようと思った。(経済2)
- 無関心から関心をよせるためには、「答え」を提供するのではなく、全部手伝うのではなく、一部を教えたりすることで、少しずつ関心・興味が湧くということではないか。(経済2)
- 実行に移せない人たちは、理想と現実のギャップがわかってしまっていて難しいとあきらめてしまっている部分があると思います。行動できない現実をどう変化させていくか。(総合文化4)
- 規則を変えてしまえば、素直な子はいうことを聞くので扱いは簡単になり、大人からすればそれは楽なことかもしれないけど、子どもの将来を考えれば、それをするのは違うのではないかと思う。(総合文化4)
- 自分にとって基地は生まれたときにはすでにあり、南部地区に住むとヘリや戦闘機をほとんどみないで、見ても遠くの空を小さく飛んでいるものなので無関係だと思っていました。今回、人は自分に害が加わるまで無関係なものになってしまうことがわかったので、もっと地域のことに興味を持とうと思いました。(経済4)

- 沖縄の貧困率は私が思っているよりも多くて、全国の2倍の29.2%だと聞いて驚いた。(法3)
- 平良さんがいうように「サイレントマジョリティ」にならないために、私たち若者が、政治を知り、参加することが大事だと感じました。(産業情報3)
- 講師の方々が、能動的にそれぞれ自分がやりたいことに対して具体的な目標を持っていることに気付くことができました。また子どもや若者に問いかけ、主体的に行動するように導いていることを多く感じました。小さいことから主体的に行動していこうと思いました。(法1)

(7) 名護のワーカーズコープの取組み (仲兼久周子、高山玲子)



▼議論ポイント▼

- 1：今、なぜワーカーズコープで働いているのか。
- 2：生きづらさを抱えているものと共に働く上で、何を大切にしているのか。
- 3：農業を通じて、若者や職場がどのように変化していったのか。
- 4：話し合いをして平行線のときは、具体的にどのように決めて実行するのか。

報告

センター事業団、北部地域福祉事業所の仲兼久所長と農業プロジェクトの高山さんが報告。事業所として、「地域子育て広場びっぴ」(認可外保育園)、「指定就労支援事業所 YU.RA.RI (就労継続支援B型)」、「東村子どもの居場所事業」、「地域若者サポートステーションなご」、「くらしと仕事の応援センターさぼんちゅ(就労準備支援事業受託)」を運営している。そして社会連帯活動である農の取り組みを中心に紹介した。社会連帯活動は「人々の連帯の輪を広げ、協同労働のまわりに地域の再生につながる活動を作り出すことを目的とした活動」であり、「自分を活かす、仲間と活かす、地域社会のため活かす」取り組みである。事業所として、地域の困りごとに関わり、解決しながら、ちゃんぷるーワークス(多くの方々が交わる多様な仕事)を大切にしている。

その後、時間があったので、質疑応答で働く目的や協同労働について2人に聞

いた。仲兼久さんからは「共に働くことが大切で、関わるときに話を聞く、待つこと、少しでも変化があったり、つらいことがあったら共感することを大切にしている。働くことで1人ひとりの自尊心、肯定観につながるなかで、私は誰もが働ける完全就労社会をつくりたい」と話す。高山さんからは「ワーカーズコープで働いていて、自分でやりたい仕事を探索して、取り組めることが楽しくて、生きるのが楽しい」と報告した。

感想

- 最初は自分1人でもその見つけた仕事をして、仲間ができ、ついてきてくれればいいという考え方は受身な働き方ではいけないという考えが伝わってきました。(産業情報1)
- 協同労働の働き方でも、人と人がぶつかったり、辞めていく人がいたり、様々な困難があることを今回の講義で深く学びました。ただ困難があるなかでも、それと向き合って、話し合いをしたい、とりあえずやってみないとわからないと行動をしていく姿勢に、仲兼久さんたちの強さを感じて凄いなと思いました。(産業情報1)
- 農業を始めるまでに、多くの苦労があったことはわかりましたが、実現できたことは、同じ志の仲間全員で1つのことを成し遂げようとみんなで努力してきたからなのだろうと思いました。人のつながりを大切にするからこ

そ、講話のなかで出てきた社会連帯につながっていると思いました。人を大切にすると団体が育ち、その団体が同じような団体とつながっていくことで、少しずつ社会を変えていくことができるのだろうと感じました。やはり人は人でしか助けあったり、思いやりといった気持ちをもつことができないと思いました。(総合文化4)

- 私は仕事の内容や給料で仕事を決めようと思っていたけど、自分がやりたいことをやっぱりやった方がいいのかなと思った。とりあえず前向きに考えていろいろ挑戦していこうという気持ちになった。(法3)
- 1から自分たちの手で、仕事をつくり、労働していることがわかり感銘を受けました。私の弟も障がい児ではありませんが、いわゆるグレーゾーンにあたるところにいます。特別支援学校に通っていますが、将来、私みたいに就活して普通に働けるかと不安になっていました。しかしそういう人たちを支援するワーカーズがあると聞いて、知識を深めたいと思いました。(産業情報3)
- 労働=お金、福利厚生等といったイメージでしたが、今日のお話を聞いて、社会貢献が中心にあるとやりがいや楽しさが全面にあるのかなと感じました。そしてワーカーズコープという組織のあり方が、話し合いをしてみんなで決定するという点で常によりよい状

態を求めて変化を続けていくようで、ここが企業とは違い良いなと思いました。(経済3)

(8) 社会連帯でつなぐ未来の沖縄づくりのための地域づくり (城間愛子、高橋弘幸)



▼議論ポイント▼

- 人と人がつながるために必要なこと
- 地域課題の見つけ方とその解決方法

報告

城間さんは「沖縄医療生協における地域活動の現状と課題」をテーマに報告。沖縄医療生協は、劣悪な医療環境のなかで、「安心してかかれる診療所」の医療

要求について、1970年に民主診療所を開設し「友の会」として発足し、1口：2ドル（現在でいくと1,000円）を出資金として出しました。その後1972年沖縄医療生協を設立しました。設立目的は「無差別平等の医療を実現」「組合員が日常のなかで自らの健康づくりをすすめる」「組合員、県民誰もが必要なとき、いつでも安心して利用できる自分たちの医療機関を持つ」である。

沖縄医療生協の理念は、「健康をつくる」「平和をつくる」「いのち輝く社会をつくる」であり、学習会や班会を通じて、多くの取り組みを行なっている。医療・介護・暮らしに関するアンケート(13,898人)では、病気や介護への不安が多く、困りごとには地域差があり、公的保険ではカバーできない困りごとの相談窓口の必要性が出てきた。そこで、安心して暮らし続けるまちづくりとして、「生活圏域を意識した支部づくり」「居場所づくり」「つながりマップづくり」の「3つのつくろうチャレンジ」の推進とともに、組合員と地域住民が求める医療・介護サービスの提供と暮らし助け合いで医療生協の地域包括ケアを実現することが報告された。

高橋さんは「九州沖縄事業本部の実践と久留米大学『協同組合概論』、そしてよりよい社会を目指して」をテーマに報告。おさらいとして、ワーカーズコープの社会的な位置や役割を確認した上で、「地域の必要を仕事に、仕事ができるこ

どもたち（鹿児島県霧島市の国分ほのほの）」「生活困窮問題から農福連携で働く場を（大分県臼杵市）」「子どもの居場所づくりから地域の拠点へ（福岡県大野城市）」の取り組みを紹介。その後、ワーカーズコープ寄附講座が開催された久留米大学（伊佐淳先生）の講座を紹介。SDGs（持続可能な開発目標）にも絡ませて学生の学びを報告した。学びの1つに「協同労働について感じることは」との問いに、「仕事の起承転結を深く体感できる」ことを挙げていた。

感想

- 地域特性を生かした仕事をすることや、誰もが働ける仕事を持続可能なものにするために、主体的に動くことや議論を交わすことは重要だと思った。（法4）
- 浅くても幅広い知識や情報を持ってないといけないと思いました。「事業がなければつくればいい」って大胆な考えだけど、需要に沿っている上で、地域の資源を活かしながら動かすことを考えるって大事なことだと思いました。（総合文化4）
- （沖縄医療生協は）なくてはならない存在だと感じました。私の知らない、気づいていないところでも、何かしら助けられているような気がしました。ワーカーズコープは今日、そこまで大きく取り上げられていないことや、一般化されていないことを不思議に感じ

るくらい魅了されました。もっと学生に知れ渡り、共感する人の輪を広げていくべきだと思いました。(経済3)

- 母が医療生協の病院に勤めているので、名前を聞いたことはあったが、何をしているのかわからなかった。就職先として協同組合を入れようと思った。(産業情報2)
- 私は地域の人びとと関わることが好きなので、普通の会社に入社よりも、ワーカーズコープに興味があるので、新卒でワーカーズコープに入職した高橋さんの講義を聞いて良かったです。(総合文化3)
- 自分たちですることも大切だが、他の人と協同することも大切だと学んだ。(産業情報1)
- 2本の報告と質疑を聞いて、人と人とのつながりの上で大切なものとして、相手を思いやる気持ちを持つことや理念を持つことであるとわかりました。(法3)
- グループワークを通じて、他者の意見や考え方を知れて勉強になりました。共通していたのは、地域問題に対して、関心を持つこと、当事者意識をもつことが挙げられていて、誰か任せではなく、自分から動くことが大切だと感じました。(経済3)
- 広報についてもう少し力を入れるべきと思った。医療生協を必要とする人がもっと明るみに出てくると思うし、地域の課題解決にもつながっていくと思

いました。(経済3)

- 実際に困っている当事者とふれあうことの大切さを知りました。これまで、自分とは関係ない、自分とは別の世界の話だと感じていました。(法1)

(9) 「住んでいる地域の魅力・課題、課題解決のためにできること」準備・発表(相良孝雄)

報告

学生が住んでいる地域ごとに分け、2人～5人までのグループを作った。そこで同じ地域で住んでいる地域の魅力と課題、そしてその課題を解決するためにすることを、今までの講義で学んだことを活かして、グループで討議し準備をした(2時間)。その後、話し合った内容を黒板に書き、11グループそれぞれが5分で報告、5分質疑で進めていった。

感想

- 最初は自分たちだけで取り組むことより、他の人たちが「こうしたほうがいい」みたいな他力本願なアイデアしか浮かばず話が脱線した。相良さんに相談した結果、自分たちができそうなことを思いつくことができた。自分たちだけで行き詰るより、人に相談することで、新しい発想を得ることができたことを知った。(産業情報1)
- 自分が思っている以上に、地元がいろいろな施策を行っており、住みやす

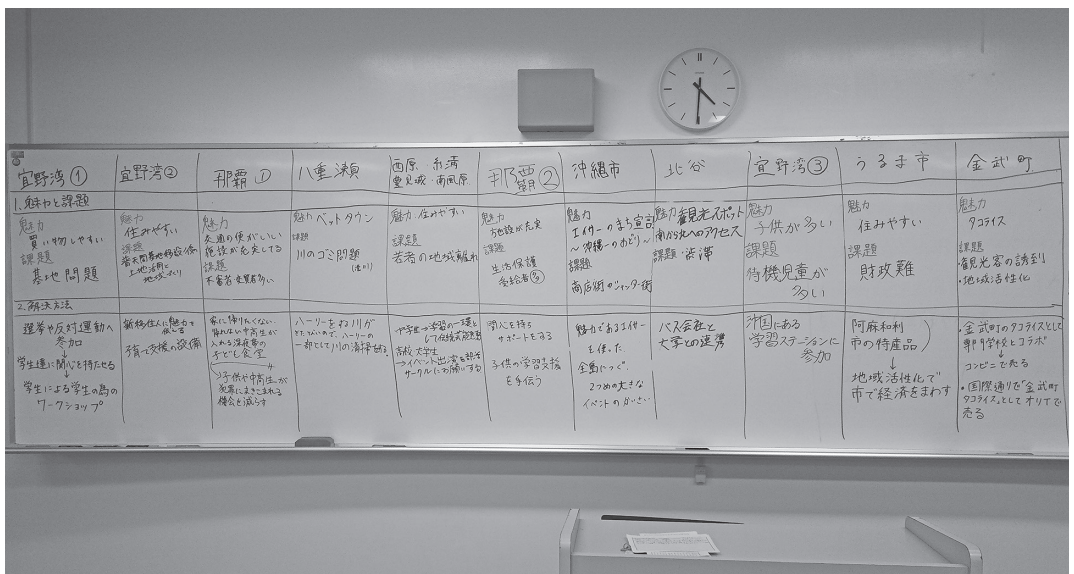
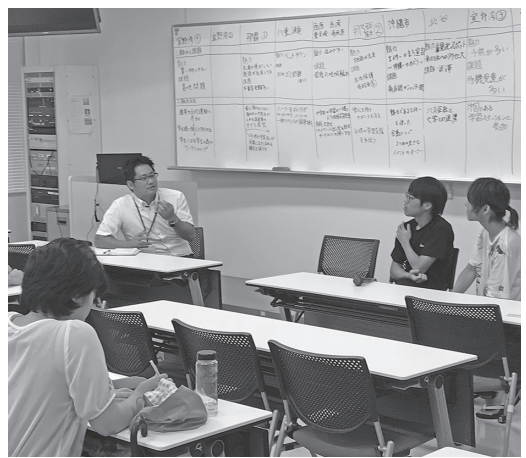


那覇②	沖縄市	北谷	宜野湾③	うるす市
魅力 地産地消 課題 生活保護 全経書⑤	魅力 工場の立ち立 ～環境～の 課題 商店街のシャ ワ街	魅力 観光光景 ～北の町～ 課題 清潔	魅力 子供が多い 課題 特産見直 が多い	魅力 住みやすい 課題 財政難
引人を呼 ぶポイント 子供が習字 を習う （手紙）	魅力がある件 を保つ 金島ハット 2つの大きな イベントがある	バス会社 と大学の 連携	外国にある 学習ステ ーションに 参加 地域活性化で 市で経済をまわす	阿麻和利 市の特産品 ↓ 地域活性化で 市で経済をまわす

宜野湾①	宜野湾②	那覇①	八重津	面原・糸 豊見城・南風原
魅力 住みやす 課題 基礎問題	魅力 住みやす 課題 基礎問題	魅力 住みやす 課題 基礎問題	魅力 住みやす 課題 基礎問題	魅力 住みやす 課題 基礎問題
選挙の反対運動 参加 学生達 学生達	選挙の反対運動 参加 学生達 学生達	選挙の反対運動 参加 学生達 学生達	選挙の反対運動 参加 学生達 学生達	選挙の反対運動 参加 学生達 学生達



■ 特集 「ワーカーズコープ論」 寄附講座運動② — 学生と社会をつなぐ戦略を焦点に —



い地域にできるように努力していることがわかりました。(法1)

- 誰かがではなく、自分だったら何があったら参加したいのかという当事者意識を持って、他者の意見を聞きながら発想を展開できて楽しかったです。(経済3)
- 問題が大きい分、解決策も大きくなりがちで、ワーカーズコープの方々のように、問題に対して少しずつ確実に解決することが、どれほど難しいことなのかを感じた。魅力を調べたときに自分にとって当たり前でも他の市町村や県外の人からしたら、それが魅力や特徴であることが分かって、よい経験ができた。(総合文化2)
- 個人で地域の課題って変化するのかなと感じた。例えば、子どもを授かっている人にとっては保育所の問題があり、自営業の方からすると、過疎化や観光客の現象が大きな問題となる。このことか解決すべき問題の優先順位をしっかりと決めることが大事だと感じた。(総合文化2)
- 発表を聞いて、皆さんは地元が好きなんだということが伝わりました。(産業情報2)
- バス会社と学校の連携の発想は面白いと思いました。実際、バイト代の半分はガソリン代で消えていくのであると便利だと感じました。一方で、バスが満員で乗れないという可能性もあって怖いと思いました。問題に対してこう

すれば解決すると仮説を立てて、行動するのも大切ですが、実際に困っている人の声を聞いてよいところを残す工夫も大切だと知りました。貧困の原因である若年出産のリスクを学生に伝える方法もあるのかと発見もありました。(経済3)

- 発表に対して質問がとても多く、学ぶことができました。(法3)
- 魅力を知る上で、市の歴史も関わりがあることもあることを知った。(産業情報3)
- 各自治体の問題が全く重ならなかったことに驚きました。(法1)

(10) 本講義のまとめ(相良孝雄)

▼議論ポイント▼

- 1：今までの人生を漢字1文字で表わす何か。
- 2：再度、働くことの目的・意味とはなにか。(自分史・マズローの欲求階層説から)
- 3：講義の満足度と学べた実感はあったか。(マトリックスワークショップ)



と感想交流)

報告

発表の内容から見えてくることを振り返り、地域をつくる主体形成のあり方やワーカーズコープにおける仕事おこしの流れ(主体形成・地域戦略→事業計画→事業準備→事業開始→事業継続)について説明する。その後、働く目的・意味について、ライフヒストリーから考えること等を話した上で、「今までの人生を漢字一文字で表すと」について学生と議論。学生から「好」「生」「乱」という言葉が出る。最後に、勉強(強いて勉める)以上に学問(問いを学ぶ)ことの必要性和学生でワーカーズコープをつくることを提起し、講義全体の感想について教室をマトリックス上に見立てて(「満足/不満足の軸、学べた/学べなかった軸)学生が評価し、全講義が終了した。

感想

- 地元の魅力・問題を真剣に考える機会が今回初めてだった。魅力を知ってさらに好きになれたり、問題を少しでも解決したい、自分でも動きたいという気持ちが湧いた。発表した後のコメントや質問は、さらに考えさせられる内容ばかりでした。(総合文化2)
- 市町村の課題と聞くと難しい話が多いのかと思っていただけ、同年代の人の目線で感じたことを聞けたり、難しい言葉は少なく、すんなり聞けて、とても理解しやすかった。(総合文化4)
- 今まで、大きな会社の下で雇われて働くものという固定観念があることに気づきました。問いを立てることの大切さを学びました。(総合文化2)
- 「当事者意識」の大切さを体感しました。みんなが見てみぬふり、誰かがやってくれると人任せにしていると社会は変わらないと思いました。(経済3)
- 第1回から第15回の講義を通して、働く意味の考え方が変わった。前までは、お金のため、生計のために働くと考えていた。しかしそれだけではなく、自分のため、成長のために働くという考えが出た。地域についてももっと関心を持とうと思った。先生が最後にいっていた、学問=問いを学ぶ、社会を考えるもすごくいいと思った。今回、ワーカーズコープ論をとって、こんなに学び考えるとは思わなかった。後期から就職活動が始まるので、学んだことを活かしたい。(法3)
- 仕事について深く考えることができませんでした。お金や暮らしだけではなく、私自身が社会に何を求め、どういった風に役立つことができるのか、それが仕事なのかと考えました。(総合文化2)
- 初めて「働くこと」に焦点を当てて考える機会となりました。働き方が、みんな同じであるわけではないことや自分が主体となり活動していくことができるとわかりました。(産業情報3)
- 沖縄県のさまざまな課題、高齢者、若

- 者、子どもたちのために、経済目的とは違った理由で働く人々を見て、自分ももっと早くワーカーズコープについて学べば就職活動も変わっていたと思いました。自分の軸を持ち、将来何がしたいのか、どのような人間になりたいのかを考え、利益だけではなく、他の人を笑顔にさせる大人に今後、成長したいです。(経済4)
- 受ける前と受けた後での自分にとっての働き方に対する考えが変わってきたのかなと思いました。多くの分野で活動する人との出会いや、その人たちと一緒に行動を起こしていくことの重要性やその団体が持っている理念を知ることが働くときに大切になってくることをわかり良かったです。(法3)
 - ワーカーズコープにかなり懂れています。(産業情報2)
 - グループで多くの意見を聞き、自分の意識の低さを感じました。(経済4)
 - インプットの部分でも学ぶこと、知らなかったことが多くあり、とても学ぶことができました。またアウトプットをみんなですることによって、新たな考え方や自分でも思ってもみなかった考えなどが生まれ、講義前と講義後で成長できたと思いました。(経済4)
 - 自分が住んでいる沖縄に、もっと今まで以上に目を向けたいと思いました。色々考えさせられることが多く、ワーカーズコープ論、受講して良かったと思います。(総合文化3)

- 実際に働く人の話は説得力があり、心に刺さるものがたくさんありました。(産業情報4)
- 私でも地域の課題に解決する力を少しでも持っていることに気づけたことが一番の成果であった。(産業情報1)

5 最終レポートから見る学生の学び

1、受講前と後での本講義の一番の気づき、学びとは

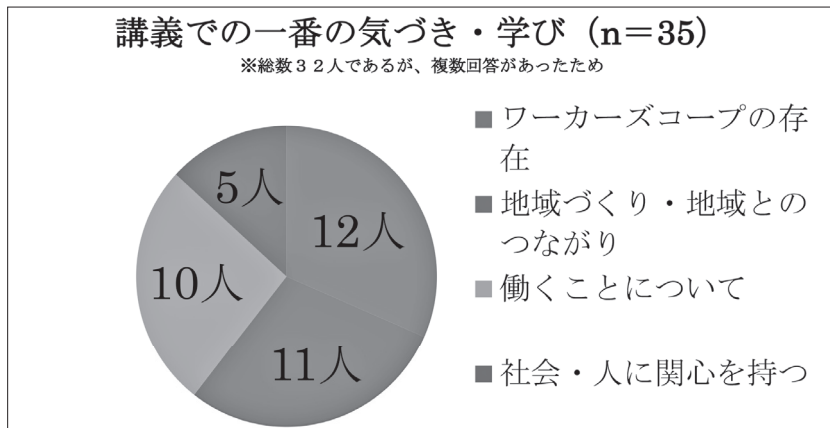
最終レポートは32人が提出した。

そのうち学生の一番の気づき・学びを分類すると「ワーカーズコープの存在(12人)」、「地域づくり・地域とのつながり(11人)」、「働くことについて(10人)」、「社会・人に関心を持つ(5人)」となった。記述式であり、項目を併記して書いていたものもあったので、そのレポートは複数項目でカウントしている。最終レポートの他の設問で「働くことの目的」「地域づくり」を問うているので、ワーカーズコープそのものの存在にフォーカスを当てて書いた人が多かったのではないかと考えている。

▲学生レポートから▲

■ワーカーズコープの存在(協同労働について)

- 一番はワーカーズコープのすごさです。言葉では耳にしたことがありましたが、どういうものなのかがわからなかった。



それぞれが対等な立場で業務を行うことはとても素敵だと思いました。

- 協同労働という働き方があることで、労働者が経営をすることが最大の魅力であり、今の雇用社会の労働環境の劣化、グローバル化による地方衰退の両方を解決し、かつ就職難に見舞われた人々までも救う画期的な働き方だと学びました。
- こんなに素晴らしい働き方を、就職活動間近に知り、友達にも教えたいという思いとともに、なぜあまり知られていないのかがとても気になり、知ってもらいたいという思いが強くなりました。
- ワーカーズコープは「協同」の力で助け合い、支え合って共に働くことで、人間の本来の働く意味が感じられ、社会のために気持ちよく頑張れることの大切さを学びました。
- 就職活動を経験して、私は自分が何をしたいのか明確化していないなかで、会社の雰囲気や働きやすさ、福利厚生を重視して会社選びを行っていたの

で、単純に協同労働という働き方に衝撃がありました。目的を持って働くことができる働き方があることが一番の学びでした。

- 協同労働の働き方と今後の可能性を知ることができた点です。大学卒業後は、雇用されて働くことを想定し、そのなかでより自分の理想的な条件の会社で働くにはどうすべきなのかと考えてきました。しかし就職活動の際に、会社が求めている人材と自分自身に差を感じ、働くことに不安を抱えていました。その時に、本講義に参加し、働くことに対する視野が広がりました。また多様性を尊重し、誰一人取り残されない社会をつくっていくためにも、協同労働は大きな役割を担っていくと考えています。

■ 働くことについて

- 働くことのイメージがあまり良くなかった。「ブラック企業」「過労死」「長時間労働」など社会問題として取り上

げていて働くことが大変だと思ったからです。しかし講義で登壇した方は、すごく楽しく働いていることが伝わってきたし、やりたいことをでき、それを仕事にしているのはすごいなと感じました。

- 就職先を決める上で、給料と自分が好きなことが関われるかどうかだった。ただ今回の講義で、自分が住んでいる沖縄や地域の問題も何時間も真剣に向き合えたことで、ただやりたいことや好きなことだけがやりがいを感じるのではなく、誰かのために一生懸命考え、改善してやりがいを感じる仕事も選択できるのだと気づかされました。

■ 地域づくり、地域との関わり

- 地域の問題は自分自身の問題であり、それをできる範囲でどう解決すべきかを毎度考えていました。また子どもの貧困の問題は基地問題とリンクすると「そいそいハウス」の赤嶺さんがおっしゃっていたのは印象に残っています。私は基地問題にもともと関心があったため、今後「子どもの貧困」について考えていきたい。
- 生まれ育った地域に恩返しをしたいと思うようになった。
- 本講義を受講して、私は周りの問題、地域が抱えている問題にこれから向き合って私にできること、力になれることを探して、社会・地域の問題解決に取り組んでいこうと思った。

■ 社会や人に関心を持つ

- 今まで自分とは無関係だと感じていたことが、自分の生活や人生とどこかで関わっており、無関係とは言えないことを実感しました。このため、色々なことに関心を持ち、自分だったらどのように解決策をとるのか、他ではどのように対策してきたのかなどを考えるようになった。
- いかに関心は周囲のことに無関心で過ごしていたかを感じました。自分の可能性を狭め、知らないことで損をすることにつながると気づきました。

2、働くことの目的・意味とは

第4講義のときに、「お金があっても働くか、お金があつたら働かないか」と学生に聞いたところ、26人中10人は働く(38%)、16人は働かない(62%)という結論であった。全講義終了後、レポート上では32人中26人(81%)がお金以外も含めて働くことに価値を見出し、5人(15%)はお金のみを価値とする働き方、1名が不明であった。(内容に応じて成績に左右することはないとの話もつけ加えた)

全講義を通じて、学生の労働観は揺れ続けることになった。それは今までの講義の流れの感想文からもわかるが、特に第8講義の若者当事者のがちゆんの平良さんの話や第10講義の仲兼久さん、高山さんの報告では、多くの困難がありながらも、自らの生き方を報告したところ

で大きな揺れをつくる要因になったと考えている。また学生同士のディスカッションを通じて、他の学生と比較したときに「自らはどうなのか」と考えるなど、グループダイナミクスも作用して、大きく変化したことを肌感覚として感じている。

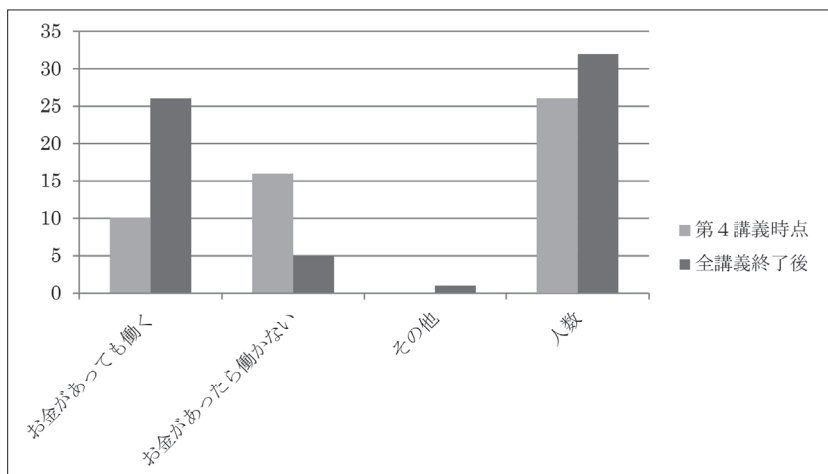
▲学生レポートから▲

■ お金以外も含めて働くことの価値として

- 受ける前は、賃金や休日の有無、自分の能力に合うのかのみを仕事選びで重要視していました。講義を聞いているうちに、仕事に対しての生きがいや地域に密着して問題を解決するなど、地域の役に立つことの素晴らしさを感じ取ることができました。そしてあらゆる面から仕事を考えることができるようになりました。
- 一人では無力であることを学ぶこと。働くことで、自分がどれだけ人に支え

られ、恩返しとして何か行動し、絆を深めることが、人生ですごく大切だと思う。

- 「生計を立てるため」は外せませんが、これを意味にしたくないなと講義を通じて再認識しました。これから何十年も働くことを考えると「働き方=生き方」とも捉えられるからこそ、社会貢献や地域とのつながりが働く意味になる仕事がしたいと思った。
- お金を稼ぐことに重きを置かず、自分が本当にやりたいことをするのが一番だと考えていました。しかし周囲の友達は、安定性や労働条件などで仕事を選んでいる人が多かったので、他人の仕事の選び方に不満や不思議に思うことがありました。この講義後、やりたい仕事をしつつある程度の利益を出す、なおかつ地域の為にもなるワーカーズコープの仕組みを知り、これが本来の働くことかと思いました。
- 「自分のやりがい+利益」と考えてい



たが、ワーカーズコープの存在を聞いて、他の人のために働く方がモチベーションになると思いました。自分が考えていた企業選択の軸をもう一度考え直していきたいと思いました。

- 自分の生きがいだと思います。最初、仕事についてのイメージは、「ただ言われたことをこなし、お金をもらうだけ」と思っていました。しかし講義を受け「仕事は暮らしのなかの一部」という言葉を聞き、そのような考え方を知り、話をされている講師の方々を見て、各々が目的を持って仕事をしていることを感じました。それで仕事とは「社会の役に立ち、それが生き甲斐に変わっていくのではないか」と考えました。
- 働く意味はお金だと考えていたが、講義全体を通じて、お金だけでなく、社会とのつながりとしての仕事も働く理由になるのでないかと考えるようになった。
- 自分自身の周囲の人、社会に幸せを与えるためだと思います。

■ お金のみのために働く価値観として

- まず自分自身。そして家族など大切な人を支えるための資金をもらう。それが結果的に社会の役に立ったりするとよいと感じる。もしそれが社会的に見て、あまりよくない仕事だとしても、恥かしいと思うべきではないと思う。
- 「働くこと」はお金を稼ぐことでそれ

以上でもそれ以下でもないです。しかしこの講義では多くの人の話を聞くことができ、それぞれの働く価値観を知って、学んだことはとても大きかったです。

- 生計を立てることが最低限で一番の目的。人の役に立ちたいなどの働く動機の達成は自身の生活を成り立たせているうえで、働いていればかなうのではないか。
- お金を稼ぐことです。私は祖母の家に一緒に住んでいて、生活に使うお金にも余裕があるなど貧乏とはおもいませんが、私は父子家庭で育ち、二人で暮らしていたら大学にも行けなかったかもしれません。そういう環境で育つこともあり、お金を重要視しています。
- 私生活を楽しく過ごすためです。働いで稼いだお金を趣味に使っています。

3、あなたが一番関心をよせる社会問題・地域問題とは、そしてあなたがその問題を当事者としてどのように解決しますか。

複数回答は、「基地問題」5人、「貧困(子どもの貧困)」4人、「地域行事の若者離れ」3人、「交通渋滞」2人、「性教育の低さ」2人、「生活保護受給率の高さ」2人、「住民同士がお互い知らないこと」2人。1人の回答でいうと、「ブラック企業」「障がい者の就労問題」「高齢化」「介護」「墓實問題」「核家族化」「8020運動」「泡瀬干潟の埋め立て問題」「中高生の深夜

徘徊」「待機児童問題」「シングルマザー」「自治体の財政状況」があった。(総数32)なぜこれらの社会問題・地域問題を発想したかについては、大きく2つの視点から考えられる。第1は講義内で話した内容からである。「貧困・生活保護受給者・住民同士が知らないこと」などは、中村さん、大城さん、城間さん、安里さん等の報告を聞いて、テーマとして出したものが多かったのではないかと推測する。また第13、14講義でグループ発表した地域課題の内容と重なっている(「地域行事の若者離れ」等)。第2は日常的な関心からである。「性教育の低さ」「泡瀬干潟の埋め立て問題」などは、書いた学生と直接話す中で、日常的に考えていることであることを聞いたからである。

一番回答数が多かった「基地問題」は赤嶺さんが報告の一部で紹介していたが、宜野湾市に住んでいる人を中心に関心事としてあげていた。

解決方法を大きく分けると、「場をつくること(企画をつくること)」「知らせること」「学ぶこと」であった。そして本講義で学んだことをフルに活用して書かれているレポートが多かった。

▲学生レポートから(なぜこの課題に関心をもつのかと解決方法)▲

■「基地問題」

- 普天間基地の近くに住んでいて、ヘリの騒音を身近な問題として捉えているからです。

→同じ日本なのに、沖縄の基地関係の事件や事故の取り扱われ方が県内、県外でこんなにも違うことが許せない気持ちになります。まるで蚊帳の外の話のような扱いに思えてしょうがないです。もちろんマイナスな面だけを発信するのではなく、交流を深めたりしている事実や軍の方々の地域での活躍等も発信していくことが重要だと思います。ありのままの実状を伝える努力が必要だと思います。

■「貧困(子どもの貧困)」・「生保受給者の高さ」

- 今まで貧困って他人事だと思っていましたが、授業で話したことを両親に話すとうちも貧困だよと言われて私は驚きました。相対的貧困の部類に入るらしくて、普通に奨学金に頼っている私も貧困世帯だと知り、とてもショックを受けました。
 - 沖縄の子どもの貧困率は29.9%で全国の2.2倍であることに驚いた。
- 生活保護受給者がどのような生活を送っているのか、どのように思っているのかを知ることが必要だと思います。できることとして、インターネットやSNSでの職場探しを共にしたり、飲食店からのフードバンク、農家に余った食材をいただく、学習支援などがあると思います。

■「地域行事の若者離れ」

- 住む地域にカフェのようなみんなが集まってのんびりできる場所をつくる。地域の魅力を考えたところ、バスなどの移動手段が充実しているが、同時に住む地域を出なければ何もない、つまり人が集まる場所がないと思いました。
- だから情報を共有できる場所、誰でも自由に気軽に出入りできる場所をつくり、イベントなどで地域の情報も宣伝して、学生の交流の場をつくりたい。
- お祭りや餅つき大会など定期的に地域の人が交流できるイベントを企画する。
- 中学生は学習の一環で伝統芸能を習い、体育祭や地域行事で発表する。高校生や大学生はサークルにイベント出演を要請する。

■「性教育の低さ」

沖縄には若年出産やHIV感染者が多いことは、その人の生涯を変えてしまう恐れがあるため

- 貧困の原因には、若年出産があるのではないか。それは性教育の乏しさが引き起こしていると思う。そこで性教育について学ぶ場を増やしたい。

■「シングルマザー」

私の母もシングルマザーとして頑張ってきました。小学生のときには、電気代も払えず、月明かりを頼りに宿題をした

記憶があります。シングルマザーであることを公にしたい人が多かったと母から聞いたこともあります。

- シングルマザーへの援助や様々な活動があるが、関心を持っている人にしか見られない。CMや広告で日常的に目にする、情報が自然に入るなどが必要だと思っています。そうすることで、周りからのサポートが強くなり、暮らしやすい環境に変えることができるのではないかと考えます。

4、その他

講師への評価や講義全体への感想が書いている。学生は本講義をポジティブに評価していた。特に「授業内外における講義者と学生とのコミュニケーションの多さ」「異学年を交えた学生同士の話し合いの促進」「講義者への想いとなりたい自分」「社会・地域を知ること、考えること」「能動的に行動すること」「働くこと」については多くの意見であった。

▲学生レポートより▲

■「学生同士・講義者と学生のコミュニケーションの多さ」

- 学年も学部も違う人と意見を言い合う授業は、大学生になってから受けたことがなかったので、今回たくさんの人の意見を聞きすぐく勉強になった。
- 発表や意見を言いやすいような講師の方々の雰囲気づくりに力を入れていると感じました。自分の考えを出す講義

内容は自分にとってはとても良く、その話題の提供の仕方が上手だと感心しました。

- 1人ひとりが真剣に授業に取り組み、みんなで参加している印象がとても強いです。グループディスカッションではみんなで意見を言い合ったりしたのが楽しかったです。とても話しやすく、わからないことをすぐ聞ける環境だったのがとても良かったです。
- 刺激されたのはグループワークでした。同じ年代だからこそ、共感できる部分や私の至らない発想や知識の量に圧倒されました。正解がないなかでより良い選択はなんなのか、考える大切さを身を持って知りました。
- 双方向の講義が良かったと思う。毎回退屈しない講義だった。
- 多くのゲストが来てくださり、とても良い刺激になりました、また学生間での意見交換も多く、自分とは違った考えも多く取り入れることができたので良かったです。
- 授業以外でも、朝教室に入ると先生が挨拶してくれるのがうれしかった。大学生になってから先生との挨拶が減ったことに改めて気づかされた。
- 相良さんの講義は、声が聞こえやすく、説明も難しいと感じることがなく、グループワークを中心にやっていたので、とてもよかったです。このような講義が多くあれば一番に思いました。
- 相良さんが、休み時間に皆に話回る印

象が強かったです。先生の方から話しかけられると私たち、生徒も自然と会話ができていたので、それが一番良かったと思いました。

■ 「講義者への想いとなりたい自分」

- 仕事の目的をお金を稼ぐ手段として考えていませんでした。しかし先生の話聞いて、一人ひとりの信念を聞きました。私が仕事についたときには、自分の仕事について堂々と話せるようになりたいと思いました。
- 平良さんのように、若者の間での問題を解決に取り組める職業を調べてみたいと思った。
- 「そうなんだ」「すごい」と心の中で何度も出てきて、楽しい講義でした。前から興味を持っていたがちゆんさんのお話を聞いて、私も直接沖縄のことを県内外の人に伝えられるような人になりたいと思いました。
- 講師の方からは自主的に働くことで感じられる充実感や地域に貢献できることなどの魅力を知りつつ、地域住民からの協力が得られなかったり事業そのものが難しかったり苦勞も聞いたことも良かった。
- 一番気になったのは、がちゆんの平良さんでした。アイスブレイクをすると話しやすい雰囲気になることがわかりました。来年から社会人になりますが、がちゆんたくすするためにどのようなことを心掛けているのかも一度お聴

きしたいと思いました。

■ 働くことについて

- 仕事への憧れを抱きました。自分が満足できる仕事に就きたい気持ちが強くなりました。
- すでに就職した友だちや就活中の友だちにも受けてほしい講義でした。働き方の考えが変わるといふか、単純に知らない働き方だったので、知っていて損はないと思います。自分的には、やりたいことが決まっているので、より背中を押してもらった感じです。
- 地域が今、抱えている問題、これから出てくる問題を解決するために私(大学生)ができることなどを深く具体的に考えることができた。これから私が働く上でベースとなる考え方を気付くことができた講義だった。
- 働き方が1つではないことを知ることができたので、今後の就活に対しての考え方を見直せる機会になりました。
- 講座を開講してくださったことで、新たな労働観を得ることができたため、このような機会が様々な大学で増えたらよいと考える。

■ 「社会・地域を知ること、考えること」

- 講義のおかげで今の自分に焦りが生まれ、世の中のこともっと知りたいと思うことができました。
- 講師を招いて行うオムニバス形式の講義は、普段なら絶対に聞く機会のない

話を多く聞けるのでとてもいいと思います。集中講義なので、一度くらいは外部で直接話を伺う方法もとれたのではないかと思います。

- 自分が生まれ育ってきた沖縄を、今まで以上にもっと関心を持ち、目を向けたいと思います。
- 学生の目線で見た地域の問題や特徴を聞いたことで、その地域のイメージが広がり、各地域への興味が広がった。
- 地域で起きている問題や自分の価値観を改めて見つめるととてもいい機会になりました。他人事と思っていたことが、実は身近な問題と知れてとても胸を打たれました。
- 地域や社会について、無知でもっと考える必要があることを学ぶことができた。

■ 「能動的に行動すること」

- 仕事をするとき自分から動いて行動することが重要になってくることが分かりました。待っているだけでは意味がないことを感じさせられた気がします。
- 自分自身の具体的な目標を持ち、能動的に行動していることを知りました。また一人ひとりが中心人物となり働いており、自分の存在価値をダイレクトに感じ取れる場所にいるようにも感じられました。どのような理念を持っている団体なのかを考えることの大切さを学びました。

5、スペシャル問題 あなたはどのようなワーカーズコープをつくりたいですか

この設問を設定したのは「学生ワーカーズ」を組織化するとき、学生がどのテーマに興味を持っているのかを知るためである。講義で話された内容とともに学生が日常的に関わっていることや興味から書かれている。今後の「学生ワーカーズ」づくりに活かしたい。

▲学生レポートから▲ (WC=ワーカーズコープ)

スポーツクラブWC / 若者の問題を解決するWC / ワーカーズコープの特徴を一般企業に取り入れる / ライブハウスWC / 沖縄の芸能WC / 性教育とよい結婚ライフを過ごすためのWC / 大学生活の向上のためのWC / フードバンクのWC / 泡盛に関係するWC (泡盛は年々飲酒量が減っているので) / 学習支援のWC

6 終わりに

本報告は、沖縄国際大学「ワーカーズコープ論」寄附講座受講生の学生が「働くこと」観がどのように変容したのかを中心にまとめて。そこには、学生自身が「主体的に参加できる場」と「問いを持つこと」、つまり学生の「学びの主

人公」性を担保する環境を設定することが必要だと感じている。

貴大学での寄附講座が3年終了し、一定の成果があったと考えている。それは学生の学びを中心焦点として、寄附講座の運営の勘所を掴みながら寄附講座のカリキュラムのモデルづくりができているところである。また先生とのつながりを通じて、100人弱の学生が協同労働の協同組合の考え方に触れている点である。

今後の展開として、「学生ワーカーズコープ」を展開するために、講座終了後の学生の居場所と日常的に関われる関係づくりが必須である。がちゆんのように学生サークルから株式会社として起業をした例は学生の心に響く。その例から考えると、まずは大学の近くならびに校内で、地域課題を学生が考え解決する「学生コミュニティワーカーズ」のサークルをつくることを、各地域、事業所単位で行なっていくことを推進していきたい。座学では限界があるなかで、インターシップ、ゼミでのフィールドワーク、現場見学したい雰囲気づくりなど、正課・正課外問わず、学生との接点を日常的につくる仕掛けや仕組みが必要であると考えている。

旧盆にも関わらず、場をつくった学生のみなさん、そして講演いただいた方々、そして村上先生には感謝を申し上げる。



なりたいものになる。やりたい仕事に就く。

一本学学生が福井県内第1号の訪問看護師になった事例から

北出 順子(福井大学医学部講師/会員)



「先生、オレ病院では働きたくないです。」

いきなり何を言い出すんだ…就職したくないってことなのかな。

「病院の中って、患者さんに自由がないし…治療のためだからわかってはいるんですが、面白さを感じないんです。」

「ふーん。県外とか考えてるの？」

「自宅から通いたいです！」

「行政保健師は？」

「関心ないです！」

なんとまあ、難しい条件だろう。病院では働きたくない。しかも自宅から通える範囲。

そして保健師ではなく、看護師。

筆者は国立大学で看護師・保健師の養成に携わっている。在宅看護と保健師課程を担当しているため、病院以外で働くことを希望する学生は何かしらの用事を作ってやってくる。

行政保健師は新卒者が就職する場合も多いが、「在宅ケアを担う訪問看護師は医療機関での看護を経験して…」という

考えがまだまだ根深い。特に福井県のような地方都市では、大学病院や総合病院を希望する学生が多く、将来は在宅ケア分野で働きたいけれど、とりあえずは大きな病院に就職してから考えましょう。が一般的である。そんな中、の出来事であった。

大学教員になって8年。最も難しい問題を突きつけられた。

まてよ？実習や講義でお世話になっている介護事業所の社長が、新卒で就職してくれる学生はいないかなあって言ってきた。ありえないかもしれないけど、言ってみるか。

「訪問看護師は？」

「ホウモンカンゴシ？」

「在宅看護の実習行ったでしょ。病院じゃないし、家の近くに大きな介護事業所があるよ。しかも、福井県では卒業して初めて訪問看護師になった人はいないから、第一号になれるよ。」

「面白いっすねー」

翌春から、彼が福井県で第一号の訪問看護師になることが決まった。

しかし、現在の看護大学における教育は、4月から即戦力として働くことを想定していない。まず職場での研修があり、そこでは看護師としての技術、マナー、コミュニケーション等々、看護師として世の中に認めてもらい、お役に立てるまでになるには、国家試験はただの通過点である。看護師の業界では看護の質向上・医療安全の確保・早期離職防止の観点から、2010年4月より新人看護職員の卒後研修制度が努力義務化されているが、新卒者の就職がこれまでなかったところでは、卒後研修制度が存在するはずもない。

困った。本当に困った。

筆者自身は病棟勤務の看護師と行政保健師を経て大学教員となったため、訪問看護師の現場というものを知らない。学生の実習では大変お世話になっているし、市役所に勤めていた時代に介護保険制度が始まったため、訪問看護師さんたちと共に仕事をした経験はある。いや、共に経験したことしかない。自分の経験が役に立たない。何をどうすれば、彼が一人前の訪問看護師になる手助けとなるのだろうか。悩んだ。

しかし、就職するのは彼である。なりたいたいものになることが肝心なのではないだろうか。彼の周りの大人は、なりたいたいものになるために道を創ることが役割な

のではないだろうか。こんな風に思うのは、もう10年ほど前のNHK朝の連続テレビ小説「ちりとてちん」のおかげである。このドラマは福井県を舞台としていることもあり、毎日録画して見ていた。途中から大ファンとなりDVDまで購入した。

ドラマの中でヒロインは「落語家になりたい」と宣言する。それまでは途中で諦めたり投げ出したりする人生であったが、落語家になりたい気持ちだけは諦められなかった。若狭塗り箸職人であるヒロインの祖父は落語愛好家で、落語とヒロインを繋ぎ、師匠とヒロインを繋ぐ。途中で亡くなってしまいが、祖父の言葉はヒロインが生きていく道しるべとなっていく。

頭の中でヒロイン役の貫地谷しほりさんと彼の顔がなんどもなんどもダブった。そうだ、私はおじいちゃんになろう。途中で彼の前からいなくなるとしても、訪問看護師として生きていくための糧になるものを手渡そう。

決めた翌日から、これまで全国の新卒訪問看護師が受けた新人研修のデータを集め始めた。福井県では1人目だけれども、全国では新卒訪問看護師は当たり前になりつつあるので、先進地に学ぼうと考えた。その結果、新卒訪問看護師の教育研修は、開始当初は医療機関で看護技術を学ぶことがスタンダードであったが、近年では訪問看護の現場で新卒を育

てる取り組みが増加していた。医療機関では看護師がペアとなって行動することが多くなっていることから、看護学生時代の実習も同様の体験をしている。しかし、訪問看護は看護師が一人、あるいは他の職種の人と一緒に訪問することがほとんどなので、これに慣れてしまうと訪問看護ステーションでの単独行動が途端に怖くなることになる。これが主な理由であるが、さらに訪問看護師のアイデンティティは訪問看護の場でしか育たないのではないかという意見もみられていた(北出2017)。そうであるならば、両方のいいところ取りをしてみたらどうだろう? 医療機関だけ、訪問看護ステーションだけでは互いにメリットもデメリットもある。新卒訪問看護師にとって、効果的な教育研修とは、医療機関と訪問看護ステーションが協働してプログラムを創ることで、新卒訪問看護師にとってよりよい学びの環境を整えることになると考えた。

しかし、初めて新卒者を受け入れる訪問看護ステーション、初めて新卒訪問看護師を受け入れる大学病院だけで、育てられるのであろうか? 信じていないわけではなかったが、今まで手塩にかけた学生が育っていく様を自分も目にしたい! という欲と心配があった。それなら筆者自身が3番目の登場人物になればいいのではないだろうか。

このような背景を基に教育プログラム

の作成を始めた。訪問看護師のアイデンティティを見失うことなく、医療機関で学ぶメリットを最大限活用できるように、医療機関と訪問看護ステーションを行き来しながら学ぶプログラムを作ることにはできないだろうか。このことを思いつき、本学附属病院の看護部長に助けを求めた。

看護部長は面白がってくれると同時に快く研修の場を提供してくれた。これからは病院だけでなく病院の外で働く看護師も大事だよ。と、看護部挙げて附属病院内での研修体制を作り上げてくれた。

具体的には、1か月目は月曜日～金曜日の5日間のうち、1日を訪問看護ステーションで、その他の4日間を医療機関で、2か月目の最終週からは、週のうち2日を訪問看護ステーションで、その他の3日間を医療機関で、というように行ったり来たりすることとした。長期間どちらかに固めるのではなく、柔軟に行き来しながら、お互いの場で得た課題や



訪問看護ステーションと大学病院との研修プログラムの打合せ

目標を解決する。さらにこれに加えて、毎月大学で教員と面談することで、学生から社会人への転換をサポートし、かつ本人の希望に沿うプログラムの修正もリアルタイムで行った。

あれから3年。今、彼は次に入った新卒訪問看護師の指導者をしている。

「1年目の研修でよかったことって何？」

「それは病院で研修できたことですよ！あの時、学生時代にはできなかった看護技術を体験することができて、少しずつですけど自信がついていきました。『看護師』と患者さんから認められた瞬間というか」

「訪問看護師にいきなりなって、後悔ない？」

「ないですねえ」

ああ、これで良かったのだ。

やりたいことを仕事にすると、障壁となるものがあるならば、壁を取り除くことはできないが壁を低くすることはできるのではないだろうか。工夫次第でやりたい仕事に就くことができ、なりたいものになれるのなら、最初から飛び込めばいい。

筆者が彼から学んだこと。それは同じ体験をするならば躊躇するのではなく、面白がること。面白そう！と思えば、どんな困難に思えることでも困難の壁の高さを変え、登り切ることができる。

人間はやりたいことを仕事にすることができる。やりたいことで社会に貢献し、人のお役に立つことができることって素晴らしい。

<文献>

- 1) 山田雅子：新卒訪問看護師のための訪問看護師事業所就業促進プログラム開発に関する調査研究報告書，2014
- 2) 釜田和美，北出順子他：訪問看護ステーション・大学病院・大学のコラボにより新卒訪問看護師の人材育成を支援する「トリプルジョブトレーニング」の評価，第22回訪問看護等在宅ケア研究助成報告書，p1-12，2017

.....
<プロフィール> きたで じゅんこ

1989年 神奈川県立看護教育大学校卒

1989年 福井赤十字病院(看護師)

1992年 福井市役所(保健師) 保健行政及び高齢者福祉、介護保険行政に従事

2005年 福井大学医学系研究科看護学専攻修了

2008年 現職(在宅看護論及び保健師課程を担当)

研究テーマ：生活習慣病分野におけるポピュレーションアプローチ、公衆衛生史
趣味：観劇、阪神タイガース応援

.....

私が歩んだ労働者協同組合

百瀬 まゆみ (センター事業団 東京三多摩山梨事業本部
西多摩エリアマネージャー 兼FUSSA地域福祉事業所 所長)



この原稿の依頼をされたとき、若手リーダーという言葉に引っかかりました。私は、労協歴24年で40代を迎えそれでも若手リーダーなのかと…。ゆっくりキャリアアップさせて頂いた恩返しにはならないと思いますが、自分の歴史を紐解こうと思います。

1 【入団のきっかけ】

94年4月、高校3年生。東京都府中勤労福祉会館(企業組合労協センター事業団 府中事業所)の屋内プール監視員のアルバイトで採用されました。私は、改修工事後のプール清掃で、初めて事業所の仲間と顔合わせをしました。10代から30代のメンバーが中心の現場に、清掃とボイラー担当の組合員は、60代以上の幅広い世代がいる事業所でした。

「好きな事を仕事にしたい」と、就職活動を通じて思いが強くなり、この組織はどんな組織なのか?常勤になることができるのか?徐々に知る機会を増やしました。当時の小川所長は、楽しそうに協

同労働の協同組合は、主体性を持てればやりたいことを実現できる可能性があること・上下関係なくより良くするための議論ができること(飲みにケーション)・経営に関わることができることを語ってくれました。細かいことをごちゃごちゃ言われるより、私にはこの働き方が性に合うのではないかと直感的に思いました。3月高校を卒業し、プールのアルバイト代から出資して組合員となりました。協同組合の働き方を知らない両親には反対されましたが、小学校高学年からいじめ・不登校を繰り返してきた自分が、人を信じ・大切にし、お互いに補い助け合うことなどアルバイトを通じて知れたことがきっかけでした。

2 【入団から今までの歴史】

95年組合員となりプールの常勤者として勤務する中で、勤労福祉会館の清掃業務に携わり、ポリッシャーの使い方やガラス清掃、外周駆除の薬品撒布、庭の草刈り、プール清掃、会計・給与事務や

業務改善などを覚えました。プロ意識の高い60代・70代の方々には人生観と物を無駄にしない大切さを教わりました。

95年から96年、映画『病院で死ぬということ』の上映会から地域懇談会、市民と組合員が退団後活動できる場として東京高齢協設立に向け、ほんの少しお手伝いをさせていただきました。

97年7月立川相互病院の清掃受託が決定し、立ち上げの応援で何度か清掃の応援に行きました。

97年、命が宿り結婚、98年に出産を経て、99年4月プールの現場に復帰しました。

この頃、全国的にヘルパー養成講座の開催が広がり、八王子市担当の事務局として担うことになりました。

2000年には、東京事業本部三多摩エリアとなり、ヘルパー2級講座を全組合員が取得しようとする方針が出され、国分寺市・昭島市・調布市・町田市などのヘルパー講座開催のため動き始めました。同時に、市民に向け介護事業所を開所するため、自分自身が懇談会で呼びかけをするため、協同労働の協同組合について勉強しました。今は、組合員必携がありますが、当時は手探りでタジタジになりながら必死に学び、2000年10月、ワーカーズコープあおぞら(八王子市)が、開所しました。

02年3月、府中勤労福祉会館(府中事業所)閉館。

02年5月、立川事業所の清掃員と受講

生で、ワーカーズコープさくら(昭島市・現在閉所)の事業所を立ち上げました。

02年7月、国分寺地域福祉事業所けあ・ぼけっと(国分寺市・現在閉所)の所長就任。

国分寺市内を駆け回り、ヘルパーとサービス提供責任者・所長・経理担当として立川事業所の給与計算、そしてさくらの請求業務・会計・給与も併せて担っていました。団づくりは悩み苦しみ、組合員から信用を失い、閉所の決断を迫られ、お鍋を囲んで解散しました。

07年3月、ワーカーズコープさくら・国分寺地域福祉事業所けあ・ぼけっと閉所。

07年4月、立川事業所異動。

09年4月、立川市幸児童館 指定管理者選定。貸し館業務のサポートと新人組合員に法人のことを伝えるため、週1日勤務。

10年、指定管理者の受託獲得に向け、現場で作る企画書を大切に戦略会議実施。

12年4月、小平・国分寺・立川エリアスタッフとなり、法人理念を伝え、エリアマネージャーのサポートを行う。

U友地域福祉事業所の組合員が企画書作成。立川市若葉児童館・西砂児童館獲得。

12月、立川市子ども未来センター立ち上げ。岩田雅宏所長の仕事拡大への使命感に圧倒された。

13年5月、立川特区エリアマネー

ジャー就任。エリア会議運営と、仕事おこしの自治体行動を組合員と実施。

14年4月、立川市羽衣児童館・富士見児童館立ち上げ。同年10月立川市最後の児童館、錦児童館と上砂児童館の指定管理者のプレゼンテーションでは落選。この時プレゼンに初めて出ましたが、頭が真っ白になり緊張しました。私がプレゼンに参加しない方が良かったのではと今でも思いますが、その後のプレゼンにつながっているのが、貴重な場であったと思います。

16年4月、多摩中央エリアマネージャー就任。私の地元でもあるワーカーズコープの現場がない日野市に、現場の組合員と自治体行動を何度も行い、しんめい児童館の企画書を馬場智之所長と取り組み、業務委託が決定しました。

17年4月、西多摩エリアマネージャー就任。

前任のエリアマネージャーの評価が高く、信頼のある青梅市短期臨時学童(入札物件)をFUSSA地域福祉事業所の組合員と取り組みました。

また、同年11月、西多摩福祉事務所(東京都案件)の生活困窮者自立支援事業の指定管理者に挑戦をしましたが受託することができませんでした。

18年4月、西多摩エリアマネージャー兼FUSSA地域福祉事業所所長兼任。現在は、前任の所長がやりたくてもできなかった、組合員1人ひとりの疑問や不安を解消する取り組みを実施中。



3 【エピソード】

府中勤労福祉会館プール現場には、見た目50代、噂では30代の男性組合員がいました。その組合員が自転車で夜遅くうろうろしているのを目撃しました。後日、事情を聴くと給与が入った封筒を落としたと…。本当かな?と、私は疑ってしまいましたが、小川所長は「それは大変、本部と相談するから今日は2,000円でしのいでね」と、お金を渡しました。数か月後、同じ組合員が置き引きにあったことを伝えた時にも所長は、2,000円渡しました。個人的には所長がすごかったこともあり、この協同組合は、とことん人を信じ大切にするとところもあるのだと思いました。そんな人を大切にしていた所長が次の年に異動され、数年後退団され悲しかったことをときどき思い出します。

団会議には、狭い和室で東京事業本部の田中羊子本部長と菊地謙事務局長がときどき出席していました。音読が苦手な私は、労協新聞の読み合わせが大嫌いでした。人前で読めない漢字に苦戦し、恥ずかしく声が震え泣きそうになりながら読んでいたことを覚えています。しかし、プールでの休憩の放送や労協新聞の読み合わせのおかげで、今は少し人前で音読ができ、自分の意見を表現することの訓練になっていたのではないかと感謝しています。

八王子市で開催したヘルパー養成講座

で、現南多摩エリアマネージャーの水胤恵美子さんと出会いました。講座終了後にヘルパーステーションを立ち上げることを目的に、懇談会を開催しましたが、1回目の参加は、水胤さんお1人でした。主催の高齢協での立ち上げではなく、労協について熱く語った岡本章寛事務局長の話に耳を傾け、懇談会を重ねるごとに参加者が増え、開所までに紆余曲折がありながら、結団式のお泊り会を行い、親睦を深め、泣いて笑ってワーカーズコープあおぞらが立ち上がりました。

国分寺地域福祉事業所けあ・ぼけっとの開所式で、私が所長をする知らせを聞きパニックになりながらの開所式であったことを思い出します。

社会連帯委員会が設立され、三多摩事業本部の代表となり、定期的に東京地方委員会に参加するため、池袋本部(光文社ビル)まで行きました。各事業本部の取り組みを知り、刺激を受けました。プレゼンの選定作業は、査定を含め終電近くまで議論をしたことを懐かしく思います。

昔のことは、何度も繰り返し思い出し、語ってきたので鮮明に覚えています。最近のことは、目の前のことに必死で思い出せないのと、エピソードをこれ以上書くと他のことが書けないので終わります。

4 【大切にしてきたこと】

組合員と向き合ってきた、所長・エリ

アマネージャー・事務局長・本部長との尊い出会いと別れを繰り返し、見習うべきところは見習い、正すところは正す精神を大切にしてきました。

10代のころ誰も信じられず、人間不信になっていた私だからこそ、人を信じ喧嘩をしても言いたいことを伝え、その後仲直りをした上で、ともに大切だと思える関係性と裏切られても恨まないことが大切だと思っています。

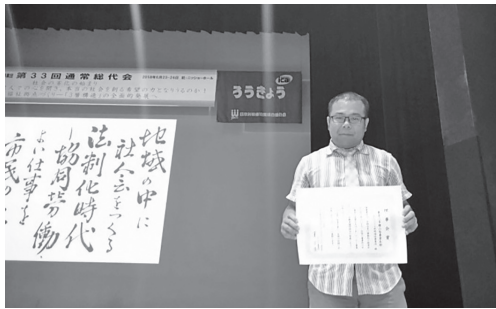
体験・体感できる貴重な機会を、拒否し実行しないことは、もったいないことだと思います。失敗しても、事件にならない限り失敗を許す器がある組織だと思って、したいことを大切に、自分の限界を自分で決めないことが大切だと思います。

一人ひとり人生観も価値観も違います。その中でいっぱい喋り、笑い・怒り・泣き、諦めず伝え続けることの良さを胸張って語れる自分であるためには、全国で協同労働の協同組合で切磋琢磨している全国の組合員の存在を大切にしたいです。

5 【今後の展望】

今回の総代会で理事会賞を受賞した、FUSSA 地域福祉事業所。自ら推薦状を書きその想いが届き、受賞できましたことを嬉しく思います。

数年前、FUSSA 地域福祉事業所は要閉鎖対象事業所でした。経営指標上困難



FUSSA 地域福祉事業所
副所長 神山 千歳

な事業収入のもと、運営を行ってきました。組合員自ら経営部を立ち上げ、2回の指定管理者としての更新を勝ち取り、経営改善に取り組み、昨年の冬季一時金は、経営指標をクリアして支給するまでとなりました。

踏ん張っている組合員が報われ、生活に少しでも余裕が生まれ、ワーカーズコープで働くことが楽しいと思える事業所づくりと、多くの困難に向き合える持

続可能なみんなのおうちを立ち上げ、ワーカーズコープの現場がない自治体を1つでも埋める取り組みを、組合員と分かち合いながら進めていきたいと心から思っています。

組合員から寄せられる、不安や不満こそ大切な意見として、これから出会う組合員や市民のために尽力していきたいと思っています。

そうやって先人たちは30年以上ワーカーズコープを支え、ないものを作り出し、実践と経験を積み上げてきたと思っています。この協同の発見を最後まで読み、退団しようと悩んでいる方が踏ん張ってくれたら幸いです。そして、あなたはあなたらしく、自分の人生を歩んでください。人間関係は面倒ですが、良いことも嫌なことも長く続けて来たからこそ見える景色と、自分らしくあるための協同がここにはあります。



夏休みを8月末もらい、家族で無茶々園のある西予市明浜を訪問。ちょうど無茶々園の事務所を移した狩江笑学校の2周年の音楽祭に参加する。約150人の住民が集まり、子どもたちの発表から、プロによる演奏が夕暮れより校庭で行われ、子どもも大人も混ざって一緒に歌い踊る姿に感動。信号もコンビニもない小さな集落に、これだけ子ども(とにかく2~3人兄弟が多い!)を持つ若い世代が居て、ごちゃまぜで楽しんでいる姿は、いまではなかなか見られない。無茶々園の若い職員も多く参加し、地域のメンバーに混ざってお祭りを下支えしており、地域で仕事と生活が重なるこの働き方に、日本各地から若い人が集まる。うちの子ともたちもミカンの段々畑を車で回り、船に乗り魚を釣るといふ、明浜の日常生活に触れ、笑顔の夏休みとなった。

労働者協同組合法(仮称)に関しては、与党協同労働に関するワーキングチームの議員が視察で労協ながのを訪問。また担当する厚生労働省勤労者生活課は担当者を増員し新メンバー全員でセンター事業団東京中央事業本部各事業所を訪問。どのように話し合い合意形成をしているのか、どのように仕事おこしに取り組んでいるのか、どのように多様な仲間と共に働いているのかなど、日ごろの協同労働の運営についての質問があった。特に当事者の家族による放課後等デイサービス・就労継続支援・グループホームの設立や、当事者を含

めた運営や当事者の能力を活かした仕事おこしについて、高い評価があった。折しも国の障がい者就労率の偽装が判明していただけない、単に就労者として受け入れるだけでなく、話し合い、共に汗を流し、地域を巻き込み受け止める地域づくりまでの実践は見るものを納得させる迫力があつた。尼崎市長など各自治体長との懇談も続き、どこでも協同労働による地域課題を解決する住民主体の仕事おこしには関心が集まり、広島市協同労働プラットフォームをモデルに取り組みたいという話が相次ぐ。

協同労働リーダー基礎研修2018が、8月22日~23日、宮城県登米市で20名の参加者(地域労協12名、高齢協4名、運営スタッフなど8名)のもと開催。東日本大震災後に職業訓練などを経て、多様な苦労を伴いながら、被災者や地域住民による廃校を活用した高齢者や障がい者支援、生活困窮者自立支援と連携した困難を抱えた若者と地域住民による自前の林業や地域課題解決の助け合い事業などを学ぶ。共に働く、共に生きる、協同労働の本質に迫る実践に、協同労働とは何かを考え、自分たちで何ができていて、何が必要なかを学ぶことができた。

法制化時代に向けて、各地で協同労働を学び、発信し、共感する新たな仲間と共に、新たな協同労働を作る動きを作っていきたい。



9月8日に第2回協同総研理事会を開催いたしました。お忙しい中ご出席いただいた理事の皆さまお疲れ様でした。いよいよ法制化運動も佳境に入り、秋の臨時国会に議案が提出される可能性が高まってきましたが、嵐の前の静けさを思わせる状況の中、落ち着いて討論をおこなうことができました。

今理事会では、島村理事長より「一般社団法人協同総合研究所アイデンティティ宣言(仮称)案」の作成構想について提案がありました。会員名簿を見ていただくと「一般社団法人協同総合研究所設立趣意書(1991年2月7日)」が掲載されていますが、実際には一般社団法人が設立されたのは2013年であり、この設立趣意書は法人格を持たない任意団体として出発した際に作成されたものです。当時とは時代状況も大きく変化し、労働者協同組合法(仮称)の制定が実現されようとしている時代にあって、労働者協同組合・運動の振興のための事業と並んで、協同の思想の社会的普及に携えることを使命とする協同総研の理念を新たに「宣言」としてまとめる必要があるという提案でした。

そのために「宣言」起草委員会を立ち上げて、来季又は再来季の総会にその草案を提出できるように準備を進めることが決定しました。

午後の研究会では、「人の育ちを中心とする組織戦略」というテーマで、労働政策研究・研修機構の山崎憲さんにご講演いただきました。

営利企業であろうと非営利組織であろうと、ほとんど全ての組織にとって人材育成は大きな課題となっています。激しい競争原理によって運営されるグローバル企業でさえも、若手社員一人ひとりの話を徹底的に聞き取り、日常的な対話を大切にして、モチベーションアップをはかる仕組みが工夫されていて、かつての「日本的経営」から学んでいるということでした。話し合いを全ての基礎とする私たちのような協同労働の組織と、何が同じで何が違うのか、協同労働の人材育成とはどうあるべきなのか、とても刺激的で考えさせられるお話でした。

協同総研の事務所は、労協連本部と同じフロアの一番奥の小部屋にありましたが、建物の構造的な問題で猛暑の日には空調が十分に機能せず難儀しておりました。もう真夏の猛暑日は過ぎてしまいましたが、この度、全体のフロアと隔てていた壁を撤去していただき、閉鎖された空間から開放感あふれる事務所スペースとなりました。近くにお寄りの際にはどうぞ気軽にお立ち寄りください。

研究所活動日誌 (2018.8.16~9.15)

8月

- 16日(木) 田中夏子理事とイタリア視察についての打合せ
- 17日(金) 山崎憲氏(労働政策研究・研修機構)訪問。研究会打合せ。
- 20-24日(月-金) 沖縄国際大学 ワーカーズコープ寄附講座(村上了太先生)
- 20日(月) 沖縄キリスト教学院大学懇談(與那原事務局長、玉城直美先生)
- 22日(水) JYCフォーラム よい働き方研究会打合せ
- 23-24日(木-金) センター事業団 本部長・事務局長会議
- 26日(日) 障害福祉青年フォーラムinTOKYO
- 27日(月) 第6回ワーカーズコープ設立・運営ハンドブック準備会
- 28日(火) 日本フロンティアネットワーク 総会
- 30日(木) 村山昇さん(「働き方の哲学」著者)と懇談

- 30-31日(木-金) ともにはたらくPJ会議
- 31日(金) 第2回ふくろう社会連帯カレッジ(アーサー・ビナード)

9月

- 3日(月) 協同総研事務局会議
- 4日(火) 労協連常勤5役会議
- 5日(水) 福島大学寄附講座、映画「Workers被災地に起つ」記者会見、中井福島大学学長懇談
- 6-7日(木-金) 全国事業推進会議
- 8日(土) 2018年度第2回協同総研理事会、2018年度第1回協同総研第1回研究会(山崎憲氏報告)「人の育ちを中心とする組織経営」
- 10日(月) 日本協同組合学会常任理事会
- 11日(火) 第3回協同組合関係研究所座談会

今後の活動予定 (2018.9.16~10.30)

9月

- 18日(火) 第7回ワーカーズコープ設立・運営ハンドブック準備会
- 9月21日(金)-10月8日(月) スペイン研究・調査(高橋巖さん、廣田裕之さん、岡安顧問、相良)
- 25日(火) 第3回ふくろう社会連帯カレッジ(白井聡さん)
- 29日(土) 社会連帯フォーラム 保坂展人×金満里

10月

- 2日(火) 労協連合同5役会議
- 4日(木) 労協連理事会

- 5-6日(金-土) 第3回全国名人・達人サミット(山梨県西桂町)
- 8日(月) JYCフォーラム よい働き方研究会
- 11日(木) 東京基督教大学寄附講座打合せ
- 12日(金) 第2回川崎平右衛門研究会
- 15日(月) 第7回労協連本部シンポジオン
- 16日(火) 協同総研事務局会議
- 18日(木) 社会的企業研究会100回記念冊子編集委員会
- 24日(水) 第4回ふくろう社会連帯カレッジ(辻信一さん)
- 25日(木) センター事業団 本部長・事務局長会議

2018年度 協同総研理事会予定

第3回11/17、第4回3/16、第5回理事会5/18 第7回総会 2019年6月29日(土)



協同の発見誌活用プロジェクト



「協同」

の

実践・研究の宝庫

今、知りたい情報と問いたいテーマがここに!!

一般社団法人 協同総合研究所

特別価格
1冊 1,000円
販売中!!



会員募集中!!

- 年会費：個人会員／購読会員 12,000円
 学生・障がい者 6,000円 団体会員 30,000円
- 会員サービス：会員の方は、総会への参加(年1回)及び下記のサービスが受けられます
 - ・所報『協同の発見』誌(毎月1回)の会員価格適用での頒布
 - ・各種研究会への参加費の会員価格適用
 - ・書籍購入の際の会員価格適用